

埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第301集

大里郡大里町

下田町遺跡Ⅱ

大里地区高規格堤防整備事業関係

埋蔵文化財発掘調査報告

—Ⅱ—

(第2分冊)

2005

国土交通省 関東地方整備局

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

目次

(第1分冊)

口絵

序

例言

凡例

目次

I 発掘調査の概要	1
1. 発掘調査に至る経過	1
2. 発掘調査・報告書作成の経過	2
3. 発掘調査・整理・報告書刊行の組織	5
II 遺跡の立地と環境	7
III 第2次調査の概要	13
IV 第2次調査の遺構と遺物	21
1. 住居跡	21
2. 掘立柱建物跡	45
3. 井戸跡	59
4. 土坑	86
5. ビット	105
6. 溝跡	119
7. グリッド・表採	197
8. 第2次調査東区出土遺物の自然科学分析	201

写真図版

(第2分冊)

V 第3次調査の概要	203
VI 第3次調査の遺構と遺物	215
1. 方形周溝墓	215

2. 住居跡	228
3. 掘立柱建物跡	283
4. 柱穴列	306
5. 井戸跡	310
6. 円形周溝状遺構	429
7. 土坑	433

(第3分冊)

8. ビット	513
9. 火葬土坑	563
10. 溝跡	581
11. 道路状遺構	729
12. グリッド・表採遺物	735
VII まとめ	763
VIII 下田町遺跡の自然科学分析	787
1. 下田町遺跡の自然科学分析(遺構編)	789
2. 下田町遺跡の自然科学分析(遺物編)	810
3. 下田町遺跡出土の銅製品の成分分析	838

(写真図版)

写真図版

付図

挿 図 目 次

(第2分冊)	
第158図	下田町遺跡基本土層 ……………203
第159図	第3次調査グリッド配置図 ……………205
第160図	下田町遺跡第3次調査 西区一面全体図(1) ……………206
第161図	下田町遺跡第3次調査 西区一面全体図(2) ……………207
第162図	下田町遺跡第3次調査 西区一面全体図(3) ……………208
第163図	下田町遺跡第3次調査 西区二面全体図(1) ……………209
第164図	下田町遺跡第3次調査 西区二面全体図(2) ……………210
第165図	下田町遺跡第3次調査 西区二面全体図(3) ……………211
第166図	下田町遺跡第3次調査 東区全体図(1) ……………212
第167図	下田町遺跡第3次調査 東区全体図(2) ……………213
第168図	下田町遺跡第3次調査 東区全体図(3) ……………214
第169図	方形周溝墓全体図 西区 ……………216
第170図	方形周溝墓全体図 東区 ……………217
第171図	第5号方形周溝墓 ……………218
第172図	第5号方形周溝墓出土遺物 ……………219
第173図	第6号方形周溝墓(1) ……………220
第174図	第6号方形周溝墓(2) ……………221
第175図	第6号方形周溝墓出土遺物 ……………222
第176図	第7号方形周溝墓 ……………223
第177図	第7号方形周溝墓出土遺物 ……………223
第178図	第8号方形周溝墓 ……………224
第179図	第8号方形周溝墓出土遺物 ……………224
第180図	第9号方形周溝墓 ……………226
第181図	第9号方形周溝墓出土遺物 ……………226
第182図	第13号方形周溝墓 ……………227
第183図	第13号方形周溝墓出土遺物 ……………227
第184図	住居跡全体図 西区 ……………228
第185図	住居跡全体図 東区 ……………229
第186図	第68号住居跡 ……………231
第187図	第68号住居跡出土遺物 ……………231
第188図	第69号住居跡 ……………232
第189図	第69号住居跡出土遺物 ……………232
第190図	第70号住居跡 ……………233
第191図	第70号住居跡出土遺物 ……………233
第192図	第71号住居跡 ……………234
第193図	第71号住居跡出土遺物 ……………234
第194図	第72号住居跡 ……………235
第195図	第72号住居跡出土遺物 ……………235
第196図	第73号住居跡 ……………236
第197図	第74号住居跡・カマド遺物出土状況 ……237
第198図	第74号住居跡出土遺物 ……………238
第199図	第75号住居跡出土遺物 ……………238
第200図	第75・77号住居跡 ……………239
第201図	第76号住居跡 ……………240
第202図	第78号住居跡カマド ……………240
第203図	第79号住居跡 ……………241
第204図	第79号住居跡出土遺物 ……………241
第205図	第80a号住居跡 ……………242
第206図	第80a号住居跡カマド遺物出土状況 ……243
第207図	第80b・80c号住居跡 ……………244
第208図	第80a・80b・80c号住居跡遺物出土状況 ……245
第209図	第80号住居跡出土遺物(1) ……………246
第210図	第80号住居跡出土遺物(2) ……………247
第211図	第81号住居跡 ……………248
第212図	第81号住居跡出土遺物 ……………249
第213図	第82号住居跡 ……………250
第214図	第82号住居跡出土遺物(1) ……………251
第215図	第82号住居跡出土遺物(2) ……………252
第216図	第82号住居跡遺物出土状況 ……………253
第217図	第83号住居跡 ……………254

第218图	第83号住居跡出土遺物	254	第255图	第104号住居跡	282
第219图	第84・85号住居跡	255	第256图	第104号住居跡出土遺物	282
第220图	第84号住居跡出土遺物	256	第257图	掘立柱建物跡・柱穴列全体图 西区	284
第221图	第85号住居跡出土遺物	257	第258图	掘立柱建物跡・柱穴列全体图 東区	285
第222图	第86号住居跡	258	第259图	第28号掘立柱建物跡	287
第223图	第86号住居跡出土遺物	258	第260图	第28号掘立柱建物跡出土遺物	287
第224图	第87号住居跡	259	第261图	第29号掘立柱建物跡	288
第225图	第87号住居跡出土遺物	259	第262图	第29号掘立柱建物跡出土遺物	288
第226图	第88号住居跡 (1)	260	第263图	第30号掘立柱建物跡	289
第227图	第88号住居跡 (2)	261	第264图	第30号掘立柱建物跡出土遺物	289
第228图	第88号住居跡出土遺物	262	第265图	第31号掘立柱建物跡	290
第229图	第89号住居跡	264	第266图	第31号掘立柱建物跡出土遺物	290
第230图	第89号住居跡出土遺物	264	第267图	第32号掘立柱建物跡出土遺物	291
第231图	第90号住居跡・出土遺物	265	第268图	第32号掘立柱建物跡 (1)	292
第232图	第91号住居跡	266	第269图	第32号掘立柱建物跡 (2)	293
第233图	第91号住居跡出土遺物	266	第270图	第33号掘立柱建物跡	294
第234图	第92号住居跡	267	第271图	第33号掘立柱建物跡出土遺物	295
第235图	第92号住居跡出土遺物	267	第272图	第34号掘立柱建物跡	295
第236图	第93号住居跡	268	第273图	第36号掘立柱建物跡	296
第237图	第93号住居跡出土遺物	268	第274图	第37号掘立柱建物跡	297
第238图	第94号住居跡	269	第275图	第37号掘立柱建物跡出土遺物	297
第239图	第95号住居跡	270	第276图	第38号掘立柱建物跡	298
第240图	第95号住居跡遺物出土狀況	270	第277图	第40号掘立柱建物跡	299
第241图	第95号住居跡出土遺物	271	第278图	第41号掘立柱建物跡 (1)	300
第242图	第96号住居跡	271	第279图	第41号掘立柱建物跡 (2)	301
第243图	第96号住居跡遺物出土狀況	272	第280图	第41号掘立柱建物跡出土遺物	301
第244图	第96号住居跡出土遺物	273	第281图	第43号掘立柱建物跡	302
第245图	第97号住居跡	274	第282图	第43号掘立柱建物跡出土遺物	302
第246图	第97号住居跡出土遺物	275	第283图	第45号掘立柱建物跡	303
第247图	第98号住居跡	276	第284图	第46号掘立柱建物跡	304
第248图	第99号住居跡	277	第285图	第47号掘立柱建物跡出土遺物	304
第249图	第100号住居跡	278	第286图	第47号掘立柱建物跡	305
第250图	第100号住居跡出土遺物	278	第287图	第49号掘立柱建物跡	305
第251图	第101号住居跡	279	第288图	柱穴列 (1)	307
第252图	第101号住居跡出土遺物	280	第289图	柱穴列 (2)	308
第253图	第102・103号住居跡	281	第290图	井戸跡全体图 西区一面	311
第254图	第102・103号住居跡出土遺物	281	第291图	井戸跡全体图 西区二面	312

第292図	井戸跡全体図 東区	313	第329図	井戸跡出土遺物 (20)	360
第293図	井戸跡 (1)	315	第330図	井戸跡 (18)	362
第294図	井戸跡 (2)	316	第331図	井戸跡出土遺物 (21)	362
第295図	井戸跡出土遺物 (1)	317	第332図	井戸跡出土遺物 (22)	364
第296図	井戸跡 (3)	319	第333図	井戸跡出土遺物 (23)	365
第297図	井戸跡 (4)	320	第334図	井戸跡出土遺物 (24)	366
第298図	井戸跡出土遺物 (2)	321	第335図	井戸跡出土遺物 (25)	367
第299図	井戸跡 (5)	324	第336図	井戸跡出土遺物 (26)	368
第300図	井戸跡 (6)	326	第337図	井戸跡出土遺物 (27)	369
第301図	井戸跡 (7)	327	第338図	井戸跡出土遺物 (28)	370
第302図	井戸跡出土遺物 (3)	328	第339図	第216号井戸跡 井戸枠側面図 (1)	370
第303図	井戸跡出土遺物 (4)	329	第340図	井戸跡出土遺物 (29)	371
第304図	井戸跡 (8)	331	第341図	第216号井戸跡 井戸枠側面図 (2)	371
第305図	井戸跡 (9)	332	第342図	井戸跡出土遺物 (30)	372
第306図	井戸跡出土遺物 (5)	333	第343図	井戸跡 (19)	373
第307図	井戸跡出土遺物 (6)	334	第344図	井戸跡出土遺物 (31)	374
第308図	井戸跡 (10)	336	第345図	井戸跡 (20)	375
第309図	井戸跡 (11)	337	第346図	井戸跡出土遺物 (32)	376
第310図	井戸跡出土遺物 (7)	338	第347図	井戸跡出土遺物 (33)	377
第311図	井戸跡出土遺物 (8)	339	第348図	井戸跡出土遺物 (34)	378
第312図	井戸跡出土遺物 (9)	340	第349図	井戸跡出土遺物 (35)	379
第313図	井戸跡出土遺物 (10)	341	第350図	井戸跡出土遺物 (36)	380
第314図	井戸跡出土遺物 (11)	342	第351図	井戸跡 (21)	382
第315図	井戸跡 (12)	343	第352図	井戸跡出土遺物 (37)	384
第316図	井戸跡出土遺物 (12)	345	第353図	井戸跡出土遺物 (38)	385
第317図	井戸跡 (13)	346	第354図	井戸跡出土遺物 (39)	386
第318図	井戸跡 (14)	347	第355図	井戸跡 (22)	387
第319図	井戸跡 (15)	348	第356図	井戸跡出土遺物 (40)	388
第320図	井戸跡出土遺物 (13)	349	第357図	井戸跡 (23)	390
第321図	井戸跡 (16)	352	第358図	井戸跡出土遺物 (41)	391
第322図	井戸跡出土遺物 (14)	353	第359図	井戸跡出土遺物 (42)	392
第323図	井戸跡 (17)	354	第360図	井戸跡 (24)	393
第324図	井戸跡出土遺物 (15)	355	第361図	井戸跡出土遺物 (43)	395
第325図	井戸跡出土遺物 (16)	356	第362図	井戸跡 (25)	396
第326図	井戸跡出土遺物 (17)	357	第363図	井戸跡出土遺物 (44)	397
第327図	井戸跡出土遺物 (18)	358	第364図	井戸跡 (26)	399
第328図	井戸跡出土遺物 (19)	359	第365図	井戸跡出土遺物 (45)	400

第366図	井戸跡 (27)	401	第399図	土坑 (11)	460
第367図	井戸跡 (28)	403	第400図	土坑 (12)	462
第368図	井戸跡出土遺物 (46)	404	第401図	土坑出土遺物 (4)	464
第369図	井戸跡出土遺物 (47)	405	第402図	土坑 (13)	465
第370図	井戸跡 (29)	406	第403図	土坑出土遺物 (5)	466
第371図	井戸跡 (30)	407	第404図	土坑 (14)	467
第372図	井戸跡 (31)	410	第405図	土坑 (15)	469
第373図	井戸跡出土遺物 (48)	411	第406図	土坑 (16)	471
第374図	井戸跡出土遺物 (49)	412	第407図	土坑 (17)	473
第375図	井戸跡 (32)	414	第408図	土坑出土遺物 (6)	475
第376図	井戸跡 (33)	416	第409図	土坑遺物出土状況 (2)	477
第377図	井戸跡出土遺物 (50)	417	第410図	土坑出土遺物 (7)	478
第378図	円形周溝状遺構全体図 西区	430	第411図	土坑 (18)	479
第379図	円形周溝状遺構全体図 東区	431	第412図	土坑 (19)	481
第380図	第5号円形周溝状遺構	432	第413図	土坑出土遺物 (8)	482
第381図	第5号円形周溝状遺構出土遺物	432	第414図	土坑 (20)	483
第382図	土坑全体図 西区一面	434	第415図	土坑 (21)	485
第383図	土坑全体図 西区二面	435	第416図	土坑 (22)	487
第384図	土坑全体図 東区	436	第417図	土坑 (23)	489
第385図	土坑 (1)	437	第418図	土坑 (24)	491
第386図	土坑 (2)	438	第419図	土坑 (25)	493
第387図	土坑出土遺物 (1)	439	第420図	土坑出土遺物 (9)	494
第388図	土坑 (3)	441	第421図	土坑 (26)	496
第389図	土坑 (4)	443	第422図	土坑 (27)	498
第390図	土坑出土遺物 (2)	444	第423図	土坑 (28)	500
第391図	土坑 (5)	446	第424図	土坑 (29)	502
第392図	土坑 (6)	448	第425図	土坑 (30)	504
第393図	土坑 (7)	450	第426図	土坑 (31)	505
第394図	土坑 (8)	452	第427図	焼成遺構 (1)	506
第395図	土坑 (9)	454	第428図	焼成遺構 (2)	507
第396図	土坑 (10)	456	第429図	炭化物・炭化米出土土坑	508
第397図	土坑出土遺物 (3)	457	第430図	土坑墓	509
第398図	土坑遺物出土状況 (1)	458			

表 目 次

(第 2 分册)

第 51 表	第 5 号方形周溝墓出土遺物觀察表	…219	第 83 表	第 97 号住居跡出土遺物觀察表	…275
第 52 表	第 6 号方形周溝墓出土遺物觀察表	…222	第 84 表	第 100 号住居跡出土遺物觀察表	…278
第 53 表	第 7 号方形周溝墓出土遺物觀察表	…223	第 85 表	第 101 号住居跡出土遺物觀察表	…280
第 54 表	第 8 号方形周溝墓出土遺物觀察表	…224	第 86 表	第 102·103 号住居跡出土遺物觀察表	…281
第 55 表	第 9 号方形周溝墓出土遺物觀察表	…226	第 87 表	第 104 号住居跡出土遺物觀察表	…282
第 56 表	第 13 号方形周溝墓出土遺物觀察表	…227	第 88 表	第 28 号掘立柱建物跡出土遺物觀察表	…287
第 57 表	第 68 号住居跡出土遺物觀察表	…231	第 89 表	第 29 号掘立柱建物跡出土遺物觀察表	…288
第 58 表	第 69 号住居跡出土遺物觀察表	…232	第 90 表	第 30 号掘立柱建物跡出土遺物觀察表	…289
第 59 表	第 70 号住居跡出土遺物觀察表	…233	第 91 表	第 31 号掘立柱建物跡出土遺物觀察表	…290
第 60 表	第 71 号住居跡出土遺物觀察表	…234	第 92 表	第 32 号掘立柱建物跡出土遺物觀察表	…291
第 61 表	第 72 号住居跡出土遺物觀察表	…235	第 93 表	第 33 号掘立柱建物跡出土遺物觀察表	…295
第 62 表	第 74 号住居跡出土遺物觀察表	…238	第 94 表	第 37 号掘立柱建物跡出土遺物觀察表	…297
第 63 表	第 75 号住居跡出土遺物觀察表	…239	第 95 表	第 41 号掘立柱建物跡出土遺物觀察表	…301
第 64 表	第 79 号住居跡出土遺物觀察表	…241	第 96 表	第 43 号掘立柱建物跡出土遺物觀察表	…302
第 65 表	第 80 a·80 b·80 c 号住居跡出土遺物觀察表	…247	第 97 表	第 47 号掘立柱建物跡出土遺物觀察表	…304
第 66 表	第 81 号住居跡出土遺物觀察表	…249	第 98 表	第 216 号井戸跡井戸杵材觀察表	…363
第 67 表	第 82 号住居跡出土遺物觀察表 (1)	…252	第 99 表	井戸跡出土遺物觀察表 (1)	…419
第 68 表	第 82 号住居跡出土遺物觀察表 (2)	…253	第 100 表	井戸跡出土遺物觀察表 (2)	…420
第 69 表	第 83 号住居跡出土遺物觀察表	…254	第 101 表	井戸跡出土遺物觀察表 (3)	…421
第 70 表	第 84 号住居跡出土遺物觀察表	…256	第 102 表	井戸跡出土遺物觀察表 (4)	…422
第 71 表	第 85 号住居跡出土遺物觀察表	…257	第 103 表	井戸跡出土遺物觀察表 (5)	…423
第 72 表	第 86 号住居跡出土遺物觀察表	…258	第 104 表	井戸跡出土遺物觀察表 (6)	…424
第 73 表	第 87 号住居跡出土遺物觀察表	…259	第 105 表	井戸跡出土遺物觀察表 (7)	…425
第 74 表	第 88 号住居跡出土遺物觀察表 (1)	…262	第 106 表	井戸跡出土遺物觀察表 (8)	…426
第 75 表	第 88 号住居跡出土遺物觀察表 (2)	…263	第 107 表	井戸跡出土遺物觀察表 (9)	…427
第 76 表	第 89 号住居跡出土遺物觀察表	…265	第 108 表	井戸跡出土遺物觀察表 (10)	…428
第 77 表	第 90 号住居跡出土遺物觀察表	…265	第 109 表	井戸跡出土遺物觀察表 (11)	…429
第 78 表	第 91 号住居跡出土遺物觀察表	…266	第 110 表	第 5 号円形周溝狀遺構出土遺物觀察表	…432
第 79 表	第 92 号住居跡出土遺物觀察表	…267	第 111 表	土坑出土遺物觀察表 (1)	…509
第 80 表	第 93 号住居跡出土遺物觀察表	…268	第 112 表	土坑出土遺物觀察表 (2)	…510
第 81 表	第 95 号住居跡出土遺物觀察表	…271	第 113 表	土坑出土遺物觀察表 (3)	…511
第 82 表	第 96 号住居跡出土遺物觀察表	…272	第 114 表	土坑出土遺物觀察表 (4)	…512

V 第3次調査の概要

下田町遺跡は、平成12年度から平成16年度まで発掘調査がおこなわれた。平成12年度に実施された第1次調査は、村宮老人施設建設に伴う発掘調査として大里町教育委員会により実施され、弥生時代の方形周溝墓が調査された。平成13年度（第2次調査）から平成16年度（第5次調査）の発掘調査は、東西約90m、南北約380mの長方形の調査区に対し、4ヶ年計画で調査を実施した。

本書の第2分冊から第4分冊の報告は、平成14年度におこなわれた第3次調査の成果である。第3次調査区は、第2次調査区の南側の続きにあたり、東西約90m、南北約94m、調査面積は約8700㎡である。さらに南側は第4次・第5次調査において調査がおこなわれている。調査区は用水路によって東西に分けられ、西区では遺構確認面が2面検出された。

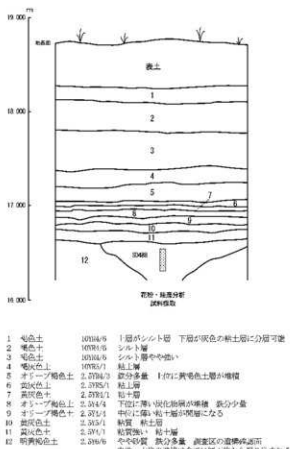
基本層序については、第3次調査区の東区の南端で記録・観察をおこなった。実測図を東区の南壁西端と中央付近の2ヶ所で作成し、中央付近の面図の方を第158図に示した。中世および古代の遺構確認面は第11層下面である。層序自体に大きな違いや変化はみられないが、西端と中央の断面図を比較すると、東側に向かって緩やかに下がっていく地形が確認できた。その傾斜の度合いは20mで6cm程度である。これは、下田町遺跡第2次・第3次調査の調査区全体における遺構確認面が、第2次調査西区南西部を頂点として、極めて緩やかなから南北および東側へ傾斜している地形の状況と符合する。

検出された遺構数は、方形周溝墓6基、住居跡37軒、掘立柱建物跡17棟、柱穴9条、井戸跡17基、円形周溝状遺構2基、土坑355基、ビット多数、火葬土坑27基、溝跡301条、道路状遺構2条である。出土遺物の総量は、コンテナ308箱ほどになった。遺物の時期は、縄文時代、弥生時代中期・後期末から古墳時代初頭、古墳時代前期から後期、奈良・平安時代、中世のものがある。縄文時代の遺物はごくわずかで、

付近に縄文時代の遺跡の存在を示唆するものである。遺物の主体は奈良・平安時代および中世である。

以下に、各遺構にみられる特徴をまとめる。

住居跡は、古墳時代中期から平安時代のものが検出された。古墳時代後期の住居跡の分布は、西側と北側に偏りをみせる。第2次調査で検出されたような、住居跡の周囲に溝を巡らせた可能性のある住居跡が第83号住居跡など第2次調査区の続きである西区の北側でみられる。また、大型住居跡の第88号住居跡は、第377号溝跡と第411号溝跡に東側を囲まれ、第41号掘立柱建物跡に隣接し、さらに住居跡の西側の一部に溝跡が巡る点も注目される。奈良時代の住居跡の多くは調査区の中央付近で確認されている。住居跡には、主軸方向を北西にとるものとはほぼ北方向にとるもの二者があり、前者のカマドは長



第158図 下田町遺跡基本土層

い煙道部を持たないが、後者では長い煙道部を持つというそれぞれに異なる特徴がみられる。平安時代の住居跡の分布は東区に偏りみせ、ほぼ北に軸方向をとる共通した特徴がみられる。

掘立柱建物跡は、古墳時代後期、奈良・平安時代、中世のものが検出された。古墳時代後期の建物には2間×2間の総柱建物、1間×1間、4間×4間の側柱建物があり、いずれも北西-南東方向に軸方向をとる。奈良・平安時代には、建物の軸方向が南北軸に変化するようである。今回調査された中で最も規模が大きい第32号掘立柱建物跡は、奈良時代から平安時代にかけての遺構で、2間×3間で東西の両面に庇が設けられていた。

柱穴列は、建物跡の一部のみが検出された可能性のあるものなどが含まれている。調査区内で大小無数のピットが検出されており、これらの一見単独とみられるピットの中にも、本来、掘立柱建物跡や柱穴列などであったものが含まれている可能性が極めて高い。

井戸跡は、古墳時代後期、奈良・平安時代、中世のものが検出された。規模には大小あり、中世に直径の大きい井戸跡、古代には直径の小さい井戸跡が多い傾向があるが、必ずしも規模によって時期が明瞭に分かれるものではないようである。井戸枠が検出された井戸跡は3基のみであったが、この3基以外にも、本来井戸枠が備わっていたものの、片付けや転用のために抜き取られた可能性のある木材が出土する井戸跡もみられる。検出された3基の井戸枠は3様で、横木を井桁状に四角く組んだもの、曲物を底に据えて周囲に縦の長い杭を打ち込み固定したものと、中央に曲物だけを据えたものがみられた。

円形溝状遺構は、第2次調査でも検出されており、いずれも古墳時代後期のものとみられる。周辺との遺構と関連する可能性はあるものの、遺物はほとんど出土せず、関連する遺構の特定は困難である。遺構の性格については、さらなる検討が必要である。

土坑は、弥生時代中期後半、古墳時代前期・後期、

奈良・平安時代、中世のものが検出された。土坑の規模と形態はさまざまで、機能・用途も多岐に渡ったと思われる。土坑として調査したなか、中々なかを焼いた可能性のある焼成遺構、土坑墓など機能の一端が推測できるものがあつた。

焼成遺構は6基検出された。壁面が被熱を受けた土坑、炭化物が多量に堆積する土坑、炭化米を多量に出土した土坑など検出状況に違いがみられ、各々に違うものを焼いたものと推測される。

炭化物を多量に出土した土坑もある。底面のほぼ全体に炭化物・炭化材が広がり、焼土粒子も含まれているものの、壁面が被熱を受けていないことから、内部で短時間の燃焼をおこなったか、単に燃えかすを廃棄した可能性が考えられる。

第497号土坑では最下層に炭化米を多量に含むやや厚めの層が確認された。出土した炭化米の量はコンテナに換算して1~1.5箱分あったとみられ、出土状況や量の点において特筆される。壁面の一部が被熱を受けており、何らかの理由で土坑内において米を燃やした可能性が考えられる。

土坑墓は、第322号土坑と第350号土坑である。第322号土坑は平安時代のものである。いずれも人の歯が出土した。

ピットについては、検出された数が極めて多く、そのほとんどが柱跡であるとみられる。復元はできなかったが、何らかの構築物の一部として機能したピットが多数含まれていると思われる。

火葬土坑は、すべて中世のもので、遺存状況に良・不良はあるが、基本的に軸方向を南北にとり、東西のいずれかに送風口とみられる細い突出部が設けられるとの共通した形態を持っている。人骨が多く遺存したのもあり、分析の結果、拾骨の可能性が示唆された。

溝跡は、古墳時代後期、奈良・平安時代、中世のものが検出された。特筆されるのは中世の溝跡で、第2次調査区から続いて南北および東西方向のびており、さらに第4次調査区へと続いて調査区内を

方形に区画している。また、北端で検出された平安時代の第286号溝跡では数多くの遺物が投棄されていた。古墳時代の第372号溝跡も規模が大きく、同じ軸方向をとる掘立柱建物跡が出土していることから、関係が注目される。

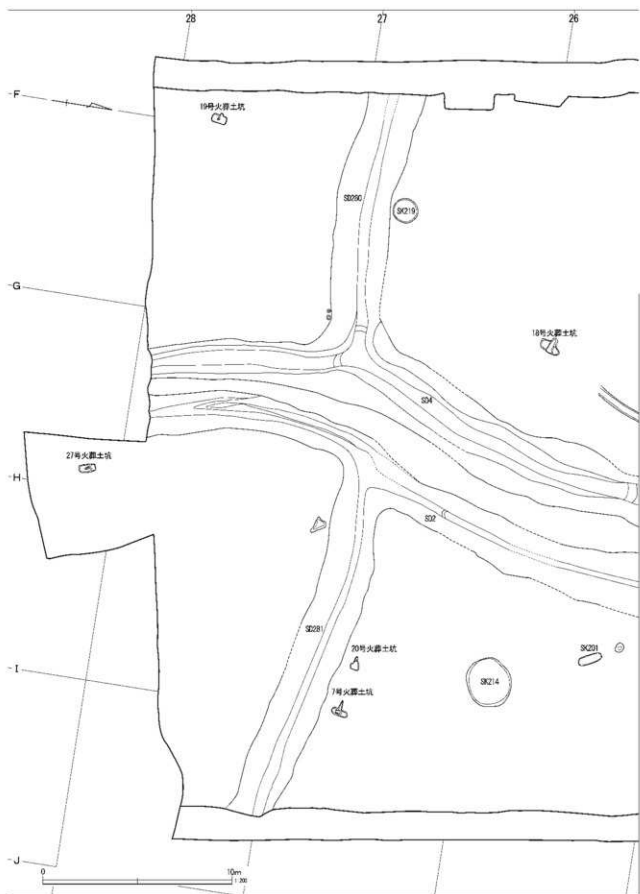
道路状遺構は平安時代のもので、波板状遺構が同

じ平安時代の溝跡に沿って等間隔に連続し、南北方向にのびているのが確認された。

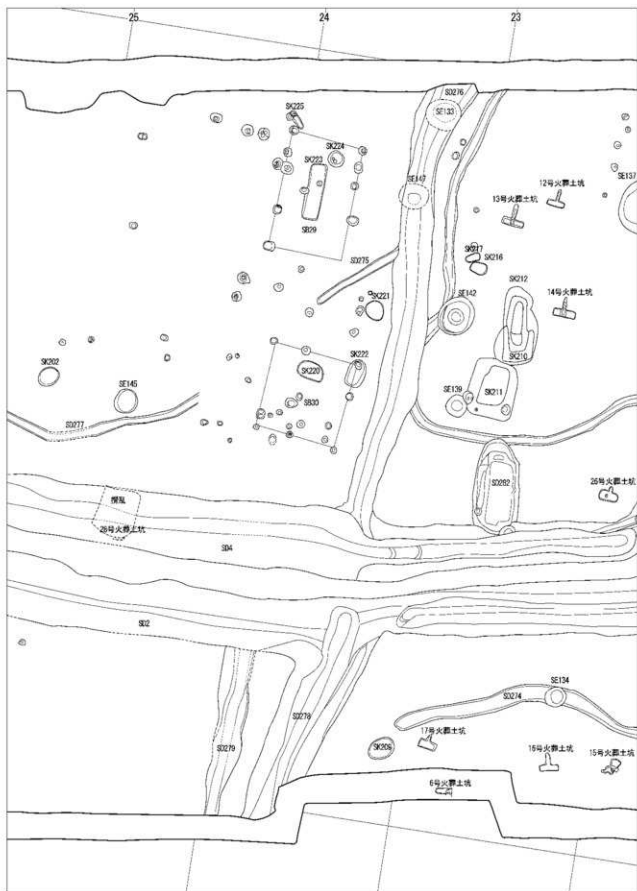
出土遺物で特筆されるのは、「占部豊川」の線刻が施された紡錘車である。文献史料にみられる同名の人物との関係は不明だが、占部姓の人物がいた証として注目される。



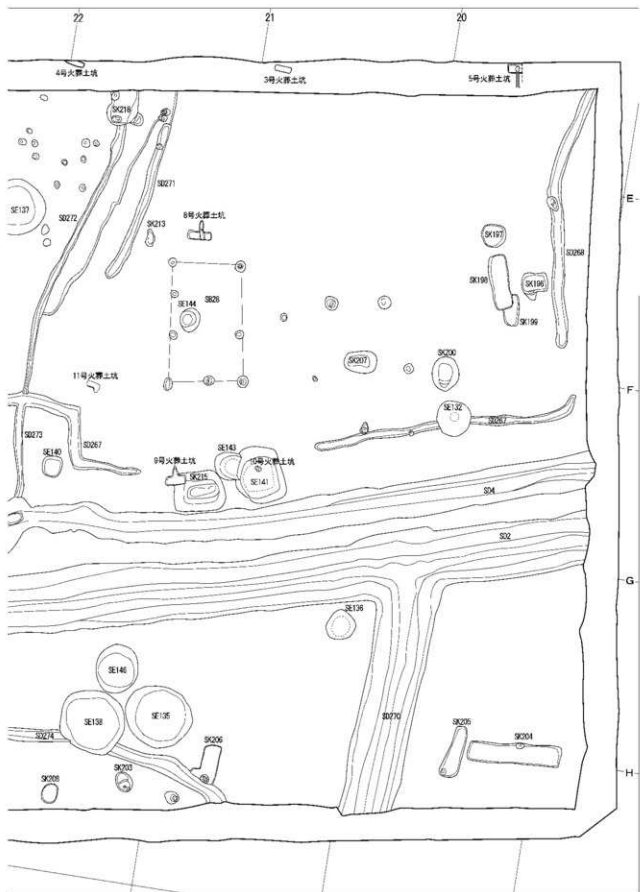
第159図 第3次調査グリッド配置図



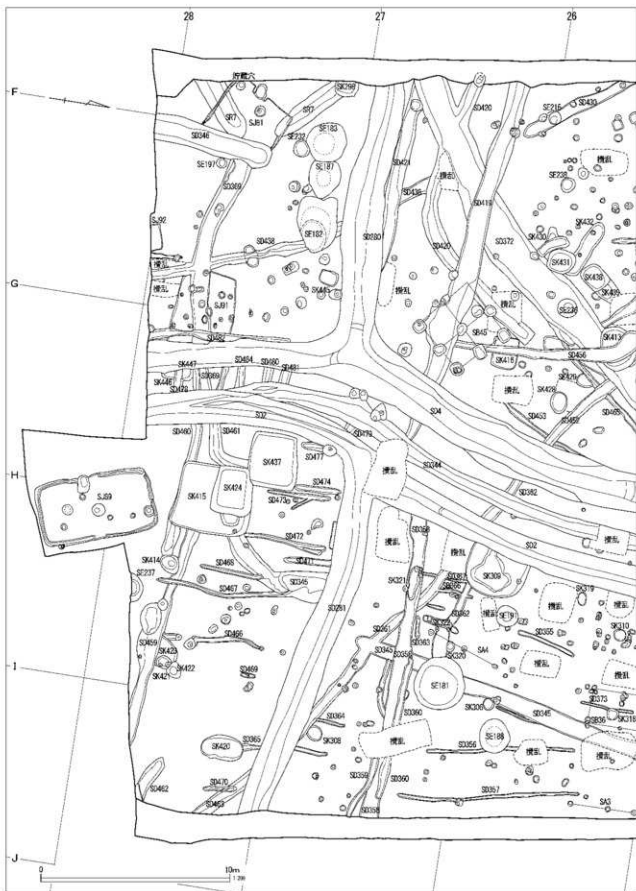
第160图 下田町遺跡第3次調査西区一面全体图(1)



第161图 下田町遺跡第3次調査西区一面全体图(2)



第162图 下田町遺跡第3次調査西区一面全体图(3)



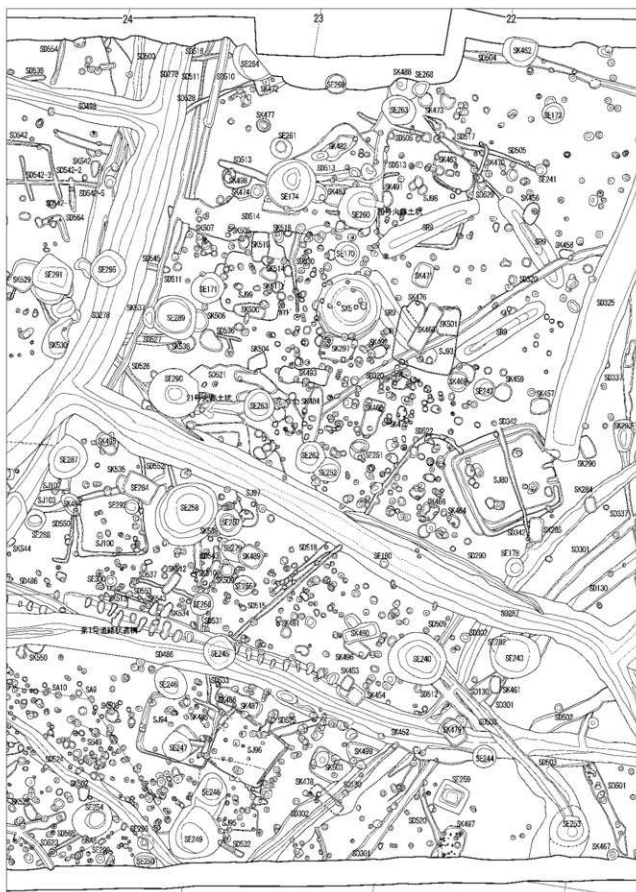
第163图 下田町遺跡第3次調査西区二面全体图 (I)



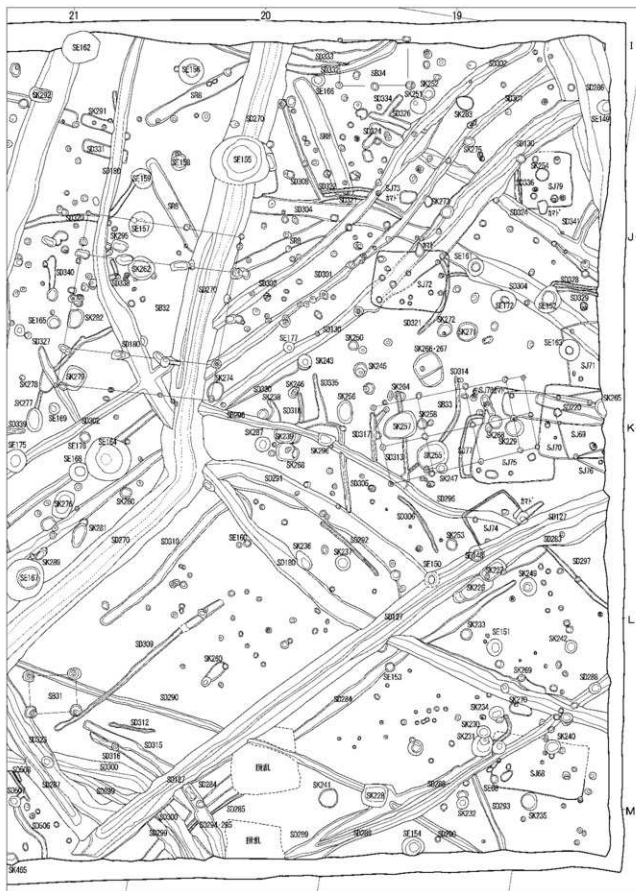
第165図 下田町遺跡第3次調査西区二面全体図 (3)



第166团 下田町遺跡第3次調査東区全体图(1)



第167図 下田町通跡第3次調査東区全体図(2)



第168図 下田町遺跡第3次調査東区全体図(3)

VI 第3次調査の遺構と遺物

1. 方形周溝墓

第3次調査では、方形周溝墓が6基検出された。遺構の時期は、遺構の形態および出土遺物から、弥生時代後期末から古墳時代前期と考えられる。第2次調査のものと同合わせると合計10基となるが、方形周溝墓は、さらに平成15年度の第4次調査、平成16年度の第5次調査においても検出されている。弥生時代後期末から古墳時代前期の墓域全体でいえば、今回報告する方形周溝墓は、1基もしくは数基ずつが広く点在する墓域の中で北寄りの一部に相当すると思われる。以下にその特徴についてまとめる。

第3次調査で検出された方形周溝墓の群在状況は、第5号方形周溝墓と第6号方形周溝墓が隣接して北寄りに構築されており、それ以外の第7号方形周溝墓、第8号方形周溝墓、第9号方形周溝墓の3基は調査区の中央や南寄りにそれぞれ単独でつくられている。分布にはまとまりがみられず、点々と構築されているのが特徴である。第13号方形周溝墓については、第4次調査区において、隣接する方形周溝墓が確認されている。

第3次調査で検出された方形周溝墓で確認された共通の特徴の一つとして挙げられるのは、いずれの方形周溝墓でも、古墳時代中期以降の遺構の覆土とは明らかに異なる、褐色の比較的均質な覆土が堆積していた点である。

軸方向がN-25°E-E-N-60°Eの範囲におさまる点も特徴的で、構築にあたっての遺構の向きに規則性・規範があったことを示唆している。軸方向の共通性については、第2次調査で検出された方形周溝墓から第5次調査で検出された方形周溝墓を通して、共通してみられる特徴である。

今回の調査で検出された方形周溝墓が第2次調査で検出された方形周溝墓と異なる点は、第13号方形周溝墓を除く5基が、四隅が切れる形態である点である。第2次調査で検出された方形周溝墓は、弥生

時代中期後半の四隅が切れる形態の1基を除く第2～4号方形周溝墓がすべて、周溝の1箇所か2箇所しか切れる形態であった。四隅が切れるタイプの方形周溝墓は、相対的に古く位置づけられる傾向があり、第5号および第6号方形周溝墓は、出土遺物の時期を加味しても、第2次調査で検出された方形周溝墓よりも古い可能性がある。ただし、遺構の新旧関係は、遺構形態と遺物の両者を検討するべきであり、第7号方形周溝墓など出土遺物の極端に少ない方形周溝墓が多い現状では、新旧の判断には慎重にならざるを得ない。

規模については、第5号方形周溝墓と第6号方形周溝墓の隣接する2基が長さ11m規模と最も大きい。しかし他の方形周溝墓も大差はなく、8号方形周溝墓と9号方形周溝墓は8～10m規模である。

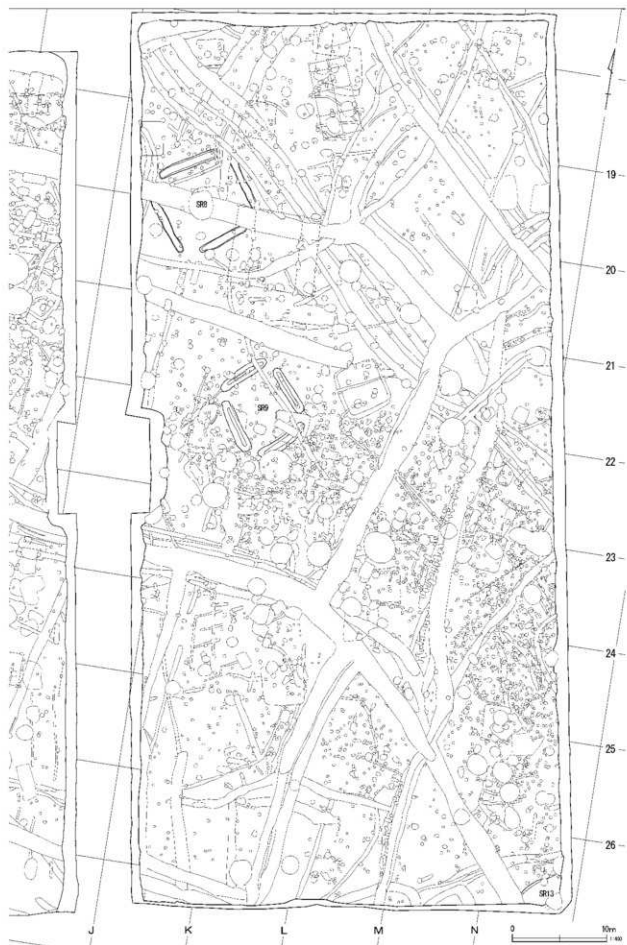
出土遺物の全体的な傾向としては、出土遺物量が極めて少ないことが挙げられる。完形土器は第6号方形周溝墓から出土した器台1点のみである。

第2次調査で方形周溝墓が検出されたのは、調査区南寄りであったが、その南側の続きである今回の第3次調査では、調査区北端から南端まで広く分布することが確認された。また、平成15年度および平成16年度に調査がおこなわれた南側の続きの調査区でも複数基の方形周溝墓が検出された。第2次調査区の北端で確認された遺構の切れ目が、当時の自然堤防の縁周辺であったとすれば、弥生時代後期末から古墳時代前期に営まれた墓域が、自然堤防の縁からやや内側に入った位置から、自然堤防上に広く展開していた様子がうかがわれる。なお、第4次調査区内では、古墳時代前期の居住域も検出されており、墓域に隣接して居住域を構えるという集落の構造が明らかになっている。

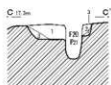
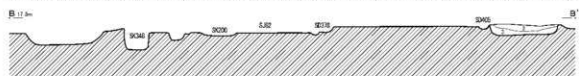
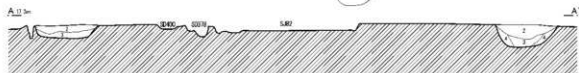
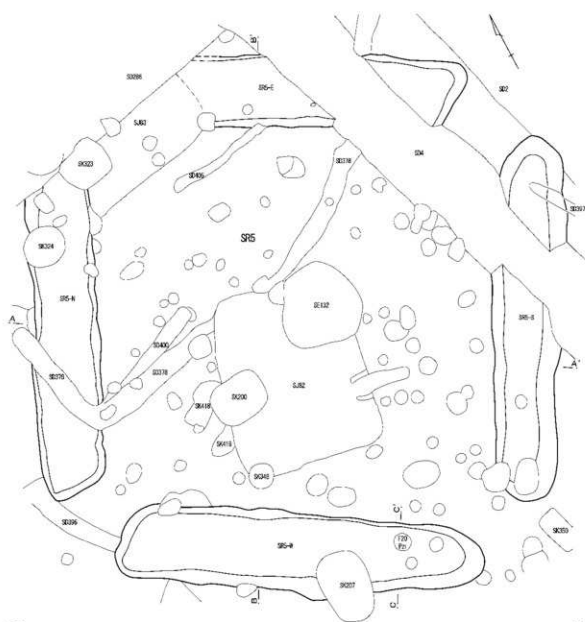
なお、第13号方形周溝墓は南に続く第4次調査区にまたがっており、周溝の続きが検出されている。



第169图 方形周冢墓全体图 西区



第170图 方形周溝墓全体图 東区



- 第5号方形周溝基
 1 赤褐色土 10994.2 しまりあり 粘性や砂あり
 2 濃い黄褐色土 10994.3 濃い黄褐色土粒(φ3~7m)20% しまりあり 粘砂や砂あり
 3 濃い赤褐色土 10994.3 濃い赤褐色土ブロック(φ3~5cm)2% しまりあり 粘砂や砂あり
 4 濃い黄褐色土 10994.3 ロームブロック(φ1~3cm)5% しまりあり 粘砂や砂あり

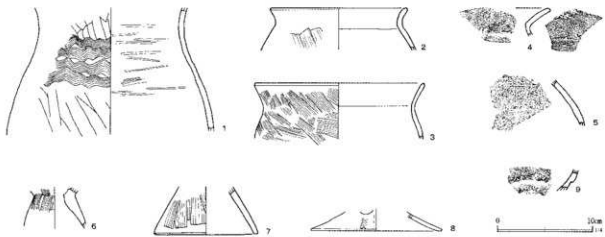
0 2m

第171図 第5号方形周溝基

第5号方形周溝墓(第171図)

西区二面の北端にあるE-19、F-19、E-20、F-20グリッドに位置する。第6号方形周溝墓が南西側に隣接して構築され、2基で群を成している。遺構の形態は、4本の周溝で囲まれ、四隅が切れる形態である。北の隅は第286号溝跡および第83号住居跡に大きく壊され、東側でも中世の第4号溝跡に大きく切られている。

全体の規模は、東西11.24m、南北11.06mで、確認面からの周溝の深さは、最も浅い東側の周溝で24cm、最も深い南側の周溝で47cmである。各周溝の規模は、北側周溝が、検出された範囲での長さで6.85m、幅1.34m、深さ29cm、東側周溝が、検出された範囲での長さで6.15m、幅1.53m、深さ24cm、南側周溝が長さ7.73m、幅1.42m、深さ47cm、西側周溝が長さ7.67m、幅1.75m、深さ28cmである。軸方向は、N-27-Eをとる。方台部の盛土や埋葬施設などは確認できなかった。周溝の方台部側の立ち上がりが直線的との形態的特徴がみられる。



第172図 第5号方形周溝墓出土遺物

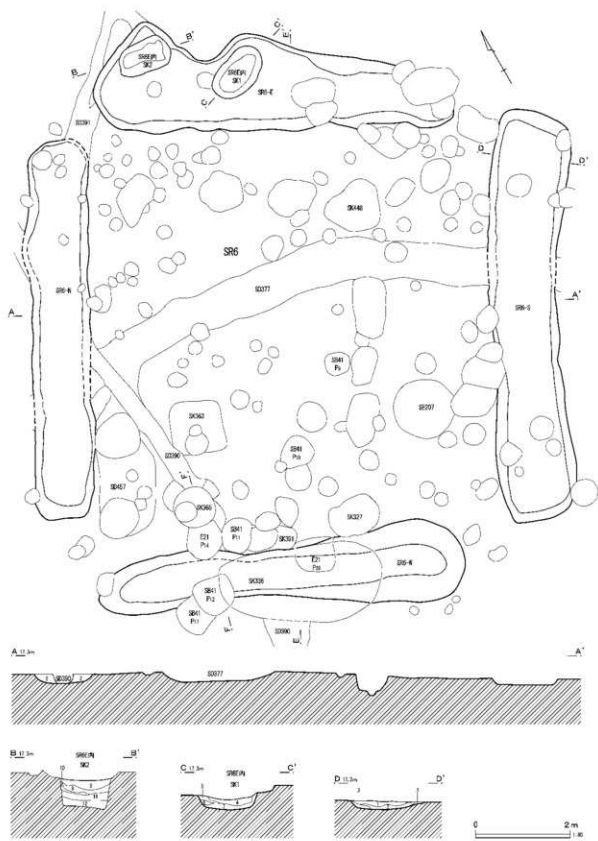
第51表 第5号方形周溝墓出土遺物観察表(第172図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	残存	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
1	土師器	甕	—	[13.1]	—	破片	長石 石英 砂粒	普通	にぶい橙	E	157
2	土師器	甕	(14.6)	[4.4]	—	口縁破片	砂粒 赤粒	普通	にぶい黄橙	S	157
3	土師器	甕	(18.2)	[5.9]	—	破片	石英 砂粒 小礫	普通	にぶい橙	E	157
4	土師器	甕	—	[3.0]	—	破片	石英 砂粒	普通	にぶい黄	W	157
5	土師器	甕	—	[4.9]	—	破片	長石 石英 小礫	不良	にぶい褐	E	157
6	土師器	台付甕	—	[4.3]	—	破片	石英 白粒	普通	明赤褐	E	157
7	土師器	台付甕	—	[5.0]	(6.0)	脚部破片	石英	普通	にぶい黄橙	W	157
8	土師器	高坏	—	[2.0]	(14.3)	破片	長石 石英 砂粒	普通	にぶい橙	E	157
9	土師器	壺	—	[2.3]	—	破片	角 石英 砂粒	普通	にぶい灰	N	157

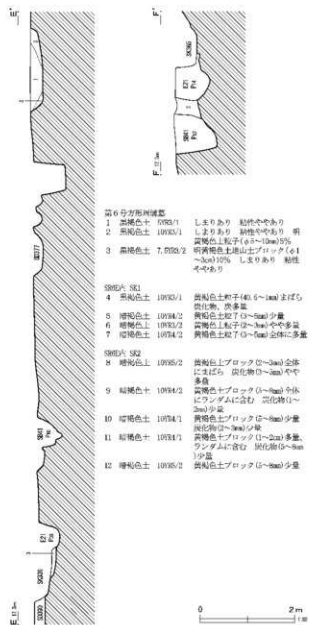
周溝では4本とも基本的に、地山土の粒子を含む層と地山土ブロックを含む層という2層の堆積がみられる。自然堆積の後に人為的に埋め戻した可能性が考えられる。

なお、調査当初は多くの遺構が重複していたため、方形周溝墓と認識されず、各周溝には個別に溝番号が付けられた。旧番号はN(SD392)、E(SD395)、S(SD387)、W(SD374)である。

出土遺物は混入遺物も含め、全体で小破片のみが100点ほどと少ない。出土量が最も多かったのは東側の周溝で、図示できた遺物の多くを占めている。出土遺物では、甕の破片が多いという特徴がみられる。台付甕の口縁部や脚部が多い中で、1の梅播波状文の甕が東側の周溝から出土しており、注目される。この甕は、外面を目の細かいハケで縦方向に調整した後、7本一単位の梅を用いて波状文を3段施している。内面には粗い横ヘラミガキを施している。2-7は台付甕、8は高坏の脚部、9は壺の口縁部である。



第173图 第6号方形周溝基(1)



第174図 第6号方形周溝墓(2)

第6号方形周溝墓(第173・174図)

西区二面の北側にあるE-20、F-20、E-21、F-21グリッドに位置する。第5号方形周溝墓の南側に隣接して構築され、2基で群を構成している。第5号方形周溝墓と同様、四隅が切れる形態で、4本の周溝が検出された。二基の方形周溝墓を兼ねる周溝はなく、周溝は各4本ずつで方形周溝墓としては独立している。周溝は第5号方形周溝墓と比べて全体的に浅く、明瞭ではない。方台部の盛土や主体

部は確認できなかった。中央部を第377号溝路が横断し、北側の周溝と南側の周溝を、第390号溝路が北側の周溝と西側の周溝の一部をそれぞれ切っている。また、西側周溝の中央部では第336号土坑が周溝を大きく壊して構築されている。

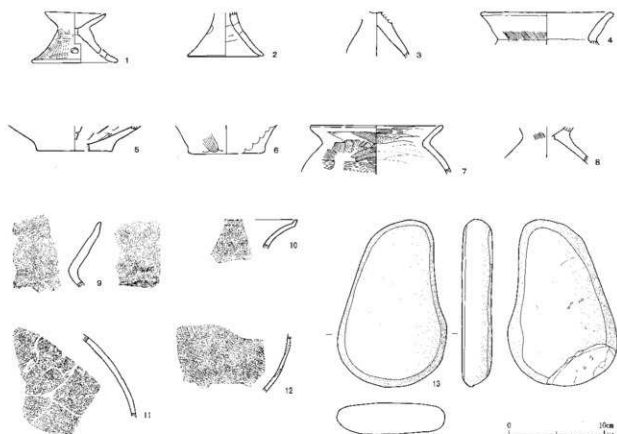
全体の規模は11.61m×11.07mで、確認面からの溝の深さは、最も浅い南側の周溝で14cm、最も深い西側の周溝で37cmである。各周溝の規模は、北側周溝が長さ7.96m、幅1.20m、深さ19cm、東側周溝が長さ7.11m、幅2.04m、深さ30cm、南側周溝が長さ8.66m、幅1.40m、深さ14cm、西側周溝が長さ7.75m、幅1.03m、深さ37cmである。軸方向はN-29°-Eをとる。

本遺構に特徴的な施設として、東側の周溝の中で、検出された溝中土坑がある。溝中土坑は、本来あるべき周溝の幅からは外側にはみ出しており、周溝自体が溝中土坑に合わせて広がっている。溝中土坑は、周溝中の西寄りに、外側に寄せて、2基つくられている。土坑の長軸は、周溝の向きに対してSK1は20°、SK2は15°の傾きをもって構築されている。

SK1は周溝の中央やや西寄りに構築され、規模は長軸125cm、短軸77cmの長楕円形で深さ36cmである。出土遺物は破片ばかりだが、新しい時期の遺物の混入はみられず、五須期の甕、壺の破片が出土している。甕の破片が多くを占めている。

SK2は、SK1の西側、周溝の西縁に構築され、規模は長軸110cm、短軸65cmの隅丸長方形で、深さ64cmである。深くまっすぐ下へ掘り込まれている。SK1と同様、新しい時期の遺物の混入は認められなかった。出土遺物は小片が50余と少ないが、東海系の壺の破片、台付甕の口縁部などが出土している。土坑の覆土は4層に分けられ、壁が崩れて三角に堆積した後、炭化物と焼土を含む層が形成されている。その上には地山土粒子を含む層が乗り、最終的には自然堆積により埋まったと考えられる。

多くの遺構が重複していたため、調査当初は方形周溝墓と認識できず、各周溝には個別の溝番号が付



第175図 第6号方形周溝墓出土遺物

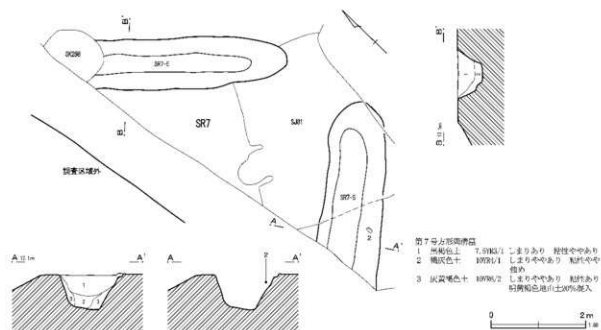
第52表 第6号方形周溝墓出土遺物観察表(第175図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	残存	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
1	土師器	器台	6.5	5.5	9.2	ほぼ完形	石英 砂粒	普通	明赤褐	E 赤彩	
2	土師器	器台	—	[4.6]	(8.2)	破片	石英 白粒	良好	にふい檜	N	157
3	土師器	高坏	—	[5.8]	—	1/4	長石 砂粒	普通	橙	E	157
4	土師器	壺	(14.0)	[3.4]	—	口縁破片	雲 石英 白粒	普通	にふい褐	E内 SK2	157
5	土師器	壺	—	[2.6]	(8.0)	底部破片	砂粒 小礫	普通	暗灰色	E	157
6	土師器	壺	—	[3.0]	(8.0)	破片	石英 砂粒 赤粒	普通	橙	W 内面欠け	157
7	土師器	台付壺	(14.2)	[4.9]	—	口縁破片	雲 石英	普通	にふい褐	E内 SK2	157
8	土師器	台付壺	—	[4.5]	—	破片	石英 砂粒	普通	橙	E	157
9	土師器	壺	—	[7.0]	—	破片	雲 石英 砂粒 赤粒 小礫	普通	橙	E	157
10	土師器	壺	—	[3.1]	—	破片	石英 砂粒 赤粒	普通	灰黄褐	E	157
11	土師器	壺	—	[8.8]	—	破片	砂粒	不良	明赤褐	E 東海系	157
12	土師器	壺	—	[6.2]	—	破片	砂粒	普通	にふい檜	E	157
13	石製品	石	幅10.5	長17.5	厚3.2	ほぼ完形				擦痕	

されていた。旧番号はN(SD401)、E(SD375)、S(SD376)、W(SD403)である。

周溝からの出土遺物は少なく、小片がほとんどであった。東側の周溝では、他の周溝に比べて遺物が多く出土しており、この東側の周溝から今回の調査で唯一の完形土器となる器台が出土した。1の器台は、外面および内面受部、脚部下端に赤彩を施し、

外面全面に縦方向のミガキの後に横方向に数条のミガキを施している。脚部側面の孔は1ヶ所のみである。2も器台とみられ、脚の孔が4方向にあげられていたようである。3も器台の破片、4～6・9～11は壺、7・8・12は甕である。11は東海系の壺の破片で、胴部に施した2段の連弧文の下に列点文を施している。13の礫は表面が平滑で擦痕がある。



第176図 第7号方形周溝墓



第177図 第7号方形周溝墓出土遺物

第53表 第7号方形周溝墓出土遺物観察表 (第177図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	残存	胎土			焼成	色調	出土位置・備考	図版			
							雲	石英	赤粒							
1	土師器	壺	—	[3.0]	(13.4)	底部1/4	雲	長石	石英	砂粒	赤粒	白粒	普通	橙	S	
2	土師器	壺	—	[1.9]	(14.2)	底部破片	雲	石英	赤粒	小石			普通		S	
3	土師器	甕	—	[1.3]	5.5	底部のみ	雲	石英	赤粒				普通	にぶい赤黒	E	内面赤彩

第7号方形周溝墓 (第176図)

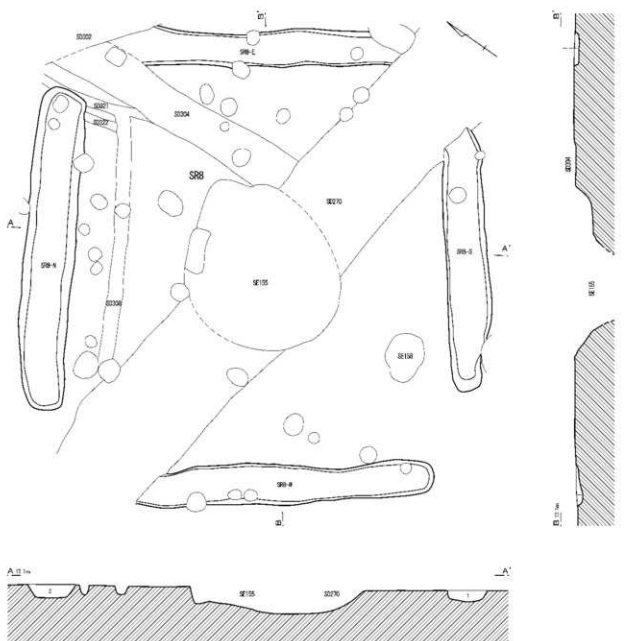
西区二面の南西隅にあるE-27、F-27グリッドに位置する。西側2/3は調査区域外にあたり、調査区域内では東側1/3が検出された。検出されたのは東側と南側の2本の周溝の各一部で、方台部や主体部は確認されなかった。南側の周溝と東側の周溝の一部で第81号住居跡が重複しており、周溝の上部の一部を切っている。また、第298号土坑が東側の周溝の西端を切る。本遺構は、一隅が切れる形態の方形周溝墓の可能性もあるが、付近にある第5・6号方形周溝墓の存在や溝の形状が類似することから、四隅が切れる形態である可能性が高い。

全体の規模は、現存値で5.12m×7.44mである。周溝の掘り込みは深くしっかりしており、溝の断面

形は逆台形を呈する。確認面からの深さは、東側の周溝で52cm、南側の溝で74cmである。各周溝の規模は、東側周溝が、検出された範囲での長さで3.86m、幅1.06m、深さ52cm、南側周溝が、検出された範囲での長さで3.47m、幅1.34m、深さ74cmである。軸方向はN-40°-Wをとる。

覆土は地山土ブロックを含まない均質な土であり、堆積のあり方は第5号方形周溝墓や第6号方形周溝墓にある土層と共通している。その堆積状況とは、地山土の粒子を含む層と地山土ブロックを含む層という2層の堆積であり、第2層付近まで自然堆積で埋まった後に、人為的に埋め戻した可能性が考えられる。

多くの遺構が重複していたため、調査当初は方形



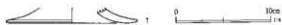
第8号方形周溝墓

- 1 褐色土 10%以上 しまりあり 粘性ややあり
 2 黄褐色土 10%以上 黄褐色地山土砂子(φ1~20)1% しまりあり 粘性ややあり

第178図 第8号方形周溝墓

第54表 第8号方形周溝墓出土遺物観察表 (第179図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	残存	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
1	土師器	高杯	—	[1.6]	(14.0)	破片	砂粒 赤粒	普通	にぶい程	E	



第179図 第8号方形周溝墓出土遺物

周溝墓と認識できず、各周溝には個別に溝番号が付

された。旧番号はE (SD368)、S (SD371)である。

出土遺物は極めて少なく、壺とみられる土器の底部が3点出土した。3の底部の内面に赤彩が施されている。

第8号方形周溝墓(第178図)

東区の北西にあるI-19、J-19、I-20、J-20グリッドに位置する。南側15mの地点には第9号方形周溝墓が位置しているが、本遺構に隣接する方形周溝墓はなく、単独で構築されている。

本遺構では周溝が4本検出されたが、いずれも浅く、確認された覆土は1層のみであった。方台部の中央および周溝の一部を中世の第270号溝跡、第155号井戸跡に大きく壊されている。また、北隅は第302号溝跡、第304号溝跡に切られている。遺構の形態は四隅が切れるタイプで、方台部の盛土や主体部などは確認できなかった。

全体の規模は10.00m×9.70mで、ほぼ正方形を呈している。確認面からの周溝の深さはいずれも浅く、本来の周溝の上半部は後世に大きく削平され、底面付近のみが確認された状況である。深さは、最も深い北側の周溝で28cm、最も浅い周溝で14cmである。各周溝の規模は、北側周溝が長さ6.83m、幅1.00m、深さ28cm、東側周溝は検出された範囲での長さ6.15m、幅0.80m、深さ14cm、南側周溝は検出された範囲での長さ5.54m、幅0.90m、深さ24cm、西側周溝は検出された範囲での長さ6.05m、幅0.86m、深さ18cmである。軸方向は、N-58-Eをとる。第5号方形周溝墓、第6号方形周溝墓とは軸方向をわずかに違えるが、南側へ15mの位置に構築された第9号方形周溝墓とは軸方向がほぼ同じである。

多くの遺構が重複していたため、調査当初は方形周溝墓と認識できず、各周溝には個別の溝番号が付された。旧番号はN(SD307)、E(SD303)、S(SD319)、W(SD311)である。

出土遺物は極めて少なく、破片のみであった。図示できたものは、高環の脚部の破片が1点だけである。

第9号方形周溝墓(第180図)

東区中央部にあるJ-22、K-22、J-23、K-23グリッドに位置する。西側周溝を第98号住居跡が、

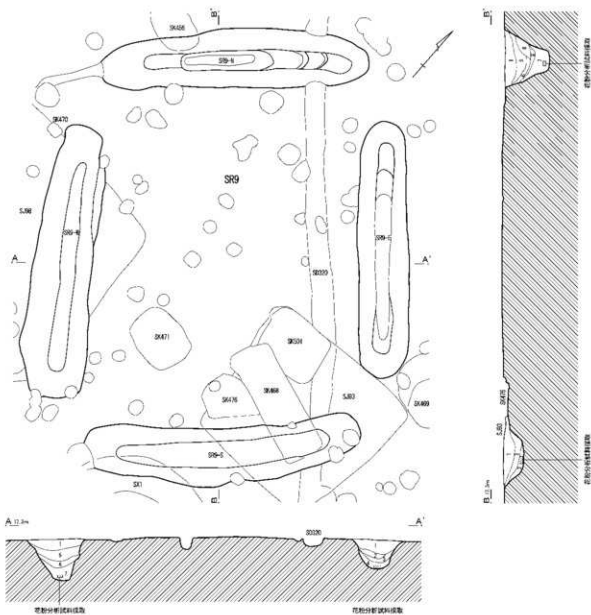
南側周溝を第93号住居跡および第468号土坑、第5号円形周溝状遺構が壊しているほか、第320号溝跡が方台部を縦断し、北側の周溝と南側の周溝を切っている。また、第456号土坑が北側周溝の一部を切っている。

周溝は4本検出され、四隅が切れる形態である。北西-南東方向にやや長い長方形で、全体の規模は9.70m×7.92m、北西-南東方向に長い長方形を呈する。周溝の掘り込みは深くしっかりしている。周溝の深さは、最も浅い南側周溝でも51cm、最も深い北側周溝で98cmであった。各周溝の規模は、北側周溝が長さ5.62m、幅1.25m、深さ98cm、東側周溝が長さ5.44m、幅1.08m、深さ63cm、南側周溝が長さ5.80m、幅1.23m、深さ51cm、西側周溝が長さ5.78m、幅1.24m、深さ88cmである。軸方向はN-41°-Wをとる。この軸方向は、西区の第5号方形周溝墓や第6号方形周溝墓とは向きがややずれるが、北側15mに位置する第8号方形周溝墓とはほぼ同じ方向を取っている。方台部の盛土および主体部は確認できなかった。

周溝の形状の特徴として、南側の溝では、両端がやや凹む形状を呈していた。これに対し、東側周溝および北側周溝では中央部が深め、端部がやや浅めの形状を呈する。また、西側周溝の断面で顕著にみられるように、周溝の掘り込みは、方台部側が急角度で丁寧に掘削され、外側がやや緩やかな角度を呈していることがわかる。

出土遺物は極めて少なく、図示できたのは壺または甕の底部1点のみである。この底部破片は西側周溝の中央部付近から出土した。外面に縦方向のハネ調整がみられる。

なお、本遺構では、遺構埋没当時の植生復元を目的として、4本の各周溝の断面の最下層から土壌サンプルを採取し、委託により花粉分析をおこなった。その結果、覆土からは花粉がほとんど検出されず、覆土が堆積した時には、花粉などの有機物が分解されやすい乾燥した環境もしくは乾湿を繰り返す堆積



- 第9号方形周溝遺構
- 1 黒褐色土 10790/2 炭化物微量 灰分少量
 2 黒褐色土 10793/2 炭褐色土粒子、炭化物少量
 3 黄褐色土 10845/4 黄褐色土粒子多量
 4 黄褐色土 2.583/1 黄褐色土ブロック1体
 5 暗褐色土 10844/1 黄褐色土粒子、炭化物少量
 6 暗褐色土 10864/1 黄褐色土粒子多量、黄褐色土ブロック、炭化物少量
 7 暗褐色土 10863/1 黄褐色土ブロック主体 シルト質
 8 暗褐色土 10864/1 黄褐色土ブロック、黄褐色土粒子多量
 9 暗褐色土 10871/1 黄褐色土粒子多量

第180図 第9号方形周溝墓

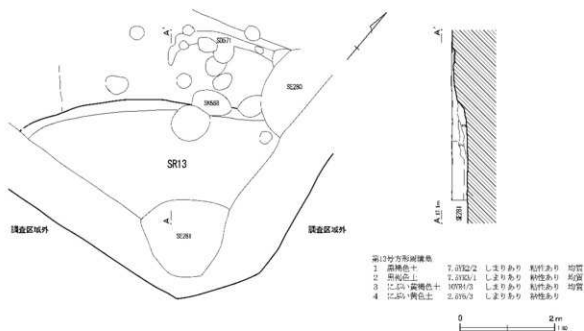
第55表 第9号方形周溝墓出土遺物観察表 (第181図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	残存	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図取
1	土師器	壺	—	[2.7]	7.3	底部のみ	角長石 石英 砂粒 赤粒 白粒	普通	にんい黄橙	W	



第181図 第9号方形周溝墓出土遺物

環境であったことが推定された。分析の詳細についてはⅢ章-1に掲載した。



第182図 第13号方形周溝墓

第56表 第13号方形周溝墓出土遺物観察表 (第183図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	残存	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
1	土師器	甕	—	[2.5]	(8.1)	底部破片	石英 砂粒	不良	浅黄橙		



第183図 第13号方形周溝墓出土遺物

第13号方形周溝墓 (第182図)

東区の南東隅にあたるN-26グリッドに位置している。周溝の南東の一部を中世の第281号井戸跡に、北側の縁の一部を第558号土坑に壊されている。東側と南側の大半は調査区域外に位置して、検出されたのは周溝の北西隅の一部のみである。

平成15年度に発掘調査がおこなわれた第4次調査区が南に隣接しており、本遺構の南側の続きとみられる溝が見つかったが、両調査区での成果を合わせても、全貌は明らかにされていない。調査当初は遺構の種類が難しく、第105号住居跡として調査を進めたが、遺物がほとんど出土しない点、溝の外側の立ち上がりが緩やかである点、覆土に住

居跡にみられるような焼土粒子や炭化物が全く検出されない点、数少ない出土遺物の時期から、方形周溝墓の可能性が高いと判断された。

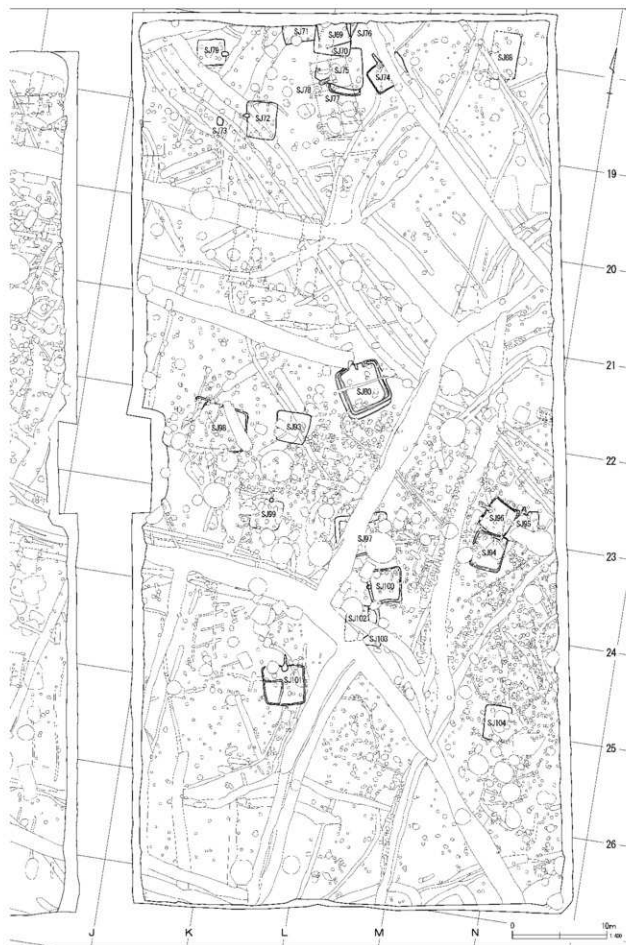
検出された範囲での規模は5.30m×2.52mで、深さは37cm程度と浅い。周溝の方台部側の立ち上がりは確認されなかったが、外側の立ち上がりはやや緩やかであった。推定される軸方向はN-40°-Wである。覆土は均質で、混入土や他の土粒子などはあまりみられなかった。

出土遺物はほとんどみられなかった。1は、遺構に帰属するとみられる甕の底部破片で、内面にハケ調整がみられる。

なお、調査時に第105号住居跡とした遺構番号は整理の段階で振り替え、第105号住居跡は欠番とした。



第184团 住居跡全体图 西区



第185图 住居跡全体图 东区

2. 住居跡

第3次調査では、住居跡が37軒、建て替え・拡張を含めると41軒検出されている。住居跡の時期は古墳時代中期から平安時代にまでおよぶ。全体的な住居跡の分布は、西区では北西、中央西寄り、南西、東区では北寄り、中央に偏りがみられる。

各時期の検出軒数は、古墳時代中期の住居跡が1軒、古墳時代後期の住居跡が7軒、古墳時代末の住居跡が4軒、奈良時代の住居跡が9軒、平安時代の住居跡が7軒である。9軒は遺物もなく、時期不明であった。各時期における住居跡の分布や特徴を概観する。

古墳時代中期の住居跡は1軒のみで、西区最南端で検出された。この時期の遺構が検出されたのは今回の調査が初めてである。平成15年度の第4次調査でも住居跡が検出されているが、密度は薄く、分布もまばらである。第3次調査で確認された第89号住居跡では、この地域に導入された初期の頃のものとみられるカマドが検出された。

古墳時代後期の住居跡は、調査区の西寄りおよび北寄りで確認された。特に北側で検出された数軒の住居跡は、北側の第2次調査の調査区で確認された該期の集落の南端に相当すると考えられる。調査区の東側の縁で住居跡が2軒みつまっていることから、住居群が西側へさらに展開している可能性がうかがえる。該期の住居跡は南側の第4次調査の調査区内でも数多く検出されている。該期の住居跡の分布が濃い第2次調査と第4次調査に挟まれた今回の調査区での分布は希薄で、南北に形成されていた集落域が切れる中間地帯とみられる。古墳時代後期に帰属するとした住居跡のなかでも、いわゆる飛鳥時代に営まれたと考えられる住居跡が3軒ほど検出されている。カマドを設ける方向は北西、南東、西、北と様々で、住居跡の軸方向は北西を向くものと北を向くもの二者がみられる。規模は概ね3.8m×3.2mを基本とするが、第88号住居跡のように一辺が6.8mある大型の住居跡もみられる。カマドの煙

道部は長い。

奈良時代の住居跡は、西区の中央付近と南西隅、東区の北側と中央付近で確認された。平均的な規模は一辺が3.5mだが、中には第85号住居跡や第80号住居跡のように一辺が5.0～5.5mにおよぶ大型の住居跡も検出された。大型の住居跡では建て替えや拡張がおこなわれた痕跡が確認されている。カマドの煙道部は短めにつくられ、北西辺または北辺のどちらかに設置されている。主軸方向は、ほぼ北方にとる住居跡が9軒、北西方向にとる住居跡が2軒で、北方向にとる住居跡が主流となる。

平安時代になると、住居跡は調査区の東側に偏った分布を示すようになり、確実に平安時代のものと思われる住居跡は、西区では検出されていない。住居跡は全てほぼ南北および東西に軸方向をとるようになる。カマドは北辺、東辺、西辺など南辺以外の各辺に設置されたものがみられる。

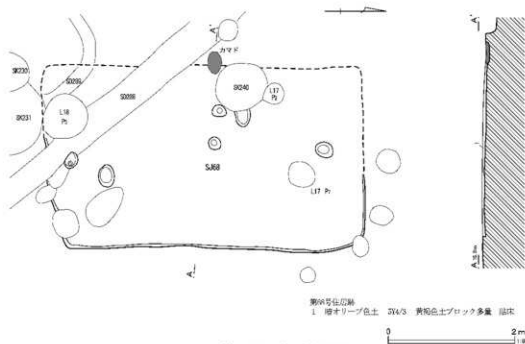
なお、第105号住居跡は、発掘調査時は住居跡とされたが、整理の過程で方形周溝墓の一部であると判断し、第13号方形周溝墓に変更した。第105号住居跡は欠番とした。

以下に、遺構番号順に各住居跡の調査内容について報告する。

第68号住居跡 (第186図)

東区の北東にあるL-17、L-18、M-17グリッドに位置する。南西隅を第288号溝跡に切れ、カマドの北東を第240号土坑に壊されている。平面形は南北に長い長方形で、規模は5.00m×2.92mである。遺構確認面からの床面の深さは5.6cmと浅く、覆土の1層は貼床である。カマドは焼けた底面の痕跡のみが検出された。カマドは西壁に設けられている。主軸方向はN-88°-Wと、ほぼ90°西に向いており、南北方向を意識して構築したと考えられる。

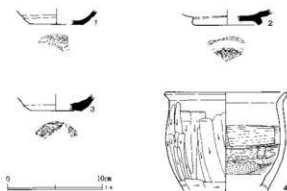
住居の上屋を支えたことが明らかな柱穴はないが、住居内跡に2基ずつ南北に対となって存在す



第186図 第68号住居跡

第57表 第68号住居跡出土遺物観察表 (第187図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	残存	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版			
1	須恵器	環	—	[1.6]	(6.0)	破片	褐粒	良好	灰白	南北金産				
2	須恵器	高台付城	—	[1.2]	(7.0)	破片	白粒	良好	灰	未野産				
3	土師器	環	—	[1.7]	(5.2)	破片	長石	砂粒	白粒	粒粒	普通	にふい橙	未野産	
4	土師器	甕	(13.0)	[10.4]	—	1/4	石英	赤粒	白粒	小粒	良好	にふい黄粒		



第187図 第68号住居跡出土遺物

る柱穴、カマドの東に2基並んでみられる小柱穴が、住居の上部構造と関連する可能性がある。

残っていたカマドの焼けた底面の範囲は、長軸35cm、短軸21cmで、床面と同じ高さで検出され、掘り込みとしては確認できなかった。

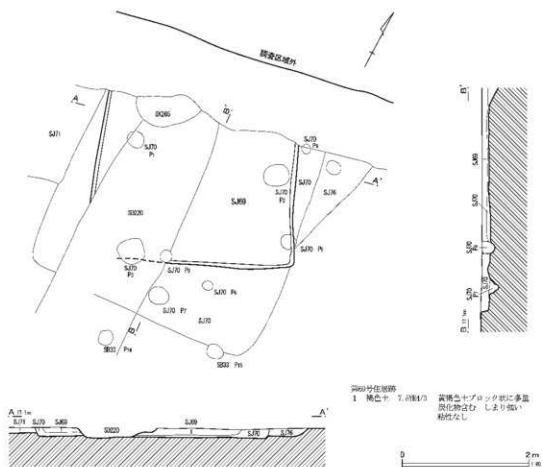
出土遺物は極めて少なく、図示できたものは第187図のとおりである。

第69号住居跡 (第188図)

東区の北端中央K-17、K-18グリッドに位置する。北側1/3は調査のための排水溝に壊されていた。西半分は第220号溝跡に大きく壊されている。また北端では第265号土坑が住居跡を切っている。周囲に第70号住居跡の一部が、東側に第76号住居跡の一部が重複して検出されており、第69号住居跡はこれらの住居跡を壊して構築されている、最も新しい遺構である。

平面形は南北に長い長方形とみられ、規模は東西2.18m、南北は検出された範囲で1.72mである。遺構確認面からの床面の深さは14cmと浅く、覆土の残存状態は良くない。主軸方向はN-26°-Wをとる。カマドが設けられていたとすれば北カマドであった可能性が高い。住居跡に伴う柱穴は検出されなかった。

出土遺物は少なく、図示できたのは1の須恵器の



第188図 第69号住居跡

第58表 第69号住居跡出土遺物観察表 (第189図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	残存	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
1	須恵器	蓋	—	[2.1]	—	破片	白粒 橙粒	良好	灰	南比企産	



第189図 第69号住居跡出土遺物

蓋1点のみである。

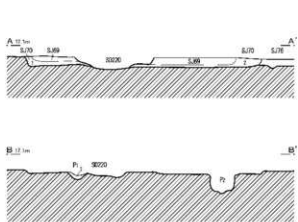
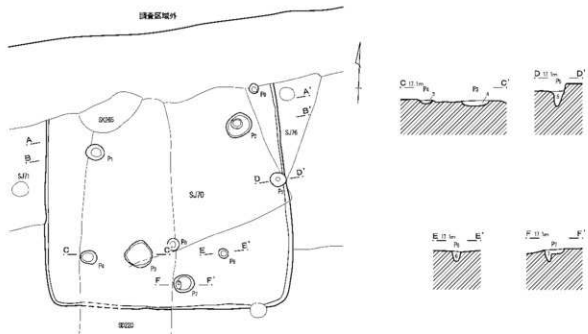
第70号住居跡 (第190図)

東区の北端中央にあるJ-17、J-18、K-17、K-18グリッドに位置する。検出されたのは、南側と東西の一部で、北側は調査のための排水溝に壊されていた。また、遺構の大半は第69号住居跡と第220号溝跡に壊されている。第76号住居跡が東側で、第

71号住居跡が西側で検出されているが、これらを壊して第70号住居跡がつくられている。

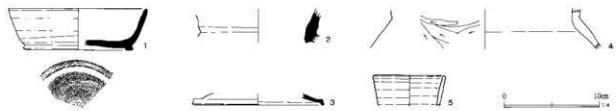
平面形は南北に長い長方形で、規模は東西3.86m、南北は検出された範囲で3.25mである。遺構確認面からの床面の深さは14cmと浅い。主軸方向はN-5°-Wをとり、南北方向を意識して構築されている。カマドは西壁か北壁に設けられていた可能性があるが、検出されなかった。

ビットはP1、P3~P7、P9の7基を検出したが、配置が不規則であるため、住居跡に伴う柱穴と判断できなかった。上屋の構造は不明である。確認面からのビットの深さはP1から順に、12cm、8.5cm、11cm、25cm、14cm、17cm、13.4cmである。



- 第70号住居跡
- 1 石い質褐色土 3000/1 黄褐色土粒子多量 炭化物粒を含む
こまり強い 粘りなし
 - 2 粘黄褐色土 3000/0 黄褐色土ブロック状に多量 しまり強い
粘りなし
- ピット
- 3 暗褐色土 7.000/0 黒褐色土ブロック状を含む
黄褐色土粒子多量 しまり強い 粘りなし
 - 4 灰黄褐色土 3000/2 黄褐色土粒子多量 しまり強い 粘り強い
 - 5 灰黄褐色土 7.000/4 黄褐色土粒子多量 しまり強い 粘り強い
 - 6 灰黄褐色土 3000/2 黄褐色土粒子多量 しまり強い 粘り強い
 - 7 灰黄褐色土 3000/2 黄褐色土粒子多量 しまり強い 粘り強い

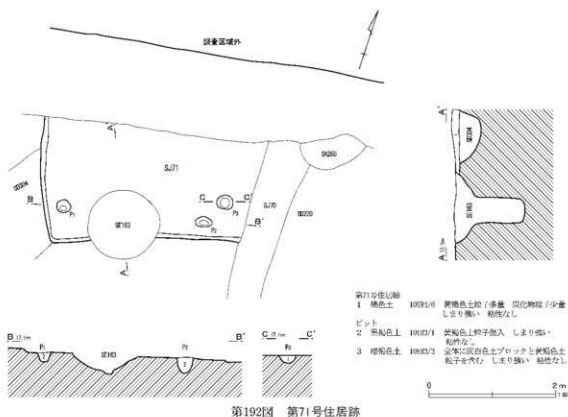
第190図 第70号住居跡



第191図 第70号住居跡出土遺物

第59表 第70号住居跡出土遺物観察表 (第191図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	残存	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
1	須恵器	高台付杯	(14.6)	4.3	(11.4)	1/4	長石 砂粒	良好	灰	群馬産 (林園)	
2	須恵器	壺	—	[3.6]	—	—	砂粒 白粒 菊粒	良好	にぶい橙	未野産	
3	須恵器	蓋	(7.0)	[1.1]	—	破片	砂粒 白粒	良好	灰	南比金産	
4	土師器	甕	—	[4.3]	—	破片	砂粒 赤粒 白粒	普通	にぶい橙		
5	灰釉陶器	壺	(7.5)	[3.3]	—	破片	白粒 黒粒	良好	灰白		216



第192図 第71号住居跡

第60表 第71号住居跡出土遺物観察表(第193図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	残存	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図取
1	須恵器	環	(13.0)	[3.9]	—	破片	白粒 黒粒 褐粒	良好	にふい・黄緑	南北比企産	
2	須恵器	環	(6.9)	—	—	破片	長石 砂粒 針	良好	灰	南北比企産	
3	須恵器	環	—	[1.0]	9.8	破片	砂粒	良好	灰	南北比企産	
4	須恵器	蓋	(13.6)	[1.8]	—	破片	砂粒 白粒	良好	灰	南北比企産	

出土遺物は少なく、須恵器、土師器の小破片が60点ほどあったが、図示できたのは第191図のとおりである。

第71号住居跡(第192図)

東区の北端中央付近にあるJ-17、J-18グリッドに位置する。検出されたのは南側1/3ほどで、北側は、調査のための排水溝に大きく壊されている。このほか、東側は第70号住居跡に切られ、南側の一部を第163号井戸跡に壊されている。また、西側では古墳時代の第304号溝跡を切っている。

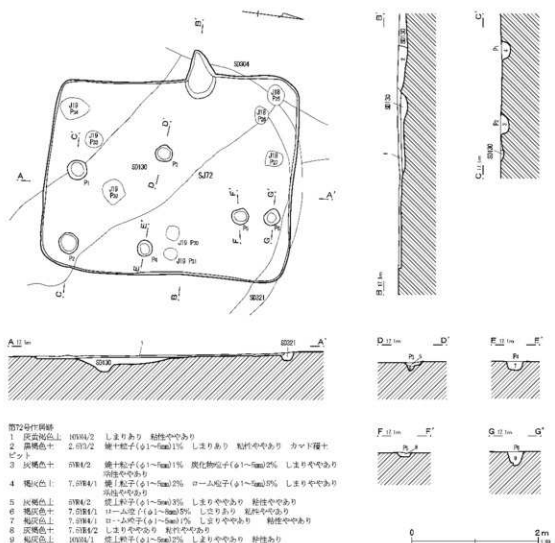
平面形は長方形か方形で、確認された範囲での規模は東西3.42m、南北1.65mである。遺構確認面からの床面の深さは12cmと浅く、確認された覆土は1層のみである。主軸方向はN-17-Wをとる。



第193図 第71号住居跡出土遺物

確認された範囲では、カマドは確認できなかった。ピットはP1-P3までが確認された。P1とP2あるいはP3が住居跡の柱穴の可能性はあるが、いずれも浅いため、補助柱穴の可能性も考えられる。確認面からのピットの深さはP1から順に15cm、25cm、11cmである。周溝は検出されていない。

出土遺物は、須恵器、土師器の小破片が80点ほどあった。図示できたものは第193図のとおりである。



第194図 第72号住居跡

第61表 第72号住居跡出土遺物観察表 (第195図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	残存	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
1	土師器	壺	—	[2.8]	10.4	破片	石英 砂粒 赤粒	普通	黒褐	内面：にぶい橙	

3は、底部周辺へラケズリの須恵器の環である。

第72号住居跡 (第194図)

東区北側にあるJ-18、J-19グリッドに位置する。第304号溝跡、第130号溝跡、第321号溝跡を切っている。

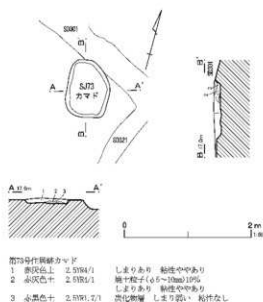
平面形は南北方向にやや長い長方形で、規模は南北3.90m、東西3.21mである。遺構確認面からの床面の深さは4cmと極めて浅く、掘り方近くの検出となった。主軸方向はS-87°-Wをとり、第68号住居



第195図 第72号住居跡出土遺物

跡や第70号住居跡と同様に、南北軸を意識して建てたことがうかがえる。

住居跡内部では、カマドとビット6基が検出された。カマドは西壁の中央やや北寄りに設けられている。燃焼部の掘り込みが検出されたが、軸は確認さ



第196図 第73号住居跡

れなかった。現存規模は長軸76cm、短軸46cm、深さ9cmである。カマドの遺存状態は悪く、周辺で焼土粒子をわずかに混入する上が確認されたのみで、カマドの明確な構造は確認されなかった。

ビットはP1～P6が検出された。確認面からのビットの深さは、P1から順に14cm、10cm、9cm、13cm、7cm、22cmである。浅いビットも多く、いずれも配置が不規則で、住居の上屋との関係は不明である。また、周溝も確認されなかった。

出土遺物は小破片ばかりが20点程度で極めて少なく、遺構に伴うものを判別するのは困難であった。図示できたのは、底径が10.4cmある土師器の底部である。遺物は混入の可能性もある。

住居跡の主軸方向や住居内施設の特徴にみられる類似点から、第68号住居跡と近い時期に営まれた住居跡である可能性が考えられる。

第73号住居跡 (第196図)

東区の北側にあるI-19、J-19グリッドに位置する。検出されたのはカマドの痕跡のみで、住居跡の掘り込みやビットなどは確認できなかった。北側

では第301号溝跡を切っている。カマドは北か南向きであったと考えられる。

カマドの規模は南北93cm、東西68cmで、遺構確認面からの深さは8cmである。覆土の第2層に焼土粒子、第3層に炭化物の堆積がみられる。主軸方向はN-14°-Wをとる。

出土遺物は、土師器の甕を含む土器小片が5点のみで、図示できるものはなかった。

第74号住居跡 (第197図)

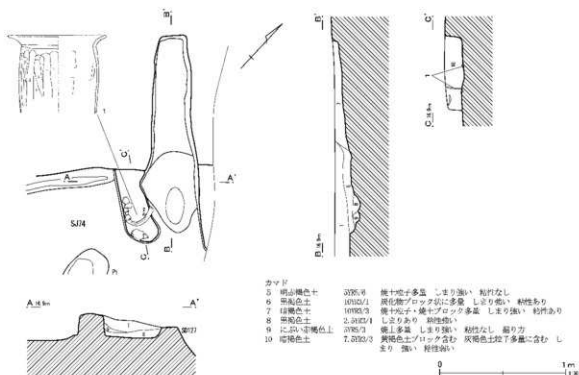
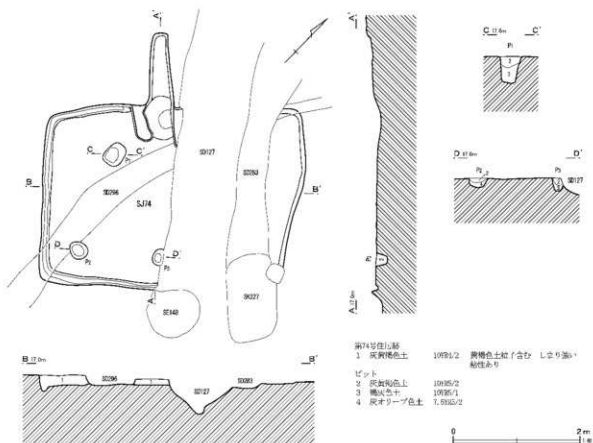
東区の北側にあるK-18グリッドに位置する。カマドの脇から住居跡の南側にかけて、北西-南東方向に第127・283号溝跡が大きく住居跡を切っているほか、第296号溝跡が南北方向に縦断して住居跡を切っている。また、南東隅では第227号土坑が住居跡を切っている。このように多くの遺構に切られているため、遺構に伴う覆土の遺存状態は悪い。

平面形は北東-南西方向に長い長方形で、規模は北東-南西が4.08m、北西-南東が2.89mである。遺構確認面からの床面の深さは19cm、確認された覆土は1層である。主軸方向はN-41°-Wをとる。

住居跡内部ではカマドとビット、周溝が確認された。カマドは北西壁の中央やや西寄りにつくられ、規模は長軸105cm、短軸52cm、深さが11cmである。煙道部は長く、右の袖は後世の溝によって壊されていたが、左の袖には日縁部を下にして埋め込まれた土師器の甕が残っていた。甕の日縁部が置かれたのは床面直上である。覆土は、第6層が炭化物ブロックを多量に含む。第9層が焼土を多量に含むものの、掘り方とみられることから、使用面は6層の下面と推定される。

ビットはP1～P3の3基を確認したが、配置が不規則であり、上屋の復元は難しい。ビットの深さはP1から順に、42cm、13cm、20cmである。周溝は、住居跡の西側半分のみで検出された。

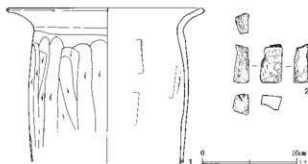
出土遺物は、カマドの袖から出土した土師器の甕一個体のほかに、主に土師器の甕の小破片、須恵器



第197図 第74号住居跡・カマド遺物出土状況

第62表 第74号住居跡出土遺物観察表（第198図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	残存	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
1	土師器	甕	20.8	[16.5]	—	1/4	雲長石 砂粒	普通	褐灰		158
2	石製品	砥石	幅2.1	長[4.0]	厚[1.6]	一部欠損					220



第198図 第74号住居跡出土遺物

の小破片が合わせて20点あるが、全体的に少ない。
2のような小型の砥石も1点出土している。

第75号住居跡（第200図）

東区の北側にあるJ-18、K-18グリッドに位置する。南側では第77号住居跡が重複しており、第77号住居跡を切って構築されている。また、北側の縁を第70号住居跡に大きく壊され、西側では第220号溝跡が、中央では第229号土坑および第268号土坑が本遺構を壊して構築されている。さらに、南壁の西寄りでは、第78号住居跡のカマドが住居中央から南にかけて切って、第33号掘立柱建物跡が本遺構を切って構築されている。

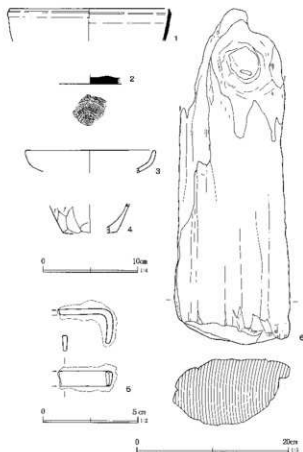
平面形はやや台形で、規模は東西4.98m、南北4.33mである。遺構確認面からの床面の深さは5cmと極めて浅く、確認された覆土は1層のみである。主軸方向はN-2-Wで、南北方向を意識して構築していると考えられる。

住居跡内では、住居跡に伴う可能性のあるビットP2、P3、P4、P7、P8、P10の6基を検出した。ビットの深さは、P2から順に7cm、14cm、17cm、12cm、76cm、13cmである。柱材が出土したP8だけは深い。そのほかのビットはいずれも浅く、配置も不規則なため、柱穴を特定し、上屋の構造を推定する

のは困難である。

カマドは検出されなかったが、設けられていたとすれば北壁か西壁にあったと推定される。周溝も確認されていない。

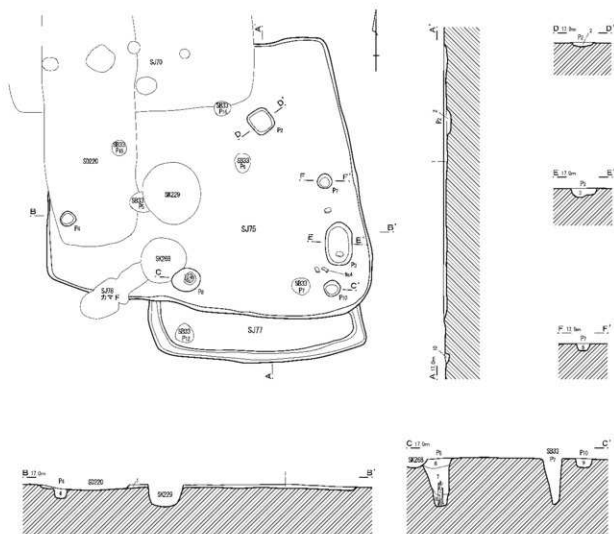
出土遺物は、須恵器、土師器の小破片が70点ほどあった。このほかにも、鉄製品が1点、ビットからは柱材が1点出土している。土器の破片では土師器の甕のものが多く、図示できた遺物は少ないが、第199図に示したとおりである。2は全面回転ヘラケズリの環の底部である。6はP8に遺存していた柱材である。5は棒状の鉄製品で、刀子の茎の可能性がある。



第199図 第75号住居跡出土遺物

第63表 第75号住居跡出土遺物観察表 (第199図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	残存	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
1	須恵器	環	(8.5)	[3.5]	—	破片	長石 褐粒	普通	黄灰	未野産 P8 南比金産	
2	須恵器	環	—	[1.0]	—	破片	砂粒 白粒	良好	灰黄		
3	土師器	環	(13.8)	[2.3]	—	破片	長石 砂粒	普通	にじい程		
4	土師器	罎	—	(3.0)	(5.6)	底部破片	赤粒 白粒 黒粒	普通	褐灰		
5	鉄製品	棒状品	幅0.8 長[2.8]	厚0.25						刀子蓋か?	222
6	木製品	柱	幅15.3 長[44.4]	厚[8.4]						P8	



第75号住居跡

- 1 暗赤色土
ピット
- 2 暗色土
- 3 黒褐色土
- 4 灰黄褐色土
- 5 黒褐色土
- 6 暗褐色土
- 7 灰色土
- 8 緑灰色土
- 9 黒褐色土
- 10X3/2 灰褐色土粒子含む しまり強い、粘性なし
- 10X3/4 黒褐色土ブロック多量 しまり強い、粘性なし
- 10X3/2 灰褐色土ブロック多量 しまり強い、粘性なし
- 10X4/2 灰黄褐色土ブロック状に含む しまり強い、粘性なし
- 10X3/2 灰褐色土ブロック状に少量 しまり強い、粘性強い
- 10X3/2 灰褐色土粒子含む しまり強い、粘性強い
- 10X4/1 灰褐色土粒子少量 しまりあり 粘性強い
- 7.50X/2 灰色土粒子少量 砂粒子多量 しまり強い、粘性強い
- 10X3/2 灰褐色土粒子少量 しまり強い、粘性強い

第77号住居跡

- 10 暗褐色土 7.30X/4 灰褐色土粒子多量 しまり強い、粘性なし



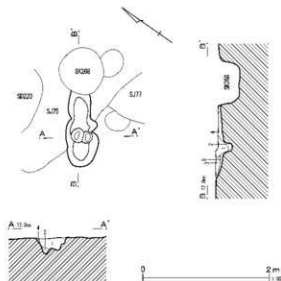
第200図 第75・77号住居跡

第76号住居跡 (第201図)

東区北端の中央付近にあるK-17、K-18グリッドに位置する。北側は調査のための排水溝に、西側の大半を第69号住居跡、第70号住居跡に壊され、検出されたのは東壁の一部のみである。

平面形は不明で、検出された範囲での規模は南北1.63m、東西0.70mである。遺構確認面からの床面の深さは11cmで、確認できた覆土は1層である。壁の立ち上がりの向きから、軸方向はほぼN-10°-Eをとっていたとみられる。カマドやピットは検出されなかった。

出土遺物は、須恵器の環、土師器の甕の小破片が10点程度で、図示できるものはなかった。



第76号住居跡カマド

1 黒褐色土	7.0183/1	炭上粒子(φ5~10mm)5% 炭化物(φ5~5mm)2% しまりあり 粘りややあり
2 黒色土	7.0182/1	しまりややあり 粘り強い
3 黒褐色土	7.0183/1	炭上粒子(φ3~1mm)30% しまりあり 粘りややあり
4 濃い炭褐色土	10784/3	しまりあり 粘りややあり
5 黒褐色土	7.0183/1	炭化物90% しまりややあり 粘りややあり

第201図 第76号住居跡

第77号住居跡 (第200図)

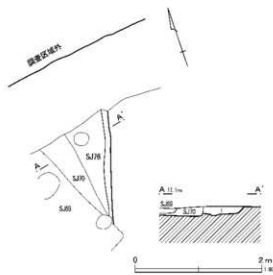
東区の北端中央付近にあるK-18グリッドに位置する。北側の大半を第75号住居跡に壊され、検出されたのは南側の極一部のみである。

平面形は方形か長方形で、規模は東西3.34m、検出された範囲での南北は0.72mである。遺構と確認できたのは周溝が方形に巡っていたことから、周溝の深さは7.5cmであった。覆土を確認できたのは周溝のみである。主軸方向はN-2°-Wをとり、南

北方向を意識して建てられている。

カマドやピットは確認されなかったが、周溝は、検出された範囲では切れることなく巡っていた。

出土遺物は、須恵器の小破片が1点のみで、図示できるものはなかった。



第77号住居跡

1 灰黒褐色土	10784/3	炭褐色土がブロック状に多量 しまりあり 粘りなし
---------	---------	--------------------------

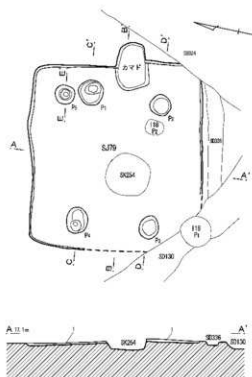
第200図 第77号住居跡カマド

第78号住居跡 (第202図)

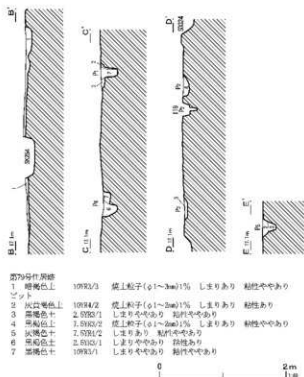
東区の北側中央付近にあるJ-18、K-18グリッドに位置する。検出したのはカマドのみである。カマドは北東で第268号土坑に壊されている。また、北側半分では第75号住居跡を切っている。

カマドの規模は、長さが現状で1.16m、幅は0.50mである。遺構確認面からの深さは26cmある。検出された掘り込みの構造から、北西方向が煙道部と考えられる。この場合、住居跡の主軸方向はN-55°-Eをとっていたと考えられる。覆土は、最下層の炭化物層(第5層)の上に焼土粒子を多量に含む層(第3層)の堆積が確認された。

出土遺物は、須恵器、土師器の小破片が6点ほどあったが、図示できるものはなかった。



第203図 第79号住居跡



第64表 第79号住居跡出土遺物観察表 (第204図)

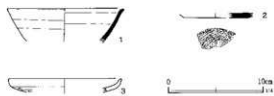
番号	種別	器種	口径	器高	底径	残存	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図取
1	須恵器	環	(12.4)	[3.4]	—	破片	砂粒 赤粒	良好	黄灰	南比企産	
2	須恵器	環	—	[0.5]	7.0	破片	長石 針	良好	灰	南比企産	
3	土師器	環	(6.0)	[1.4]	—	破片	砂粒	良好	にぶい赤褐		

第79号住居跡 (第203図)

東区の北東付近にある I—18グリッドに位置する。他の遺構との重複が多い中で、比較的全体がよく検出された住居跡で、東隅を第324号溝跡に、南隅を第130号溝跡に、住居跡内中央を第254号土坑に切られている。第336号溝跡は、住居跡の南壁と平行して設けられていることから、本遺構に関連する施設の可能性があると考えられる。

平面形は東西方向にやや長い隅丸方形で、規模は東西3.10m、南北2.90mである。確認面からの深さは3cmと極めて浅く、ほぼ床面で検出されている。確認された覆土は1層である。主軸方向はN—12°—Wをとる。

カマドは東壁のほぼ中央に設けられている。確認面が浅く、カマドは燃焼部の底面近くだけが検出された。このため、特に焼土粒子を多く含む覆土は確

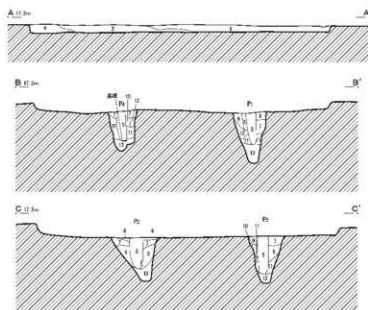
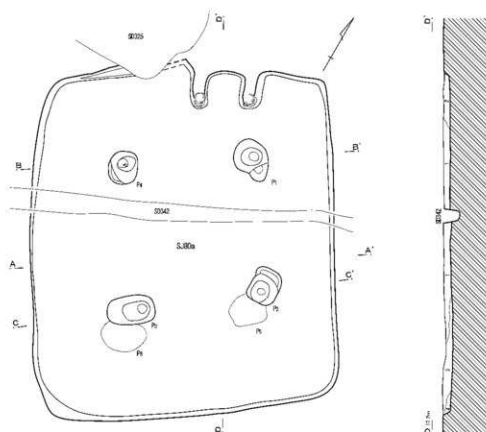


第204図 第79号住居跡出土遺物

認されず、住居跡の覆土と同一の土がみられた。規模は長さ75cm、幅52cmで、深さは10.8cmである。

ピットはP1—P5の5基を確認した。P1、P2、P3、P4またはP5で上屋を支えていた可能性がある。ピットの深さはP1から順に26cm、10cm、6cm、24cm、21cmである。周溝は検出されなかった。

出土遺物は須恵器の環、土師器の甕、環の小破片など60点ほどで、図示できたものは第204図に示した。



第80a号住居跡

1	粘土上	10084/6	粘土粒子少量 炭化物多量 赤褐色土粒子少量
2	暗赤褐色土	5025/2	焼土ブロック多量 炭化物少量 コーテジ層上
3	褐色土	10084/4	黄褐色土ブロック多量 炭化物少量
4	黄褐色土	10085/9	黄褐色土ブロック主体の土
5	灰土上	5036/1	柱穴 黄褐色土粒子多量 炭化物多量
6	オリーブ褐色土	2.504/6	黄褐色土粒子多量 炭化物少量
7	オリーブ色土	5035/6	灰色土ブロック多量 炭化物少量
8	黄褐色土	2.505/6	灰色土粒子多量 粘性強い
9	黄灰色土	2.504/1	黄褐色土ブロック少量 炭化物少量
10	灰オリーブ色土	5035/3	黄褐色土粒子少量
11	灰オリーブ色土	5035/3	黄褐色土粒子少量 粘性強い
12	黄褐色土	2.505/6	黄褐色土粒子多量
13	オリーブ褐色土	5035/1	灰色土ブロック多量 粘性強い

0 2m

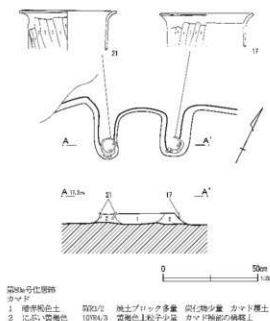
第205図 第80a号住居跡

第80a号住居跡 (第205・206図)

東区の中央付近にあるK-21、L-21グリッドに位置する。第80号住居跡は、拡張と建て替えが一回ずつおこなわれており、第80a号住居跡は、このう

ちの最も新しい住居跡である。住居跡の中央を第342号溝跡が東西方向に縦断して切っており、北側の一部が第325号溝跡に壊されている。

平面形は北西-南東方向に長い隅丸長方形で、規



第206図 第80a号住居跡カマド遺物出土状況

模は長軸5.62m、短軸4.81mである。確認面からの床面の深さは25cmである。建て替え前の第80b号住居跡の床面から厚さ約10cmの貼床をして構築されている。主軸方向はN-32°-Wをとる。

カマドは、北壁の中央やや東寄りに設けられている。規模は長さ60cm、袖を含めた幅115cm、袖を除いた幅49cmである。確認面からの深さは22cmである。両袖では、土師器の甕が口縁部を下に向けて設置した状態で検出された。

ビットはP1～P4の4基を検出した。いずれも柱痕がみられ、4本の主柱穴で上屋を支えていたようである。P1、P4の2本は建て替え前の柱穴と同じ位置にある。P2、P3では新たに柱を立てている。P4では柱痕とみられる5層の底面で、柱を支えるために据えられた板と考えられる炭化木材が出土した。P5、P6は第80b号住居跡の床面で確認されたもので、埋め戻した痕跡があることから、建て替え前の第80b・c号住居跡の柱穴と判断された。

出土遺物は、80a、80b、80c号住居跡に分けて取り上げることが困難であったため、3軒分をまとめて、出土状況を第208図、遺物を第209・210図に示した。遺物総量は、図示したものに外に須恵器の環・

甕の小破片が20点ほど、土師器の甕・環など小破片が750点出土した。出土遺物は特にカマドの左右に集中しており、カマドの右側の遺物は高めの位置、カマドの左側の遺物は低めの位置で出土している。第80a号住居跡のカマドはやや東寄り、第80b号住居跡のカマドはやや西寄りに設置されており、カマドの右側の遺物のなかには第80a号住居跡に伴う遺物が、カマドの左側の遺物のなかには第80b号住居跡に伴う遺物が多い可能性が考えられる。出土遺物の帰属を各住居に明確に分けることはできないが、第80a号跡が第80b・c号の床から約10cm床を貼っており、遺物の出土高から、10、13、23、20、12が第80a号住居跡に伴う可能性もある。

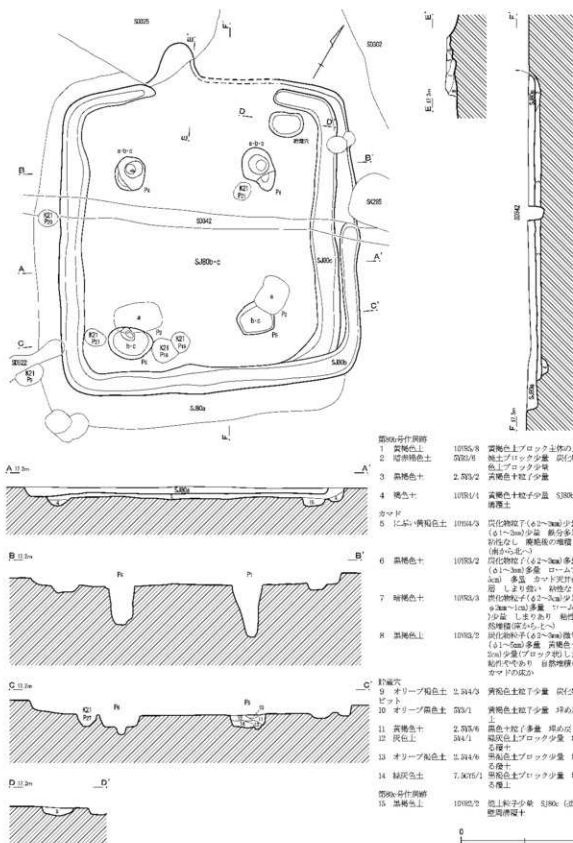
第80b・80c号住居跡 (第207図)

東区の中央付近にあるK-21、L-21グリッドに位置する。第80c号住居跡が最初に構築され、これを拡張して第80b号住居跡が構築された。80a号住居跡はその後の建て替えて構築された住居である。遺構の上半部を第80a号住居跡に切られているほか、第342号溝跡が中央部を東西方向に横断して住居跡を切っている。また、カマド付近では第325号溝跡がカマドを壊している。

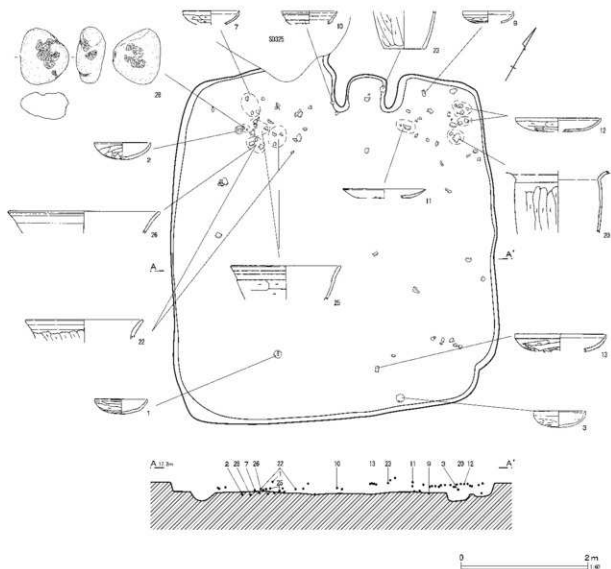
第80c号住居跡の平面形は隅丸長方形で、規模は長軸4.94m、短軸4.17mである。確認面からの深さは不明だが、第80b号住居跡と同じであったとすれば21cmである。主軸方向はN-30°-Wをとる。覆土が確認できたのは東側の周溝のみで、周溝は深さ12cm、幅約38cmで全周していたとみられる。

拡張後の第80b号住居跡の平面形は隅丸方形で、規模は長軸が4.94m、短軸が4.42mである。確認面からの床面の深さは21cmだが、確認された覆土の土層は1枚(第3層)のみである。周溝は、幅約36cmで、北隅の周溝を除いてほぼ全周している。

カマド、柱穴、貯蔵穴は第80b・80c号住居跡で共通していたと考えられる。カマドは北西辺のやや西寄りに設けられていたことが、覆土に焼土粒子を



第207図 第80b・80c号住居跡



第208図 第80 a・80 b・80 c号住居跡遺物出土状況

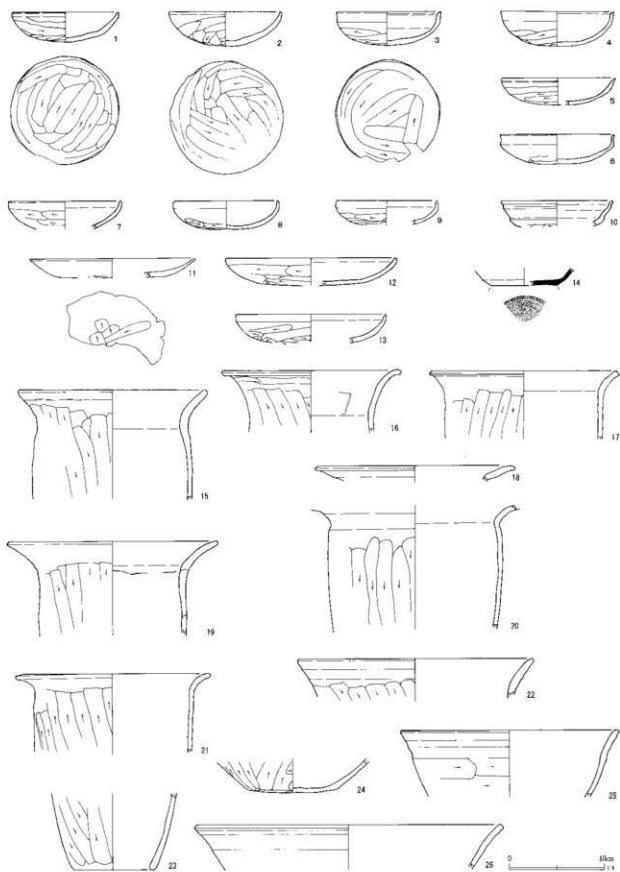
多く含む状況から確認されたが、形の確認はできなかった。確認された範囲での規模は、長さ34cm、幅36cm、深さ13cmである。

ピットはP1、P4、P5、P6の4基が検出された。P1とP4の2基は、建て替え後の第80 a号住居跡でも使われている。ピットの深さは、P1から順に81cm、63cm、20.5cm、31cmである。P5、P6はP1～P4と比べて浅く、この後に構築される第80 a号住居跡の柱穴は全て60cm以上と深い。このことから、共通する主柱穴であるP1とP4は、第80 b号住居跡まではP5やP6と同様に深さ20～30cmほどであったものが、第80 a号住居跡を構築する際に深く掘り直して

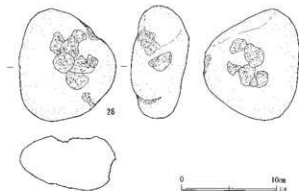
柱を据え直した可能性が考えられる。

貯蔵穴は北東隅に設けられている。規模は長軸が54cm、短軸が40cmの楕円形で、深さは11cmである。

出土遺物は、80 a、80 b、80 c号住居跡の各住居跡に分けることができなかったため、3軒分をまとめて遺物出土状況を第208図に、遺物を第209・210図に示した。遺物総量は、第80 a号住居跡の項目で記載したとおりである。床面が、建て替え後の第80 a号跡よりも低いため、推測の域を出ないが、遺物の出土した高さから、2、7、22、26、28が第80 b号住居跡に伴う可能性があると考えられる。



第209图 第80号住居跡出土遺物 (1)



第210図 第80号住居跡出土遺物(2)

第65表 第80 a・80 b・80 c号住居跡出土遺物観察表(第209・210図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	残存	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
1	土師器	環	11.6	3.2	—	ほぼ完形	雲 白粒 黒粒	普通	橙		158
2	土師器	環	12.4	3.7	—	ほぼ完形	雲 長石 白粒 黒粒	普通	明赤褐		158
3	土師器	環	11.5	3.6	—	ほぼ完形	雲 角 赤粒 黒粒	普通	にぶい褐	内面一部赤彩部分あり	158
4	土師器	環	12.0	3.6	—	1/2	砂粒 赤粒 黒粒	普通	にぶい橙	内面赤彩	158
5	土師器	環	(12.0)	(2.8)	—	1/4	角 長石 黒粒 褐粒	不良	にぶい黄橙		
6	土師器	環	(12.0)	3.1	—	1/5	長石 砂粒 黒粒	不良	橙	北武藏型環	
7	土師器	環	(12.1)	[2.9]	—	破片	雲 白粒 黒粒	不良	にぶい橙	北武藏型環	
8	土師器	環	11.0	3.0	—	1/4	角 砂粒 白粒	良好	橙	北武藏型環	
9	土師器	環	10.9	(2.5)	—	1/4	角 赤粒 黒粒	普通	橙	北武藏型環	
10	土師器	環	(11.9)	[2.7]	—	破片	角 黒粒 褐粒	普通	にぶい黄橙	有段口縁環	
11	土師器	皿	(18.0)	(2.1)	—	破片	雲 角 砂粒 赤粒	普通	褐灰		
12	土師器	皿	(18.2)	[2.9]	—	1/4	砂粒 白粒	普通	黒	内面：にぶい橙	
13	土師器	環	(16.0)	[3.0]	—	口縁1/5	雲 角 赤粒 白粒 黒粒	普通	黒褐		
14	須恵器	環	—	[1.8]	(7.0)	破片	白粒	良好	灰	南比金産	
15	土師器	甕	(20.0)	[11.5]	—	破片	雲 砂粒 赤粒 白粒	普通	にぶい赤褐		
16	土師器	甕	(19.0)	[6.6]	—	口縁1/3	雲 長石 赤粒 褐粒	普通	にぶい橙		
17	土師器	甕	(20.0)	[7.1]	—	口縁1/4	片 砂粒 赤粒 白粒	普通	にぶい黄橙	カマド	
18	土師器	甕	(20.8)	[1.8]	—	破片	雲 砂粒 赤粒	普通	にぶい橙		
19	土師器	甕	(22.3)	[10.0]	—	口縁1/4	雲 砂粒 赤粒 白粒	普通	赤褐		
20	土師器	甕	—	[13.5]	—	破片	砂粒 赤粒	普通	にぶい橙		
21	土師器	甕	21.3	[8.5]	—	口縁2/3	長石 砂粒 赤粒 黒粒	普通	にぶい橙	カマド	158
22	土師器	甕	(25.0)	[4.2]	—	口縁破片	雲 角 砂粒	普通	にぶい橙		
23	土師器	瓶	—	[8.0]	(8.5)	破片	角 長石 砂粒 赤粒 白粒	普通	橙		
24	土師器	甕	—	[3.6]	(9.8)	底部1/4	角 砂粒 赤粒 白粒	普通	黒	内面：にぶい橙	
25	土師器	鉢	(23.3)	[7.1]	—	破片	雲 角 石英 砂粒 赤粒 黒粒	普通	にぶい橙		
26	土師器	鉢	(32.9)	[4.7]	—	破片	雲 砂粒 赤粒 白粒	普通			
27	石製品	勾玉	幅1.8 長[3.4]	厚0.6	—	一部欠損				清石製	209
28	石製品	軽石	幅10.3 長11.7	厚5.9	—					角閃石安山岩	220

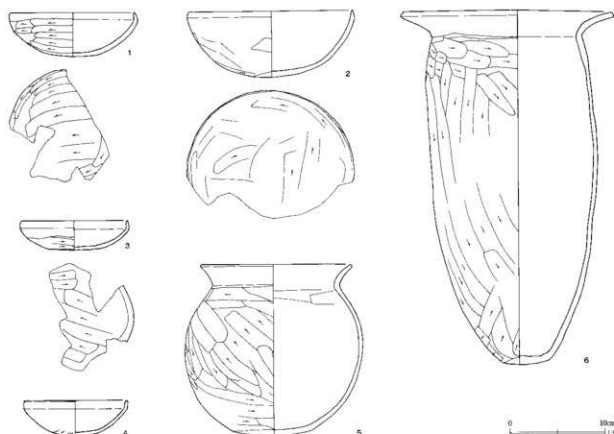
第81号住居跡(第211図)

西区二面の南西隅にあるE-27、F-27グリッドに位置する。西隅を調査のための排水溝に壊されている。南東部分では第346号溝跡、第369号溝跡を切っているが、上面で遺構の南東壁が確認できずに溝跡と一緒に掘り進めたため、南東部は住居跡の形および周溝を確認することができなかった。遺構はこのほか、第7号方形周溝墓の南側周溝と東側周溝の上層を切っている。

平面形は方形で、規模は長軸が推定3.96m、短軸

が3.80mである。確認面からの床面の深さは14cmと浅く、確認された覆土は1層である。第2層と第3層は掘り方の埋土である。主軸方向はN-67-Wをとる。

カマドは北西壁のやや南西寄りに設けられている。袖は痕跡がわずかに検出されただけで、確認されたのは燃焼部の掘り込みである。断面から、第7層の上面が燃焼面で、燃焼部の奥にあたる炭化物の薄い層(第4層)が遺存していることがわかる。カマドの規模は、長さ76cm、幅76cmで、深さは12cmで



第212図 第81号住居跡出土遺物

第66表 第81号住居跡出土遺物観察表 (第212図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	残存	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
1	土師器	環	(13.1)	4.6	—	1/2	角 石英 砂粒 白粒	普通	におい靨	北武藏型環	
2	土師器	鉢	17.7	7.2	—	1/2	長石 赤粒	普通	におい赤褐		158
3	土師器	鉢	(11.4)	3.1	—	1/2	白粒 黒粒	普通	におい靨	北武藏型環	158
4	土師器	環	11.0	3.8	—	ほぼ完形	長石 砂粒 赤粒	普通	靨	北武藏型環	158
5	土師器	小型甕	16.6	18.6	8.6	3/4	雲 長石 砂粒 赤粒	普通	におい赤褐	割下半煤付着	159
6	土師器	甕	22.6	37.7	4.8	ほぼ完形	雲 砂粒 赤粒	普通	におい靨	カマド	159

ある。焼き口付近の右袖寄りで、長胴甕が一個体、潰れた状態で出土した。

貯蔵穴は、カマドの左、住居跡の南西隅で検出された。規模は直径48cmの円形で、深さは31cmある。床面近くから、完形に近い丸底甕が口縁部を斜め上に向けた状態で出土した。

ヒットはP1の1基のみが、カマドの手前で検出された。深さは40cmである。

周溝は幅が約16cmで、北東壁と南西壁に沿って確認された。

出土遺物は、第212図に図示した。このほかに、土器の小破片が約50点出土している。

第82号住居跡 (第213・216図)

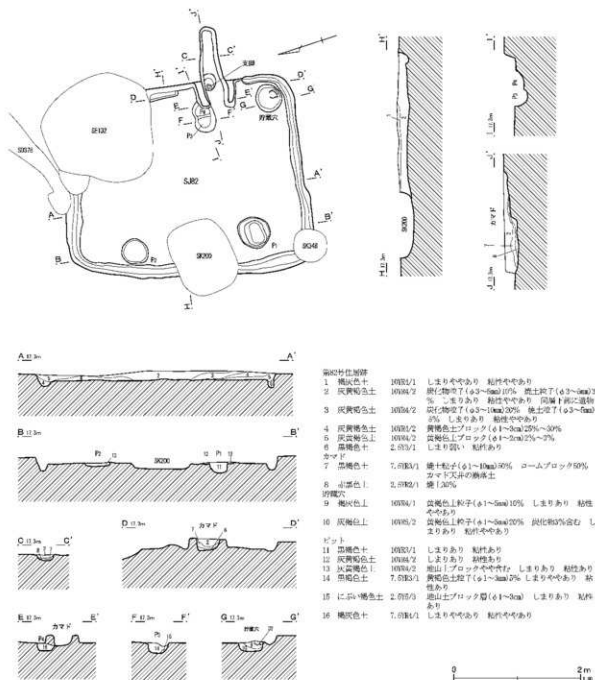
西区二面の北側中央にあるF-19グリッドに位置する。北東側は第132号井戸跡と第378号溝跡に大きく壊され、西側は第200号土坑、第348号土坑に切られている。本遺跡の中では、掘り込みが比較的しっかりしており、良好な状態で検出された住居跡である。

平面形は南北に長い隅丸長方形で、規模は南北3.86m、東西3.12mである。確認面からの床面の深さは18cmである。主軸方向はS-78°-Eをとる。覆土はレンズ状の堆積で、特に住居跡内南東1/4の部分では焼土粒子・炭化物粒子を多く含む第3層が形

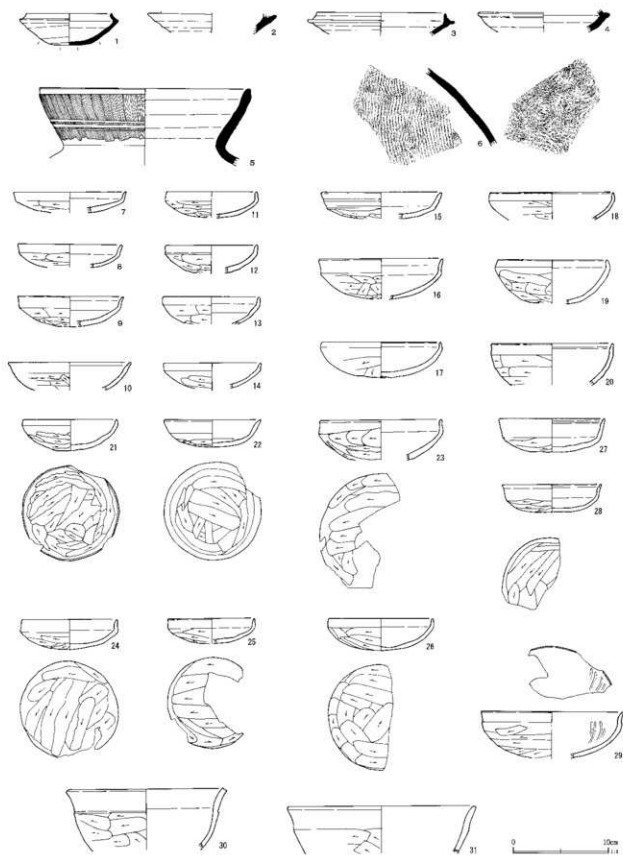
成されていた。土器破片もこの第3層から多く出土している。カマド周辺を中心に広がっていることから、住居の埋没過程でカマドの土が周囲に広がったものと考えられる。

カマドは、東壁やや南寄りに設けられている。燃焼部のやや左袖寄りに土製の支脚が据えつけられ、支脚周辺の底面は被熱を受けていた。規模は、長さ

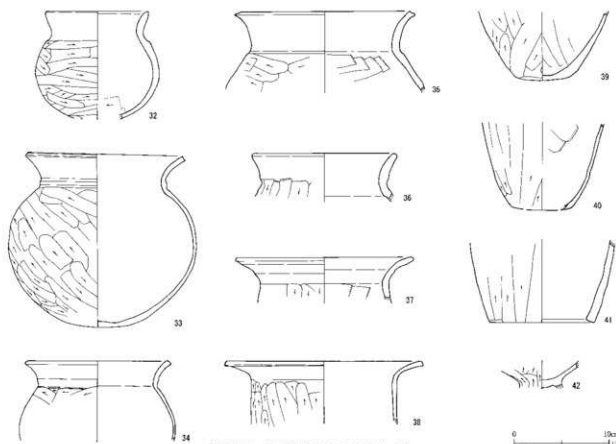
131cm、幅64cmと煙道部が長く、深さは11cmである。覆土は焼土層（第8層）の上にカマドの天井の崩落土層（第7層）が形成され、さらに住居跡土と同じ土（第2層）で覆われていた。袖は左右とも比較的良好な状態で検出された。左袖の内側は被熱を受けて赤化していた。左袖の下でP4が検出された。カマドの構築時よりも古いものか、カマドと同時期に



第2131図 第82号住居跡



第214图 第82号住居跡出土遺物 (1)



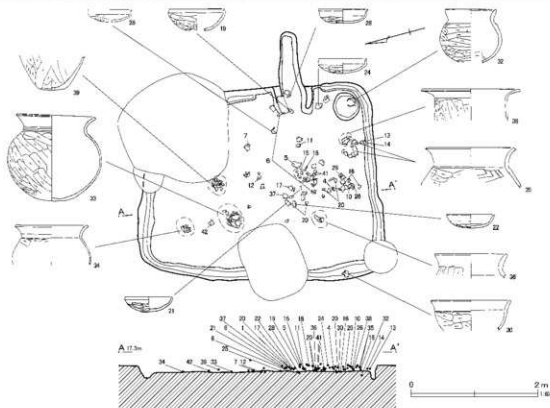
第215図 第82号住居跡出土遺物(2)

第67表 第82号住居跡出土遺物観察表(1)(第214図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	残存	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
1	須恵器	坏身	(9.4)	3.4	—	1/3	雲 赤粒 白粒	良好	灰	湖西産	159
2	須恵器	坏身	(7.1)	[2.3]	—	破片	長石 砂粒	良好	灰	未野産	
3	須恵器	坏身	(14.2)	[2.4]	—	破片	砂粒 白粒	良好	灰	未野産	
4	須恵器	坏身	—	[2.4]	—	破片	石英	良好	灰	自然釉 群馬産	159
5	須恵器	甕	(22.5)	[8.2]	—	破片	白粒 黒粒	良好	灰	自然釉 群馬産	
6	須恵器	甕	—	[8.8]	—	破片	長石 砂粒	良好	灰白	未野産	219
7	土師器	环	(10.0)	[2.2]	—	破片	角 砂粒 白粒	普通	にふい黄粒		
8	土師器	环	(11.1)	[2.4]	—	破片	雲 角 石英 黒粒	普通	にふい黄粒		
9	土師器	环	(11.0)	[3.2]	—	1/5	雲 角 白粒	良好	橙	模倣环	
10	土師器	环	(13.0)	[2.9]	—	1/5	雲 赤粒 白粒	普通	赤褐	北金型环 赤彩	
11	土師器	环	(9.7)	[2.7]	—	破片	角 砂粒 白粒	良好	にふい褐	北武藏型环	
12	土師器	环	(9.9)	[3.0]	—	1/5	角 砂粒 白粒	良好	橙		
13	土師器	环	(10.3)	[2.8]	—	1/5	角 赤粒 白粒	普通	橙	北武藏型环	
14	土師器	环	(10.5)	(2.8)	—	1/4	雲角石英砂粒赤粒白粒黒粒	普通	橙	北武藏型环	
15	土師器	环	(12.8)	[2.8]	—	破片	雲 赤粒 黒粒	良好	橙	有段口縁环	
16	土師器	环	(13.0)	[5.0]	—	1/5	雲 角 白粒	普通	橙	模倣环C	
17	土師器	环	(13.0)	3.8	—	1/5	角 長石 石英 砂粒 白粒 黒粒	普通	にふい橙	北武藏型环	
18	土師器	环	(13.0)	[2.8]	—	口縁破片	雲 角 石英 砂粒 白粒 黒粒	普通	にふい橙	北武藏型环	
19	土師器	环	(12.1)	[4.8]	—	1/4	角 長石 石英 砂粒 白粒	普通	橙	北武藏型环	
20	土師器	环	13.0	[4.4]	—	1/5	砂粒 赤粒	普通	にふい赤褐	内外面赤彩	
21	土師器	环	10.2	3.4	—	ほぼ完整	褐粒	良好	にふい橙	北武藏型环	159
22	土師器	环	10.6	3.0	—	ほぼ完整	角 砂粒 白粒	良好	橙		159
23	土師器	环	(13.0)	[4.2]	—	1/3	砂粒 白粒	良好	橙		159
24	土師器	环	10.4	3.2	—	4/5	角 赤粒 白粒 黒粒	普通	橙	模倣环C	159
25	土師器	环	9.6	2.7	—	2/3	雲 角 黒粒	普通	にふい橙		160
26	土師器	环	(11.5)	3.5	—	1/2	雲 角 黒粒	良好	橙	北武藏型环	160

第68表 第82号住居跡出土遺物観察表 (2) (第214・215図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	残存	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
27	土師器	環	(11.2)	3.5	—	1/4	砂粒 赤粒 白粒	普通	にぶい橙	赤彩 純比金型環	160
28	土師器	環	10.8	3.0	—	1/2	砂粒 赤粒	普通	にぶい橙	赤彩 純比金型環	160
29	土師器	環	(15.0)	[4.9]	—	1/5	角 砂粒 赤粒 白粒	良好	明赤褐	内面：放射状暗文	
30	土師器	鉢	(17.0)	[6.4]	—	破片	長石 石英 砂粒 黒粒	良好	褐灰		
31	土師器	鉢	(20.0)	[5.0]	—	破片	砂粒 赤粒 白粒 褐粒	良好	にぶい橙		
32	土師器	小型甕	11.3	[11.5]	—	1/2	角 長石	普通	にぶい黄橙	内面：黒褐	160
33	土師器	小型甕	17.4	18.8	7.6	3/4	長石 砂粒 赤粒	良好	にぶい黄橙		160
34	土師器	甕	16.0	[8.6]	—	口縁2/3	砂粒 赤粒	普通	にぶい橙		160
35	土師器	甕	(19.2)	[18.6]	—	口縁1/2	雲 砂粒 白粒	普通	にぶい赤褐		160
36	土師器	甕	(15.4)	[5.1]	—	口縁1/4	砂粒 赤粒	普通	明赤褐		
37	土師器	甕	(19.0)	[4.9]	—	口縁破片	雲 長石 砂粒 白粒	良好	にぶい黄橙		
38	土師器	甕	(21.0)	[6.6]	—	口縁1/4	雲 砂粒 赤粒 白粒 黒粒	良好	黄灰		
39	土師器	甕	—	[7.3]	5.7	底部のみ	角 砂粒 赤粒	普通	褐灰		
40	土師器	甕	—	[9.2]	(6.3)	底部破片	砂粒 赤粒 白粒	普通	にぶい橙	内面：灰色	
41	土師器	甕	—	[8.7]	(11.0)	底部1/2	雲 砂粒	良好	にぶい黄橙		
42	土師器	古付甕	—	[3.0]	—	破片	雲 長石 砂粒	良好	橙		



第216図 第82号住居跡遺物出土状況

使用されていたかは不明である。

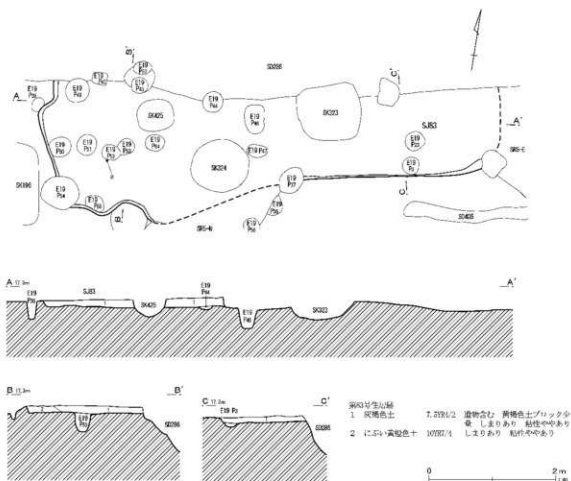
貯蔵穴は、カマドの右側、住居跡内南東隅に設けられている。規模は直径44cmの円形で、深さ14cmである。貯蔵穴の底面からやや浮いた状態で、土師器の小型丸底甕が横向きの状態で出土した。

ピットはP1～P4の4基が検出された。深さはP1から順に16cm、5cm、20cm、15cmである。P3、P4はカマドの脇につくられている。P1、P2は浅いが、

柱を据えた痕跡である可能性がある。

周溝は全周しており、幅は約20cmで細く、床面からの深さは12cmとしっかりしている。

出土遺物は、図示した遺物のほかに、破片で土師器の甕155片、環85片、鉢4片、不明約300片と住居跡内南側を中心として全体的に多めである。須恵器は甕など破片数は少ないが、高環の破片が目立つ。



第217図 第83号住居跡

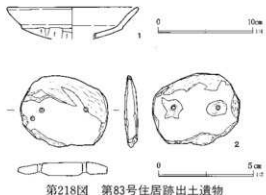
第69表 第83号住居跡出土遺物観察表 (第218図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	残存	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図取
1	土師器	杯	(14.0)	[3.3]	—	破片	雲黒粒	普通	濃い黄褐色	西側 根椀杯	
2	石製品	有孔円板	幅3.9	長4.8	厚0.7	ほぼ完整				滑石製	210

第83号住居跡 (第217図)

西区二面の北端中央にあるE-19、F-19グリッドに位置する。北側を第286号溝跡に大きく壊されているほか、第425号土坑、第323号土坑、第324号土坑に切られている。ほかに、多くのピットが住居跡を切って構築されている。また、本遺構は第5号方形周溝墓の上層を切って構築されている。西側半分は覆土が不明瞭で、壁の確認が困難であった。

平面形は隅丸長方形で、確認された範囲での規模は、東西7.30m、南北2.13mである。確認面からの深さは21cmであった。主軸方向はN-6°-Wをとる。確認された覆土は2層である。



第218図 第83号住居跡出土遺物

カマドや周溝などの諸施設は検出されなかった。出土遺物は、土器破片が約100点あったが、図示できたものは少ない。第218図に示した。

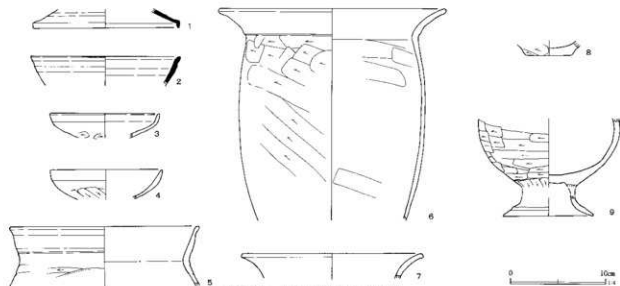
第84号住居跡 (第219図)

西区二面の中央やや北西寄りにあるF-22、F-23グリッドに位置する。西側周溝の一部とカマド燃焼部の底面のみの検出である。第85号住居跡よりも新しく、西側周溝が本遺構と平行であることから、第85号住居跡の建て替えと考えられる。第389号溝跡、第212号土坑、第210号土坑に大きく壊されている。また、第85号住居跡の上部を切っている。第390号溝跡との新旧関係は不明である。

平面形は不明だが、長方形か方形とみられ、確認された範囲での規模は、南北4.86m以上である。確認面が床面であった。

カマドは北側に設けられ、確認できた燃焼部の掘り込みの規模は長軸36cm、短軸25cmの楕円形で、深さは6cmである。カマド焚き口付近から土師器の甕が出土した。

西側でのみ検出された周溝は、幅約17cmである。



第220図 第84号住居跡出土遺物

出土遺物は、第220図に図示したもの以外に土器破片が40片ほどと少ない。

第85号住居跡 (第219図)

西区二面の中央やや北西寄りにあるE-22、E-23、F-22、F-23グリッドに位置する。第84号住居跡より古く、建て替える前の住居跡で、床面が第84号住居跡よりやや低い。北側では、第389号溝跡、第212号土坑、第210号土坑に大きく壊され、南東部では第142号井戸跡に切られている。また一方では、第390号溝跡、第88号住居跡を切っている。

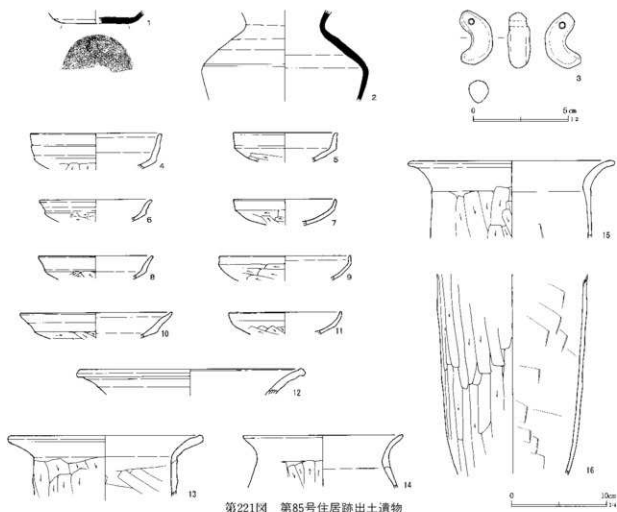
平面形は長方形で、規模は南北5.38m、東西4.92mである。確認面からの床面の深さは11cmである。主軸方向はN-13°Wをとる。

カマドは北に設けられており、規模は、長さ113cm、幅21cm、深さ10cmである。軸は確認されなかった。

ビッドは、P1-P9の9基が検出された。P1、

第70表 第84号住居跡出土遺物観察表 (第220図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	残存	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
1	須恵器	蓋	(16.0)	[2.0]	—	破片	白粒 針	良好	灰	南北企産	161
2	須恵器	環	(16.0)	[3.1]	—	口縁破片	砂粒 白粒 針	良好	灰	南北企産	
3	土師器	環	(12.0)	[2.6]	—	破片	砂粒	普通	にぶい赤褐	北武藏型環	
4	土師器	環	(12.0)	[3.1]	—	破片	雲 赤粒 白粒	普通	にぶい橙	北武藏型環	
5	土師器	甕	(20.0)	[6.3]	—	口縁破片	雲 角 赤粒	普通	にぶい橙		
6	土師器	甕	(24.2)	[22.3]	—	1/5	雲 砂粒 赤粒	普通	にぶい褐		
7	土師器	甕	(19.5)	[2.7]	—	破片	雲 角 長石 石英 黒粒	普通	にぶい橙		
8	土師器	甕	—	[1.6]	4.8	底部1/2	砂粒 白粒 黒粒 小礫	良好	にぶい赤褐	内面：灰白	
9	土師器	台付甕	—	[10.3]	(9.6)	1/3	白粒 黒粒	普通	橙		



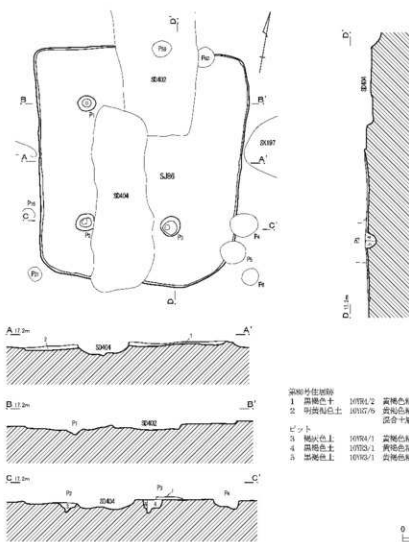
第221図 第85号住居跡出土遺物

第71表 第85号住居跡出土遺物観察表 (第221図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	残存	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
1	須恵器	環	—	[1.4]	(7.0)	底部1/2	石英 砂粒 赤粒 白粒 針 黒粒	良好	にふい・褐	南北金産 P6	
2	須恵器	壺	—	[9.9]	—	1/5	長石 砂粒 白粒	良好	灰	未野産	161
3	土製品	勾玉	幅1.1	長2.9 厚1.2	—	完形	砂粒 赤粒 褐粒	不良	浅黄橙		209
4	土師器	環	(15.0)	[3.7]	—	破片	雲 赤粒 白粒	普通	にふい・黄橙	有段口縁環	
5	土師器	環	(11.0)	[3.0]	—	1/5	雲	良好	橙	模倣環C	
6	土師器	環	(12.0)	[2.3]	—	破片	砂粒	普通	浅黄橙	模倣環C	
7	土師器	環	(11.0)	[2.7]	—	破片	雲 角 白粒	普通	黄褐	北武藏型環	
8	土師器	環	(12.1)	[2.4]	—	破片	雲 赤粒 白粒 黒粒	普通	明赤褐	模倣環C	
9	土師器	環	(14.0)	[2.6]	—	破片	砂粒	良好	にふい・褐	北武藏型環	
10	土師器	皿	(16.1)	[2.7]	—	破片	角 長石 白粒 黒粒	良好	にふい・橙		
11	土師器	環	(12.0)	[2.3]	—	破片	雲 赤粒	普通	明褐	北武藏型環	
12	土師器	甕	(24.4)	[2.8]	—	口縁1/3	雲 角 黒粒	良好	橙		
13	土師器	甕	(20.6)	(4.4)	—	口縁破片	雲 石英 赤粒 白粒	普通	外面灰褐	内面：にふい・橙	
14	土師器	甕	(17.0)	[5.6]	—	口縁破片	赤粒 白粒 黒粒	普通	にふい・黄橙		
15	土師器	甕	(22.0)	[8.1]	—	口縁破片	赤粒	良好	橙		
16	土師器	甕	—	[21.3]	—	胴部破片	雲 赤粒	普通	にふい・褐		

P2、P7を含む計4本の主柱穴で上屋を支えたと考えられる。ピットの深さは、P1から順に52cm、52cm、49cm、11cm、10cm、18cm、23cm、48cm、12cmである。周溝は、幅約12cmで全周している。

出土遺物は、第221図に図示したもの以外に土師器の環78片、甕318片、器種不明247片、須恵器環15片、甕1片、器種不明13片あり、出土総量は多めである。3は土製勾玉で東側周溝付近から出土した。



- 第222号住居跡
- 1 赤褐色土 10194/2 赤褐色粘土ブロック(Φ5~8cm)多数 乱状
 - 2 赤褐色土 10197/6 赤褐色粘土ブロック(Φ5~8cm)と暗褐色土の混合土層 縦リ方
- ピット
- 3 黒灰色土 10194/1 赤褐色粘土ブロック(Φ5~8cm)まじり
 - 4 黒褐色土 10193/1 赤褐色粘土ブロック(Φ5~8cm)多数 柱穴掘り方
 - 5 赤褐色土 10192/1 赤褐色粘土ブロック(Φ5~8cm)少数 柱穴掘り方

第222図 第86号住居跡

第72表 第86号住居跡出土遺物観察表(第223図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	残存	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図取
1	土師器	壺	—	[2.0]	(8.0)	底部破片	雲角石英砂粒	普通	黄い黄緑	石英粒：多	

第86号住居跡(第222図)

西区二面の北西隅にあるD-19、E-19グリッドに位置する。第402号溝跡と第404号溝跡が中央を南北方向に縦断し、遺構を大きく壊している。

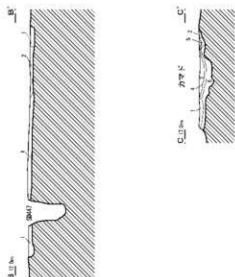
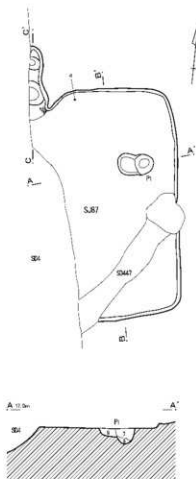
平面形は南北に長い隅丸長方形で、規模は長軸3.67m、短軸3.20mである。確認面からの深さは4.8cmと極めて浅く、確認された覆土は1層のみで、遺存状態は悪い。主軸方向はN-8°-Wをとり、南北軸を意識して構築されたとみられる。



第223図 第86号住居跡出土遺物

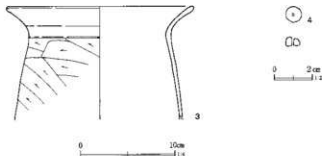
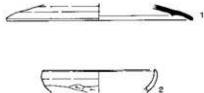
ピットはP1-P3の3基が検出され、これらを含む4本柱で上屋を支えていたと考えられる。深さはP1から順に、6cm、14cm、22cmである。竪やカマドは検出されなかった。

出土遺物は、土師器の破片が20点ほどと極めて少ない。図示できたのは底部の破片が1点のみである。



- 階号仕舞跡
- 1 灰黄褐色土 10094/2 黄褐色粘土ブロック(φ1~2cm)少量 灰土・炭化物多量 瓦葺
 - 2 黄褐色土 10092/2 黄褐色粘土ブロック(φ3~5cm)多量 灰土・炭化物少量
- カマド
- 3 におい・褐色土 10095/3 黄褐色粘土ブロック(φ3~5cm)少量 灰土・炭化物(φ3~5cm)多量 カマド西壁上
 - 4 黒色土 10092/1 灰多量 灰土ブロック 炭化物少量 瓦葺
 - 5 灰褐色土 10094/1 粘土粒子(φ2~3cm)全体に含む 障子網り方
 - 6 焼灰色土 10095/1 粘土粒子(φ2~3cm)黄褐色粘土ブロック(φ3~5cm)全面にまばら カマド網り方
- ピット
- 7 灰黄褐色土 10094/2 粘土段下(φ1~2cm)まばら 炭化物少量 黄褐色粘土ブロック(φ2~3cm)少量
 - 8 黄褐色土 10092/2 炭化物少量 黄褐色粘土ブロック(φ3~5cm)まばら
 - 9 焼灰色土 10094/2 粘土粒子(φ1~2cm)多量 炭化物少量 黄褐色粘土ブロック(φ1~2cm)少量

第224図 第87号住居跡



第225図 第87号住居跡出土遺物

第73表 第87号住居跡出土遺物観察表 (第225図)

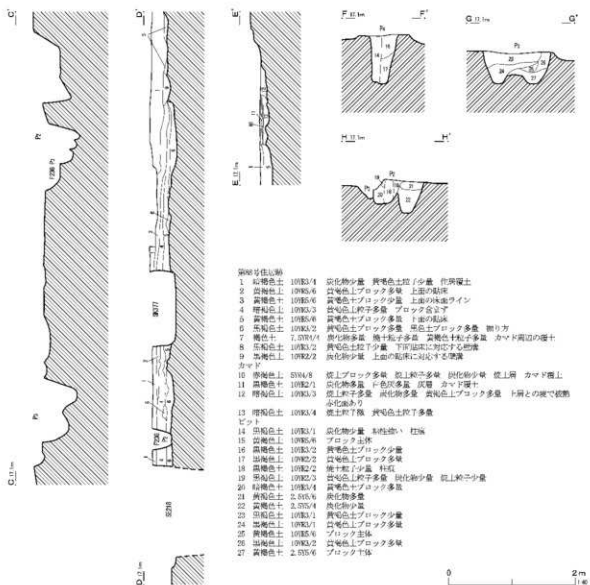
番号	種別	器種	口径	器高	底径	残存	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
1	須恵器	蓋	(20.4)	[1.7]	—	破片	砂粒 白粒	良好	灰	南北金産	
2	土師器	環	(7.0)	[2.4]	—	破片	赤粒 白粒	良好	にふい赤褐	北武藏型環	
3	土師器	甕	(20.0)	[11.9]	—	口縁1/4	雲 赤粒 黒粒	普通	にふい・程		
4	土製品	白玉	幅0.9 厚0.5			完形			灰赤		

第87号住居跡 (第224図)

西区二面の中央部やや北東寄りにあるG-21、G-22グリッドに位置する。西側半分は中世の大溝で

ある第4号溝跡に大きく壊され、東半分のみが遺存していた。南側では第447号溝跡を切っている。

平面形は隅丸長方形で、規模は南北3.67m、東西



第227図 第88号住居跡(2)

は確認された範囲で2.28mである。確認面からの床面の深さは8.7cmと浅い。主軸方向はN-10°-Wをとる。

カマドは北側に設けられているが、東半分のみが遺存していた。規模は、長さ118cm、確認された範囲での幅は31cm、深さは6cmである。覆土は炭化物層(第3層)の下に灰層(第4層)が形成されていた。燃焼部の火焼面に被熱を受けた痕跡は残っていない。短い右袖が確認されている。

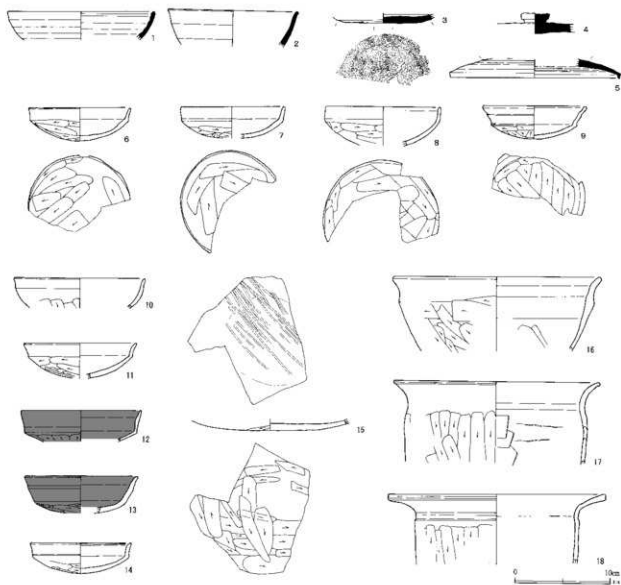
ピットはP1の1基のみが検出された。深さは26

cmである。周溝は確認されなかった。

出土遺物は、第225図に図示したものの以外に土師器の破片が約40片、須恵器の破片が3片と少ない。4の白玉は、カマドの右脇で出土したものである。

第88号住居跡(第226・227図)

西区二面の中央西寄りにあるE-23、F-23グリッドに位置する。第142号井戸跡、第222号井戸跡、第218号井戸跡、第230号井戸跡、第220号井戸跡、第377号土坑、第412号土坑、第397号土坑、第399号土



第228図 第88号住居跡出土遺物

第74表 第88号住居跡出土遺物観察表 (1) (第228図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	残存	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
1	須恵器	環	(16.1)	[3.1]	—	破片	白粒	良好	にふい橙		
2	須恵器	埴	(13.8)	[3.8]	—	破片	砂粒 白粒 針	良好	灰	南北企産	
3	須恵器	環	—	[1.0]	(10.0)	破片	石英 砂粒 白粒 黒粒 小磯	良好	灰	南北企産	
4	須恵器	蓋	—	[2.2]	—	破片	長石 白粒 針	良好	灰	南北企産	219
5	須恵器	蓋	(18.0)	[2.0]	—	破片	砂粒 赤粒 白粒	良好	灰	南北企産	
6	土師器	環	(10.9)	3.5	—	1/2	角 砂粒 白粒	普通	橙	模倣環C	
7	土師器	環	(11.1)	[3.3]	—	1/2	雲 黒粒	普通	橙	模倣環C	161
8	土師器	環	12.2	4.1	—	1/3	砂粒 赤粒	普通	橙		161
9	土師器	環	(11.0)	3.5	—	1/3	雲 角 赤粒	普通	橙		161
10	土師器	環	(14.0)	[3.2]	—	破片	雲 角 白粒	普通	にふい黄橙		
11	土師器	環	(12.0)	[3.7]	—	1/5	角 長石 黒粒	良好	橙		
12	土師器	環	(12.7)	[3.3]	—	破片	雲 角	普通	黒褐	模倣環	161
13	土師器	環	(12.1)	[3.9]	—	1/4	角 白粒 黒粒	普通	にふい黄橙		
14	土師器	環	(10.6)	3.2	—	1/5	砂粒 白粒	普通	にふい黄橙	内面・外面口縁部赤彩	
15	土師器	皿	—	[0.9]	—	1/4	角 赤粒	普通	にふい橙		
16	土師器	鉢	(22.0)	[7.8]	—	口縁破片	雲 角 黒粒	普通	褐灰		

第75表 第88号住居跡出土遺物観察表(2) (第228図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	残存	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版	
17	土師器	甕	(22.0)	[8.6]	—	破片	赤粒	黒粒	普通	にふい燻		
18	土師器	甕	(23.0)	[7.4]	—	口縁破片	赤粒	赤粒	白粒	普通	にふい燻	

坑、第400号土坑、第276号溝跡など多くの遺構に切られている。一方で、第390号溝跡を切っている。

平面形は方形で、南東辺の外側および南隅の一部で周溝が検出されていることから、建て替えがなされたと考えられる。規模は、内側の周溝で南西—北東6.83m、南西に設けられた張り出し部分を含めると8.60m、北西—南東6.92mである。確認面からの床面の深さは16cmである。主軸方向はN—51°—Eをとる。

カマドは、南西辺のやや北西寄りて確認された焼土範囲の部分に設けられていたとみられる。焼土範囲は長さ120cm、幅44cmで、わずかな凹みが確認された。これが燃焼部と煙道部の痕跡であると考えられる。覆土は、灰層(第11層)の上に炭化物・焼土粒子を含む層が堆積し(第10層)、12層の上面で燃焼面が確認されている。

ビットは、P1—P4の4基が検出された。P1、P2、P3を含む4本の柱穴に立てられた主柱により上屋を支えたと考えられる。特にP2、P3は数回掘り返された痕跡があり、建て替えの度に同じ位置に掘り直した柱穴に柱を立てたとみられる。P4はP1とP2の中間に位置し、補助柱穴であった可能性がある。ビットの深さは、P1から順に80cm、57cm、55cm、78cmである。

周溝は、北東辺を除く各辺で検出された。南西隅では周溝が二重になっていることから、建て替えによる掘り直しとみられる。幅は約27cmである。また、北西部分に、カマドの痕跡を囲むように張り出し状の掘り込みが確認されている。これは住居の建て替えに伴って広げられたものである可能性がある。

出土遺物には、須恵器の環、壺、蓋、土師器の甕、環、皿、鉢などがある。第228図に示したもののほかに土師器の甕が175片、環58片、皿2片、須恵器の

環9片、蓋4片、甕4片、壺8片などが出土した。

第89号住居跡(第229図)

西区二面の南端中央にあるG—27、G—28、H—27、H—28グリッドに位置する。グリッドビットを除けば、特に重複する遺構はなかった。

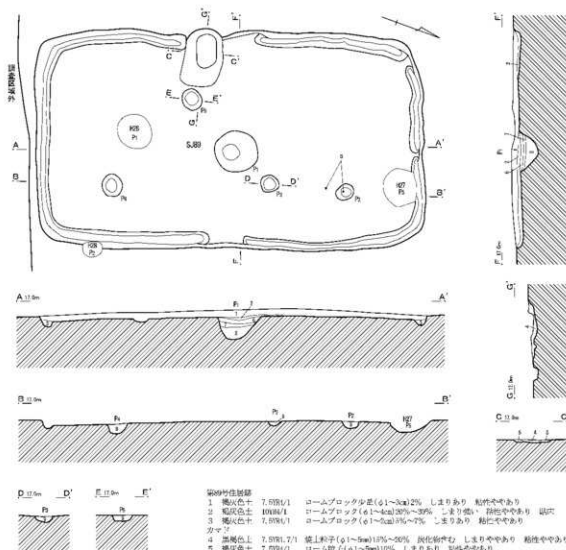
平面形は南北に長い隅丸方形で、規模は南北6.15m、東西3.44mである。確認面からの床面の深さは14cmあった。確認できた覆土は1層である。主軸方向はN—20°—Wをとる。

カマドは西壁の中央やや南寄りに設けられている。袖の構造が明確ではなく、いわゆる初期カマドである。燃焼部にあたる凹みおよびその周囲には直径1cmの焼土ブロックと炭化物を多量に含む黒色土層(第5層)が堆積していた。袖の痕跡は左右にわずかな高まりとして確認された。第6層は袖の痕跡とみられる。カマドは住居跡の外側にわずかに張り出すが、煙道がのびているような様子は確認できなかった。カマドの規模は、長軸92cm、短軸60cm、燃焼部の掘り込みの深さは5cmである。

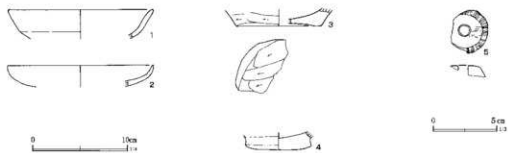
ビットは、P1—P5の5基が検出された。P2、P4は深さも同じくらいで、その配置から、柱穴である可能性がある。P1は住居跡の中央に設けられており、P5はカマドの手前に位置している。深さはP1から順に、36cm、11cm、8cm、15cm、10cmである。

周溝は幅約20cmで、カマド脇、東壁と北壁の一部を除いて全周している。東壁の周溝の切れ目は、出入り口が設けられていたためのものと考えられる。

出土遺物は、第230図に示したもののほかに、土師器の甕26片、脚部2片、底部4片、皿・鉢各1片、環30片、器種不明200片など、小破片ばかりが出土している。5は紡錘車の破片で、P2の覆土直上とその脇で出土した。



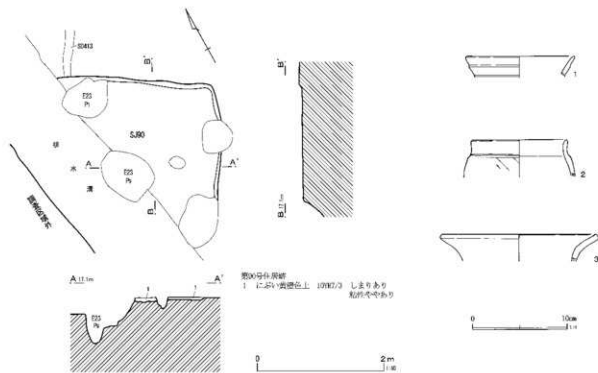
第229図 第89号住居跡



第230図 第89号住居跡出土遺物

第76表 第89号住居跡出土遺物観察表 (第230図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	残存	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
1	土師器	環	(16.0)	[3.1]	—	破片	長石 砂粒 赤粒	普通	にぶい黄橙	北武蔵型環	209
2	土師器	環	(16.0)	[2.3]	—	破片	長石 砂粒	不良	橙		
3	土師器	甕	—	[1.8]	(9.0)	底部1/4	雲 角 赤粒 白粒	普通	にぶい赤褐		
4	土師器	甕	—	[1.9]	7.1	底部	雲片岩 石英 赤粒 白粒 小礫	良好	にぶい黄橙	周溝	
5	石製品	紡錘車	厚[1.0]	上[3.5]	底2.7	1/3	滑石				



第231図 第90号住居跡・出土遺物

第77表 第90号住居跡出土遺物観察表 (第231図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	残存	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
1	土師器	環	(12.0)	[2.3]	—	破片	角 石英 砂粒 白粒	普通	にぶい黄橙	有段口縁環	
2	土師器	小型壺	(10.2)	[3.8]	—	破片	雲 赤粒 白粒	普通	明赤褐		
3	土師器	甕	(17.3)	[2.9]	—	破片	雲 長石 砂粒 赤粒	普通	にぶい黄橙		

第90号住居跡 (第231図)

西区二面の西端中央にあるE-23グリッドに位置する。検出されたのは住居跡の東側半分である。いくつかのグリッドビットに切られている。第413号溝跡との新旧関係は不明である。

検出された範囲での規模は、東西2.23m、南北2.15mで、確認面からの床面の深さは7cmと浅い。確認された覆土は1層である。主軸方向はN-27-Eをとる。カマドや、明らかに住居跡に伴うビットなどは検出されなかった。

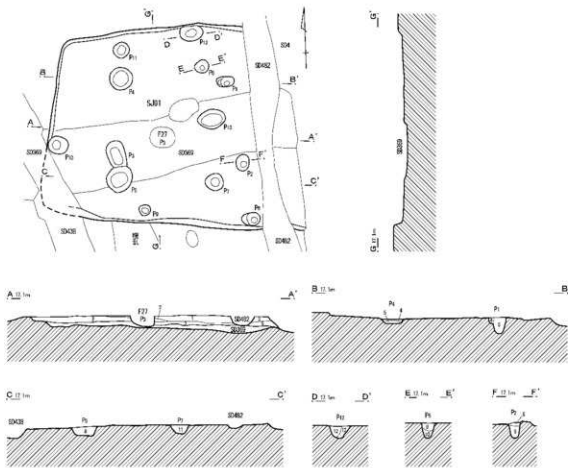
出土遺物は、土師器の環2片、甕4片、器種不明

21片と極めて少ない。

第91号住居跡 (第232図)

西区二面の南端西寄りにあるF-27、G-27グリッドに位置する。東壁は第4号溝跡、第382号溝跡に大きく壊され、残っていない。このほか、第438号溝跡が南西隅を壊している。また本遺構は、第369号溝跡の上部を切っている。

平面形は東西に長い隅丸長方形で、規模は南北3.17m、確認された範囲での東西は4.05mである。確認面からの床面の深さは11cmである。主軸方向は

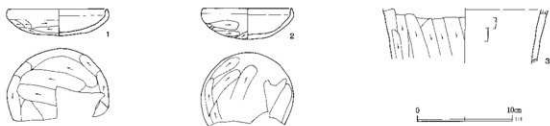


- 第91号住居跡
- 1 焼褐色土 10YR3/3 炭化物粒子、炭土粒子含む しまりあり 粘性あり
 - 2 焼褐色土 10YR3/3 黄褐色土粒子、炭化物粒子、炭土粒子含む しまりあり 粘性あり
 - 3 褐色土 10YR4/4 黄褐色土ブロック多量 炭土粒下、炭化物粒下少量 しまり強い、粘性あり 粘床
- ピット
- 4 焼褐色土 10YR3/3 黄褐色土粒子含む しまりあり 粘性あり
 - 5 黄褐色土 2.5Y5/1 黄褐色土ブロック多量 しまりあり 粘性強い
 - 6 黄褐色土 10YR3/3 黄褐色土ブロック多量 しまりあり 粘性強い
 - 7 黄褐色土 10YR2/2 黄褐色土粒子含む しまりあり 粘性強い

- 8 褐色土 10YR4/4 黄褐色土ブロック多量 しまりあり 粘性強い
- 9 黄褐色土 10YR3/3 黄褐色土粒子含む しまりあり 粘性強い
- 10 灰オリーブ色土 5Y5/2 黄褐色土ブロック含む しまりあり 粘性強い
- 11 褐色土 10YR4/4 黄褐色土粒子含む しまりあり 粘性強い
- 12 黄褐色土 10YR3/2 黄褐色土「少量」 しまりあり 粘性強い
- 13 に近い黄褐色土 10YR5/4 黄褐色土ブロック多量 しまりあり 粘性強い

0 2m
1m

第232図 第91号住居跡



第233図 第91号住居跡出土遺物

第78表 第91号住居跡出土遺物観察表 (第233図)

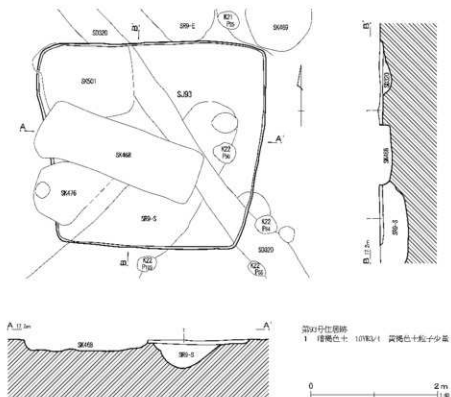
番号	種別	器種	口径	器高	底径	残存	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
1	土師器	環	10.5	2.8	—	1/2	雲角 砂粒 黒粒	普通	にぶい・橙	北武蔵型環	161
2	土師器	環	9.6	3.2	—	ほぼ完形	雲角 赤粒 白粒	普通	橙	北武蔵型環	161
3	土師器	甕	—	[5.7]	—	破片	雲 砂粒 赤粒	普通	にぶい・褐		

0.62mである。確認面からの床面の深さは10cmと浅い。主軸方向はN-11°-Wをとる。

カマドは北壁に設けられ、検出された範囲での規模は長さ167cm、袖を含めた幅が53cm、煙道部の幅は35cmである。煙道部は北へ長くのびる。袖は明瞭で

はなかったが、左右で確認された。ピット、貯蔵穴、周溝などは検出されなかった。

出土遺物は少ない。カマドの周辺で土師器の甕が出土した。第235図に図示したもののほかに、土師器の甕など25片、須恵器の甕が1片出土している。



第236図 第93号住居跡



第237図 第93号住居跡出土遺物

第80表 第93号住居跡出土遺物観察表 (第237図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	残存	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図取
1	須恵器	環	(14.0)	[3.8]	—	口縁破片	砂粒 赤粒 黒粒 褐粒	普通	黄灰		
2	須恵器	高台付埴	(15.0)	[2.2]	—	口縁破片	白粒 黒粒	普通	灰白		
3	内黒土器	高台付埴	—	[2.3]	(7.6)	底部1/4	雲 石英	普通	普通	内面黒色処理	
4	土師器	小型甕	(12.0)	[4.2]	—	口縁破片	雲 赤粒 白粒 黒粒	普通	黒褐		

第93号住居跡 (第236図)

東区のはほぼ中央にあるK-22グリッドに位置する。多くの遺構が重複しており、第501号土坑、第468号土坑、第476号土坑に壊されている。一方、第320

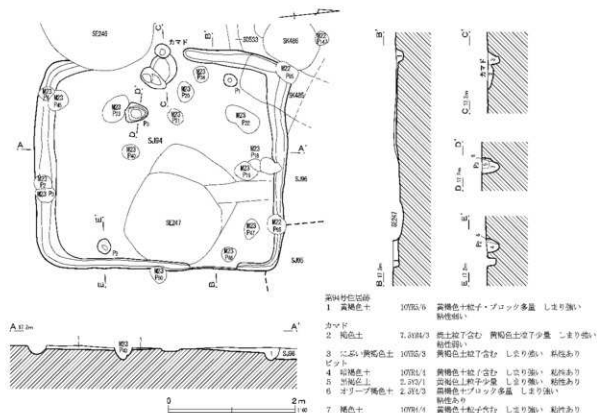
号溝跡、第9号方形周溝墓の南側周溝を切っている。

平面形は北壁がやや長い台形で、規模は東西3.60m、南北3.28mである。確認面からの床面の深さは8cmと浅く、確認できた覆土は1層のみである。主

軸方向はN-2°-Wをとる。

出土遺物は、第237図に図示したもののほかに、破片で土師器の甕7片、環14片、器種不明60片、須恵

器の環21片、甕7片、壺1片、器種不明6片が出土した。須恵器の環の底部は糸切りである。



第238図 第94号住居跡

第94号住居跡（第238図）

東区の中央やや南東にあるM-22、M-23グリッドに位置する。東側1/3を第247号井戸跡に壊され、西壁の一部を第246号井戸跡に壊されているほか、複数のグリッドピットに切られている。一方、北壁の一部は第96号住居跡を切っており、第96号住居跡よりも新しいことが確認できた。

平面形は南北にやや長い隅丸長方形で、規模は南北4.00m、東西3.46mである。確認面からの床面の深さは、周溝付近では9.5cmだが、ほとんど床面での検出であり、覆土が遺存しているのは周溝のみであった。主軸方向はN-86°-Wをとる。

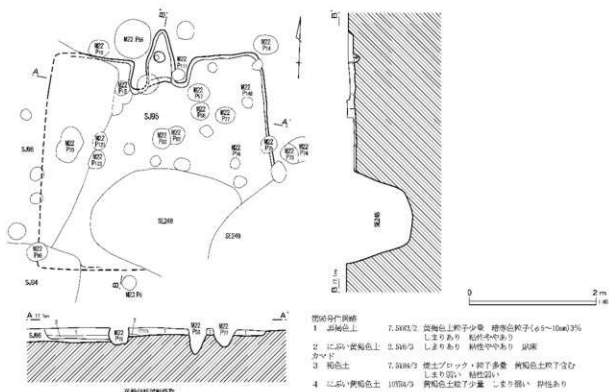
カマドは西壁の中央に設けられている。煙道部とみられる構造は残っており、燃焼部の掘り方だけが遺存していた。規模は長さ64cm、幅40cm、掘り込

みの深さは8cmで、掘り込みのくぼみでは、焼土粒子を含む覆土が検出された。

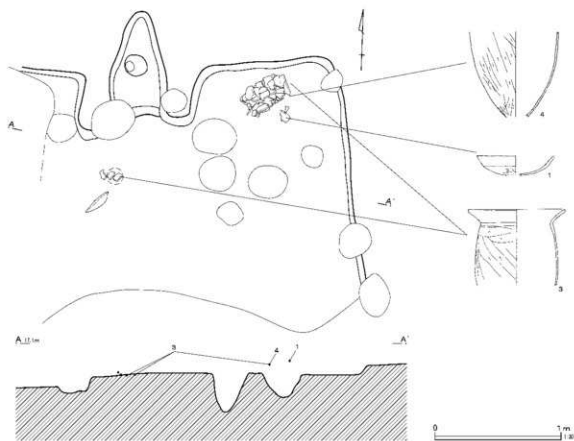
ピットはP1～P3の3基を確認したが、配置は不規則で、柱穴とは考えにくい。ピットの深さはP1から順に23cm、20cm、28cmである。

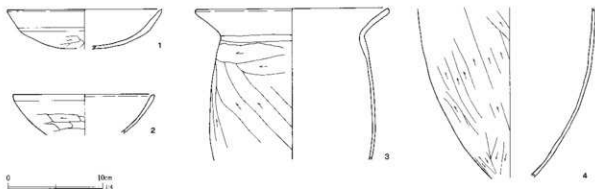
周溝は、幅14～30cmでほぼ全周している。カマド周辺のほかに東壁の中央やや北寄りで周溝は切れており、この位置に出入り口が設けられていた可能性がある。

覆土はほとんど残っていなかったため、出土遺物はおもに周溝からで、出土量は極めて少なかった。模倣環の底部とみられる破片を含めた土師器の環3片、土師器の甕9片、器種不明10片、須恵器の甕の小破片などがあったが、図示できるものはなかった。



第239図 第95号住居跡





第241図 第95号住居跡出土遺物

第81表 第95号住居跡出土遺物観察表 (第241図)

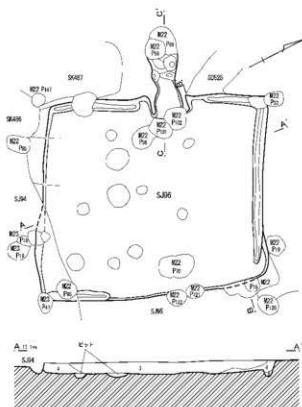
番号	種別	器種	口径	器高	底径	残存	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
1	土師器	環	(16.4)	4.1	—	1/3	角 砂粒 白粒	普通	橙	磨耗	162
2	土師器	環	(12.7)	[4.2]	—	破片	赤粒 黒粒 褐粒	不良	浅黄橙		
3	土師器	甕	21.2	[16.4]	—	1/3	長石 砂粒 赤粒	普通	橙		162
4	土師器	甕	—	[18.5]	—	1/3	長石 砂粒 赤粒 白粒	普通	橙	外面煤付着	

第95号住居跡 (第239・240図)

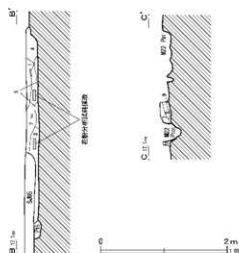
東区の中央やや南東にあるM-22、M-23グリッドに位置する。多くの遺構に壊されていたが、カマドも遺存して、掘り込みも比較的光明であった。南側を第248号井戸跡、第249号井戸跡に大きく壊され

ている。また、西側では第96号住居跡を切っており、第96号住居跡よりも新しい。南西隅で重複する第94号住居跡は、住居形態が第96号住居跡と類似する点から、本遺構よりも古いと考えられる。

平面形は方形で、規模は東西3.45m、南北が推定



第242図 第96号住居跡



築居住居跡

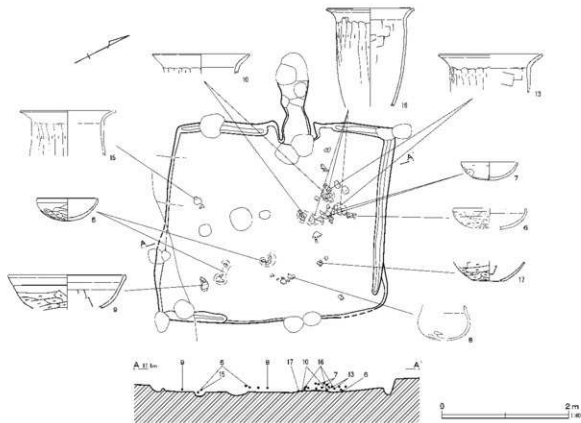
- | | | |
|-----------|---------|--|
| 1 褐色土 | 7.910/1 | しりりあり 灰粒や砂あり |
| 2 紫色土 | 7.910/2 | 壁上のり(お-5cm)の含む 遺物含む
しりりや砂あり 粘りやあり |
| 3 灰色土 | 7.910/3 | 壁土定(お-10cm)の 炭化物質が多量
黄褐色に粒子多量 しりりあり 粘りやあり |
| 4 黒褐色土 | 7.910/4 | 黄褐色土質が多量 しりりあり 粘りあり |
| 5 にぶみ灰色土 | 2.507/3 | しりりや砂あり 粘りやあり 灰粒の 多 |
| 6 ズリーブ灰色土 | 2.507/1 | 黄褐色土質(多量) しりり強い 灰粒あり |
| 7 緑褐色土 | 7.910/5 | 粘土粒子少量 地上粘土ブロック少量
しりりあり 粘りあり |
| 8 暗褐色土 | 7.910/6 | 焼かた子、ブロック含む しりりあり 灰粒あり |
| 9 黒褐色土 | 8.902/1 | 灰多量 しりり弱い 粘り弱い 灰層 |

3.36mである。確認面からの床面の深さは、深いところで18cmである。主軸方向はN-0°で、カマドを真北に向けて構築されている。覆土は、厚さ4~5cmの貼床を含めて2層が確認された。

カマドは、北壁の中央に設けられている。覆土に焼土粒子が少量含まれているのみで、底面や壁面に

はそれほど被熱の痕跡を残さず、袖の遺存状態も不明瞭であった。カマドの規模は長さ96cm、袖を含めた幅が96cm、燃焼部の幅が36cmである。焚き口付近は後世のビットによって壊されている。住居跡に伴うビットや周溝は確認されなかった。

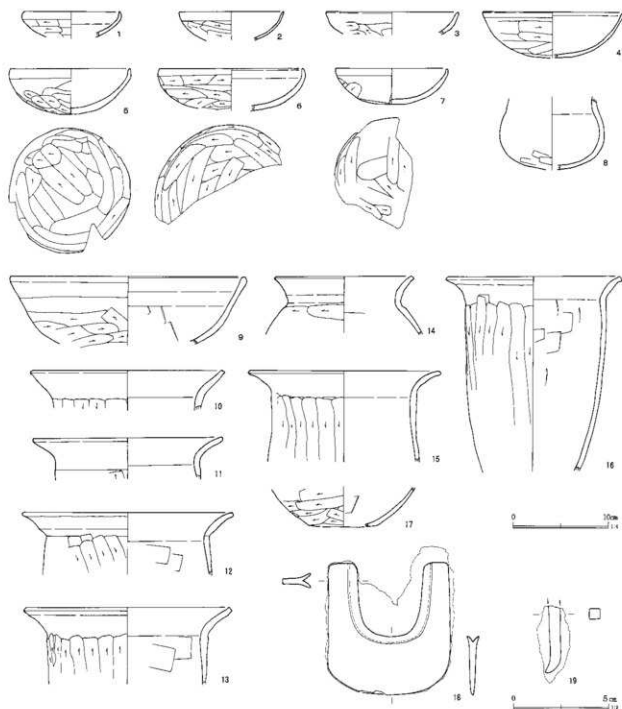
出土遺物は、第241図に図示したものの他に、土師



第243図 第96号住居跡遺物出土状況

第82表 第96号住居跡出土遺物観察表 (第244図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	残存	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図取
1	土師器	環	(10.0)	[2.7]	—	破片	角 赤粒 白粒	不良	橙	北武藏型環	
2	土師器	環	(10.0)	[3.1]	—	破片	赤粒 白粒 黒粒	不良	橙色	北武藏型環	
3	土師器	環	(14.2)	[2.4]	—	破片	角 長石 黒粒	普通	にふい赤褐	北武藏型環	
4	土師器	環	(15.0)	4.9	—	1/5	赤粒 白粒	普通	橙		
5	土師器	環	12.8	4.8	—	ほぼ完形	長石 砂粒 赤粒	普通	にふい橙	北武藏型環	162
6	土師器	環	(15.3)	[4.5]	—	1/3	角 砂粒 白粒	普通	橙	北武藏型環	162
7	土師器	環	(11.9)	3.8	—	1/4	雲 赤粒 黒粒	不良	にふい橙		
8	土師器	小型壺	—	[7.7]	—	1/5	石英 砂粒 赤粒	不良	にふい黄橙		
9	土師器	鉢	(25.0)	[7.2]	—	1/4	雲 石英 白粒	普通	黒褐		
10	土師器	甕	(20.6)	[4.2]	—	口縁破片	砂粒 白粒	普通	にふい黄橙		
11	土師器	甕	(20.2)	[4.4]	—	口縁破片	砂粒 赤粒 白粒 黒粒 褐粒	普通	にふい黄橙		
12	土師器	甕	(22.3)	[6.5]	—	口縁破片	砂粒 赤粒 白粒	普通	にふい黄褐		
13	土師器	甕	22.8	[8.3]	—	口縁2/3	砂粒 赤粒 白粒	普通	にふい橙	内面口縁に覆付着	162
14	土師器	甕	(15.2)	[6.3]	—	口縁1/3	雲 石英 砂粒 赤粒 黒粒	普通	浅黄橙		
15	土師器	甕	(20.4)	[9.6]	—	口縁1/5	雲 角 石英 赤粒	普通	赤褐		
16	土師器	甕	(19.2)	[25.0]	—	1/4	砂粒 赤粒	普通	にふい橙		162
17	土師器	甕	—	[4.3]	(7.5)	底部1/2	赤粒 白粒	普通	褐		
18	鉄製品	麻矢	刃幅6.5	刃先部幅3.0	耳部幅1.5	長7.0					222
19	鉄製品	釘?	幅0.6	長[3.6]							222



第244図 第96号住居跡出土遺物

器の甕16片、坏6片、器種不明18片のほか、須恵器の坏、甕の破片など数点と、全体的に少ない。3と4は、カマドの右脇で、床面から少し浮いた位置で出土した土師器の甕で、同一個体とみられる。

なお本遺構では、7世紀末から8世紀にかけての遺跡の植生・周辺環境を調べるため、覆土1層において花粉分析の試料採取をおこなった。分析結果は

VIII-1に掲載した。

第96号住居跡（第242・243図）

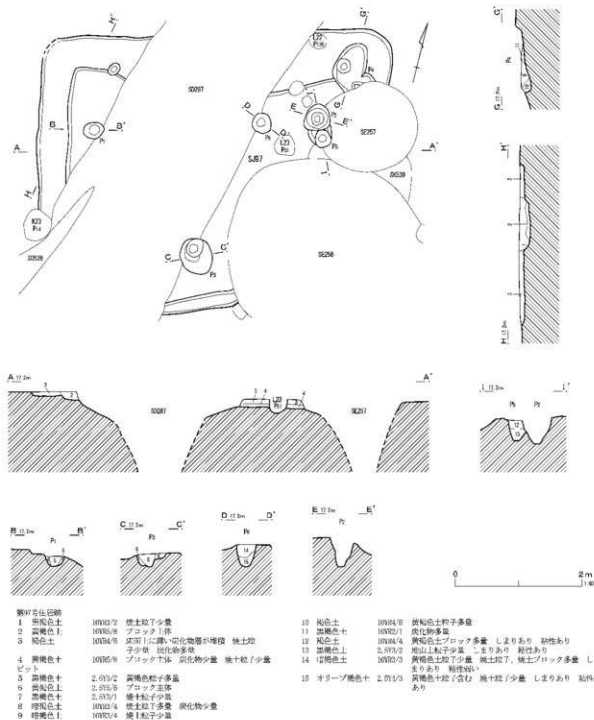
東区の中央やや南東寄りにあるM-22グリッドに位置する。第94号住居跡、第95号住居跡と重複するが、3軒のなかでは最も古い住居跡である。大きく重複する遺構はないが、特にカマド周辺が複数の

グリッドピットによって壊されている。

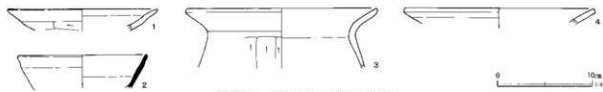
平面形は方形で、規模は南北3.46m、東西3.20mである。確認面からの床面の深さは14cmあり、主軸方向はN-62°-Wをとる。

カマドは北西壁の中央に設けられ、焚き口および煙道部の先端は複数のグリッドピットによって壊さ

れている。規模は、後世のピットによって壊された部分を除いた長さ90cm、袖を含めた幅が66cm、燃焼部の幅が42cmである。カマドの袖の燃焼部内側側面は被熱により焼き締まっていた。また、カマドの焚き口付近では、住居跡覆土と床面との間に、厚さ1cmの炭化物層が確認された。カマドの覆土の一部と



第245図 第97号住居跡



第246図 第97号住居跡出土遺物

第83表 第97号住居跡出土遺物観察表 (第246図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	残存	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
1	土師器	皿	(16.0)	[2.4]	—	破片	雲角	普通	にぶい黄粒	内面：黒	
2	須恵器	環	(14.0)	[3.6]	7.0	破片	長石 砂粒	普通	不良 灰白	磨耗(内・外面)	
3	土師器	甕	(20.4)	[6.3]	—	口縁1/4	雲 赤粒 黒粒	普通	にぶい黄粒		
4	土師器	甕	(20.2)	[1.7]	—	口縁破片	砂粒 赤粒 白粒	普通	にぶい黄粒		

みられる。

周溝は、北壁、西壁、東壁の一部で検出された。幅は約17cmで、掘り込みはしっかりしている。住居跡に伴うピットは検出されなかった。

出土遺物は、土師器の甕の破片約100片、環30片、須恵器の環、甕、壺などが10片ほどで、遺物量は比較的多い。遺物は特に住居跡内の中央やや北寄り、土師器の甕を中心にまとまって出土した。床面からやや浮いた位置で出土しているものが多く、住居が廃絶されてやや埋没した段階で投棄されたものとみられる。

なお、本住居跡の覆土3層では、7世紀から8世紀にかけての遺跡の植生・周辺環境を調べるため、花粉分析の試料採取をおこなった。分析の結果はⅧ-1に掲載した。

第97号住居跡 (第245図)

東区の中央やや南寄りにあるK-22、K-23、L-22、L-23グリッドに位置する。中央を南北方向にのびる第287号溝跡、第256号溝跡に大きく壊され、東側半分は第258号井戸跡、第257号井戸跡、第539号土坑に大きく壊されている。部分的な検出状況から、1回の建て替えが確認できた。

平面形は、東西方向に長い隅丸方形で、建て替え前の規模は東西5.55m、南北4.66m、建て替え後の規模は東西4.74m、南北3.37mである。確認面からの床面の深さは16cmであり、主軸方向はN-18-W

をとる。

ピットはP1~P7の7基が検出された。P1、P2、P5は、その配置から主柱穴の可能性が考えられる。P5は建て替え前、P2は建て替え後の柱穴である。他のピットの配置は不規則で、その性格は不明である。深さはP1から順に19cm、44cm、39cm、10cm、31cm、34cm、23cmである。

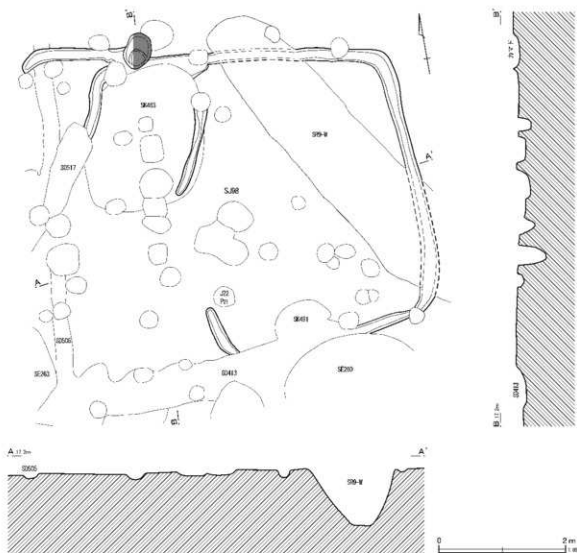
出土遺物には、第246図に図示したものの以外に土師器の甕、環、皿のほか、器種不明の破片が約100片、須恵器の環、蓋が各1片であった。このほかに、使用痕のある円礫が1点出土している。

第98号住居跡 (第247図)

東区の中央西寄りのJ-22グリッドに位置する。床面で確認されたため、覆土は検出できなかった。第9号方形周溝墓を切って構築されていることは確実だが、ほかに重複している第463号土坑、第491号土坑、第517号溝跡、第505号溝跡、第413号溝跡、第260号井戸跡との新旧関係は不明である。

平面形は東西方向に長い台形とみられ、確認された範囲での規模は、東西6.03m、南北4.48mである。確認面は床面で、周溝の深さは深いところで11cmある。主軸方向はN-86-Wをとる。

北壁の西寄りに底面に被熱痕のみられる範囲が確認され、これがカマドの痕跡と思われる。被熱範囲の内側では、石が立てられた状態で出土し、支脚として利用された可能性がある。被熱範囲は長軸56cm、



第247図 第98号住居跡

短軸45cmの楕円形に広がり、燃焼部とみられる浅いくぼみの深さは6cmである。

住居跡内では北壁寄りのカマド付近で2本、南壁寄りで1本の、長さ0.84~1.56mほどの短く細い溝が検出された。北壁付近の2本は1.56mの間をあけて、平行してつくられており、間仕切りなど何らかの施設の痕跡である可能性が考えられる。周溝は、北壁と東壁、南壁の一部で検出されており、住居跡が検出された範囲では全周している。

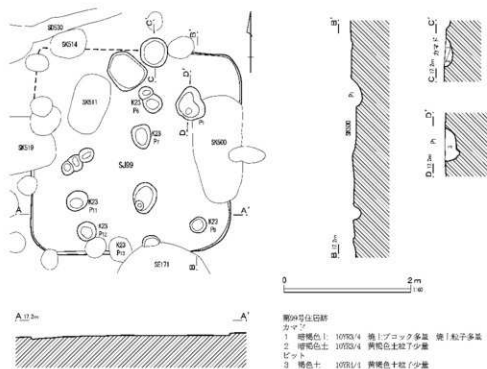
出土遺物は一部の周溝からのみ出土した。土師器の杯・甕、須恵器の甕など小破片が6点出土したが、図示できるものはなかった。

第99号住居跡 (第248図)

東区の中央やや南西にあるK-22、K-23、L-22、L-23グリッドに位置する。東壁付近を第500号土坑に、北西寄りを第511号土坑に、北壁を第514号土坑に、西壁を第519号土坑に、南壁を第171号井戸跡に切られている。

平面形は隅丸方形で、規模は一辺が3.14mである。確認面からの床面の深さは、最も深いところで7cmと浅く、掘り方での調査であったため、カマド、ビットを除き、覆土は確認できなかった。主軸方向はN-0°と真北にとる。

カマドは、北壁の中央やや東寄りに設けられている。検出されたのは燃焼部の掘り込みだけで、覆土



第248図 第99号住居跡

1層は焼土粒子を多量に含んでいた。確認された掘り込みの規模は直径46cmの円形で、深さは6cmである。

ビットはP1の1基のみが検出された。深さは23cmである。このほかに、以下のいくつかのグリッドビットおよび個別名称のないビットが住居跡に伴う可能性がある。K23G P6、K23G P7、K23G P8、K23G P11、K23G P12である。これらのビットの配置は不規則であり、上屋の復元は難しい。

出土遺物は極めて少なく、カマドおよびP1のみから出土した。遺物の総量は土師器の甕の頸部を含む小破片が5点であったが、図示できるものはなかった。

第100号住居跡 (第249図)

東区の中央やや南にあるL-23グリッドに位置する。住居跡の掘り方のみが検出され、覆土を確認できたのは周溝とカマドおよびビットのみである。西隅を第284号井戸跡と第535号土坑に、南隅を第

494号土坑に、北壁の周溝付近を第292号井戸跡に切られている。

平面形は隅丸方形で、規模は東西3.55m、南北3.50mである。確認面からの周溝の深さは4cmである。主軸方向はS-75°-Wをとる。

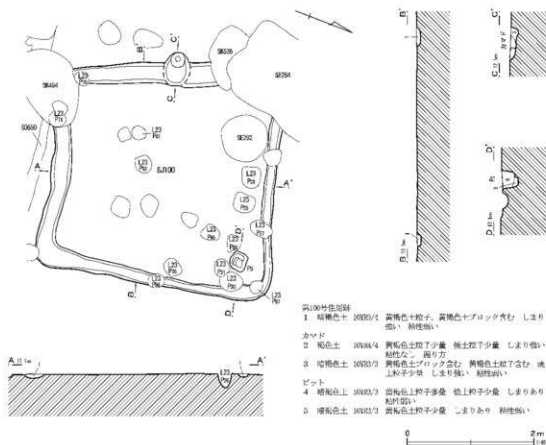
カマドは、西壁の中央部に設けられていたようで、覆土に焼土粒子を含む、カマド燃焼部の掘り方が検出された。確認された掘り方の規模は、長径54cm、短径43cmの楕円形で、深さは6cmである。

ビットはP3の1基のみが検出された。深さは25cmである。周溝は、幅13-26cmで全周しているが、浅くて残存状態は悪い。

出土遺物は、土師器の甕・環、須恵器の環が出土した。遺物総量は極めて少なく、破片のみである。1の須恵器の環は、底部に周辺ヘラケズリが施されている。

第101号住居跡 (第251図)

東区の中央やや南側にいるK-24グリッドに位



第249図 第100号住居跡

第84表 第100号住居跡出土遺物観察表 (第250図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	残存	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
1	須恵器	環	—	[0.7]	[1.9]	底部破片	針	良好	ふい・黄橙	南北企業	
2	土師器	甕	(20.0)	[2.6]	—	口縁破片	雲 赤粒 白粒	普通	ふい・褐		



第250図 第100号住居跡出土遺物

置する。北壁の一部を第297号井戸跡に壊されている。また東側では、第557号溝跡、第558号溝跡、第546号溝跡を切っている。

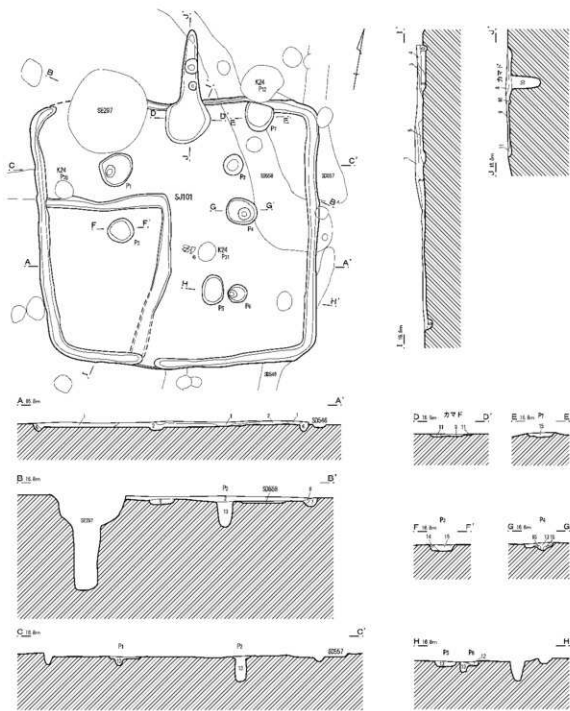
平面形は隅丸方形で、規模は南北4.40m、東西4.24mである。確認面からの床面の深さは8cmと浅く、主軸方向はN-10°-Wをとる。

カマドは北壁の中央に設けられている。袖は確認できなかったが、長い煙道部と燃焼部の掘り込みが確認された。規模は、長さが180cm、燃焼部で幅が70cm、掘り込みの深さは3cmである。

ピットはP1-P7の7基が検出された。深さはP1から順に19cm、42cm、10cm、13cm、8cm、15cm、6cmである。ピットの配置は不規則で確実な主柱穴は特定できないが、P1、P2、P6が主柱穴の可能性がある。

周溝は北壁の一部と南壁のやや西寄りの一部を除いて全周している。周溝が切れている南壁の一部に入出口が設けられていた可能性がある。住居跡内南西隅を四角く囲むように浅い溝がめぐらされており、間仕切りの痕跡である可能性がある。

出土遺物は、須恵器の環、土師器の環、石製の白玉など第252図に図示したもの以外にも土師器の環、甕、須恵器の環、甕、壺、長頸瓶や甕の破片などがあつた。出土量は、器種不明の破片を含めて約



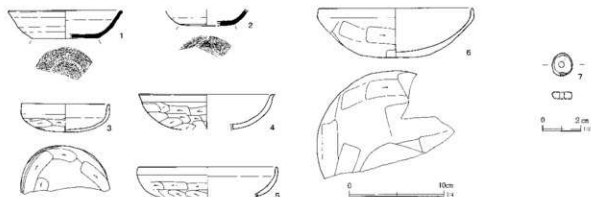
第101号住居跡

- | | | | |
|---|----------|----------|---|
| 1 | マリアージュ地土 | 2.0/4.4 | 黄褐色土ブロック少量 |
| 2 | 褐色土 | 10/94.0 | 灰化物少量 |
| 3 | 褐色土 | 10/94.0 | 塵土粒(少量) |
| 4 | 褐色土 | 7.5/94.6 | 塵土粒(少量) 灰化物少量 |
| 5 | 黄褐色土 | 2.0/95.0 | |
| 6 | 黄褐色土 | 2.0/95.0 | 黄褐色土ブロック |
| 7 | 緑褐色土 | 10/93.1 | 灰化物少量 |
| 8 | 灰黄褐色土 | 10/94.2 | 塵土粒(少量) 黄褐色土粒(φ0.5mm-1mm)少量 |
| 9 | 灰黄褐色土 | 10/94.2 | 塵土粒(少量) 黄褐色土粒(φ0.5mm-5mm)少量 黄褐色土粒(φ0.5mm-5mm)少量 黄褐色土粒(φ0.5mm-5mm)少量 |

- | | | | |
|----|-------|---------|----------------------------|
| 10 | 褐色土 | 10/94.1 | 黄褐色土粒(φ0.5mm-2mm)少量 |
| 11 | 黄褐色土 | 10/94.4 | 黄褐色土との黄土質 |
| 12 | 灰黄褐色土 | 10/94.2 | 黄褐色土粒(φ0.5mm-5mm)少量 |
| 13 | 灰黄褐色土 | 10/94.2 | 黄褐色土粒(φ0.5mm-5mm)少量 |
| 14 | 灰黄褐色土 | 10/94.3 | 黄褐色土粒(φ0.5mm-5mm)少量 上層 船り方 |
| 15 | 灰黄褐色土 | 10/94.2 | 黄褐色土粒(φ0.5mm-5mm)少量 |

0 2m
1m

第251図 第101号住居跡



第252図 第101号住居跡出土遺物

第85表 第101号住居跡出土遺物観察表 (第252図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	残存	胎土	焼灰	色調	出土位置・備考	図版
1	須恵器	環	(12.4)	3.3	(6.7)	1/3	白粒 針	良好	褐灰	南北企産	162
2	須恵器	環	—	[1.7]	(6.0)	破片	白粒 黒粒	普通	黄灰	南北企産	
3	土師器	環	(9.4)	3.0	—	1/2	雲 赤粒	普通	にふい赤褐	赤彩	162
4	土師器	環	(14.4)	[3.2]	—	1/4	赤粒 白粒	普通	橙	—	
5	土師器	環	(14.6)	[3.2]	—	1/5	角 赤粒 白粒	普通	にふい褐	北武藏型環	162
6	土師器	環	(16.5)	5.2	—	1/3	角 長石 砂粒 黒粒	普通	橙	—	
7	石製品	白玉	径1.0	厚0.4	—	完形	—	—	—	滑石製	209

330片である。カマドからは甕の胴部破片が数点出土したが、図示できなかった。住居跡内中央で出土した6の環は、伏せた状態で出土し、その直下では焼土が検出された。

第102号住居跡 (第253図)

東区の中央南寄りにあるL-24グリッドに位置する。第103号住居跡と重複しており、第103号住居跡よりも新しい。住居跡は第489号溝跡、第287号井戸跡に大きく壊されているほか、第301号井戸跡にも切られている。

平面形は南北に長い隅丸長方形と推定され、規模は南北3.70m、東西2.47mである。確認面からの床面の深さは13cmで、主軸方向はN-10°-Wをとる。

ピットはP1、P2の2基が検出された。それぞれ深さは17cm、10cmである。ピットの位置は不規則で、機能は特定できない。また、カマドや周溝は検出されなかった。

出土遺物は、土師器の甕、環、須恵器の甕、環の破片など数十片が出土した。本遺構から出土した1は高台付きの埴である。

第103号住居跡 (第253図)

東区の中央南寄りにあるL-24グリッドに位置する。確認できたのは住居跡の掘り方のみである。

第102号住居跡と大きく重複しており、第102号住居跡に大きく切られている。このほか、第489号溝跡、第485号溝跡、第287号井戸跡、第288号井戸跡、第494号土坑などの各遺構にも切られている。

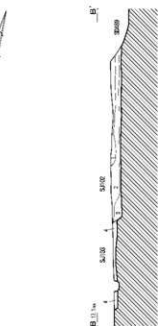
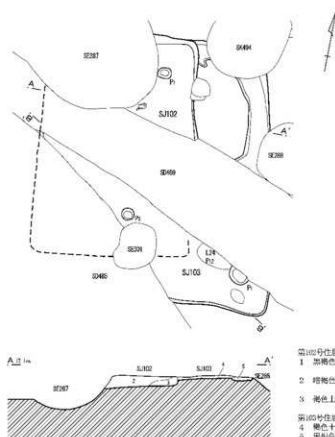
平面形は長方形が方形で、規模は南北4.18m、確認された範囲で東西1.90mである。確認面からの掘り方の深さは6cmと極めて浅い。主軸方向はN-10°-Wをとる。

ピットはP1の1基のみ検出された。半分が第489号溝跡に壊されているが、深さは8cmであった。

出土遺物は、土師器の甕口縁部など極めて少ない。第253図に図示できた2、3は土師器の甕の破片である。

第104号住居跡 (第255図)

東区の南東にあるM-24、M-25グリッドに位置する。検出されたのは住居跡の北西半分で、南東半分は第267号井戸跡、第531号土坑、第532号土坑、第



第102号住居跡

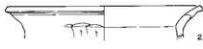
- 1 赤褐色土 10903/1 焼土粒子含む 砂褐色土粒子含む しきりあり 粘性質あり
 2 暗褐色土 10903/3 炭褐色土粒子含む 焼土粒子少量含む しきりあり 粘性質あり
 3 褐色土 10904/6 炭褐色土粒子、ブロック多量 しきりあり 粘性質あり

第103号住居跡

- 4 褐色土 10901/6 炭褐色土粒子含む しきりあり 粘性質あり
 5 黒褐色土 10903/2 焼土粒子、炭褐色土粒子少量 しきりあり 粘性質あり (掘り方)



第253図 第102・103号住居跡



第254図 第102・103号住居跡出土遺物

第86表 第102・103号住居跡出土遺物観察表 (第254図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	残存	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
1	須恵器	高台付城	—	[1.8]	(6.9)	底部破片	赤粒 白粒 黒粒	普通	灰	SJ102 南北企産	
2	土師器	甕	(20.8)	[3.6]	—	破片	石英 砂粒 赤粒	普通	橙	SJ103	
3	土師器	甕	(20.0)	[4.9]	—	口縁破片	赤粒 白粒	普通	灰褐色	SJ103	

561号土坑に大きく切られている。

平面形は南北に長い隅丸長方形で、規模は南北3.70m、東西2.83mである。確認面からの床面の深さは11cmあり、主軸方向はN-3°-Wとほぼ真北にとる。

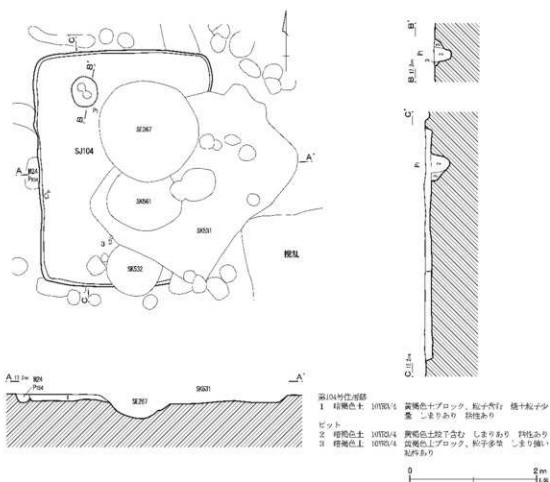
ピットはP1の1基が検出された。深さは28cmである。周溝は検出されなかった。カマドも検出され

ていないが、東壁に設けられていた可能性がある。

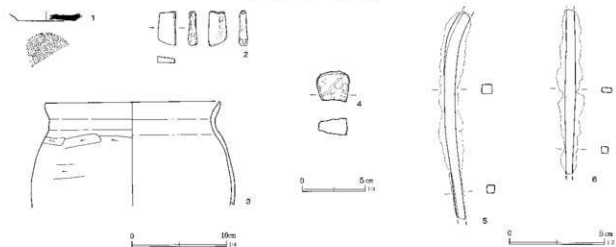
出土遺物は、須恵器、土師器、礫石、鉄滓、鉄製品など第256図に図示したもののほかにも土師器の甕・環の破片が出土している。

第105号住居跡 欠番

第13号方形周溝墓に変更。



第255図 第104号住居跡



第256図 第104号住居跡出土遺物

第87表 第104号住居跡出土遺物観察表 (第256図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	残存	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
1	須恵器	環	—	[0.8]	(6.1)	破片	砂粒 白粒 褐粒	普通	灰白	南北企産	220
2	石製品	砥石	幅2.0	長[3.7]	厚0.7	2/3					
3	土師器	甕	(18.6)	[11.0]	—	11縁1/4	角 長石 赤粒 白粒 黒粒	不良	橙		
4	鉄滓	楕形滓	幅3.5	長2.9	厚1.7					重さ32.8g	220
5	鉄製品	角棒状品	幅0.3~0.5	長[10.9]							222
6	鉄製品	角棒状品	幅0.4~0.5	長[8.7]	厚0.2~0.4					合釘か?	222

3. 掘立柱建物跡

下田町遺跡第3次調査において、掘立柱建物跡は17棟を検出した。西区一面では、第28～30号掘立柱建物跡の3棟を検出した。西区二面では、第34・36～38・40・41・43・45～47号掘立柱建物跡の10棟を検出した。東区では第31～33・49号掘立柱建物跡の4棟を検出した。また、第35・39・42・44・48号掘立柱建物跡は欠番である。

調査区全体には多くの柱穴が確認された。柱穴の中には、柱材が残存するものもあり、また、断面観察などによって柱痕が認められたものも存在した。しかし、掘立柱建物跡としての柱間の組み合わせが発掘調査時につかえず、グリッドピットとして調査したことがある。

掘立柱建物跡の時期を見ると古墳時代後期、奈良時代、平安時代、中世にわたって検出された。

古墳時代後期の掘立柱建物跡は7棟で、第31・40・41・45～47・49号掘立柱建物跡である。

西区の中央部分に第40・41号掘立柱建物跡を検出した。両建物跡は、古墳時代後期の居住域を区画する第377・411号溝跡に囲まれた内側に位置する。この溝跡は大きく弧を描き、明らかに溝跡の内と外を区分している。さらに、南側にはこの溝跡から南東方向に伸びる第452号溝跡が存在する。このような区画内の南東コーナー付近に1間×1間の第40号掘立柱建物跡が存在する。また、北東寄りには4間×4間の大型の掘立柱建物跡が存在する。

西区の南西側には3間×2間以上の第46号掘立柱建物跡、1間×1間の第47号掘立柱建物跡が存在する。南側には、2間×2間の第45号掘立柱建物跡が存在する。この建物跡は総柱建物跡であり倉庫と考えられる。また建物北側に集落内を縦断する第372号溝跡が巡り、隣接した位置にはほぼ平行して建てられていることから関連があるものと考えられる。

奈良時代と考えられる掘立柱建物跡は2棟で、第32・43号掘立柱建物跡である。第32号掘立柱建物跡は東区に位置する。2間×3間で東西に庇を持つ大

型の建物跡である。主軸は南北方向にあり、南側には「L」字状に建物周囲に巡る溝跡が存在する。第43号掘立柱建物跡は西区の中央付近に位置し2間×3間の建物跡である。

平安時代と考えられる掘立柱建物跡は6棟で、第28～30・33・37・38号掘立柱建物跡である。

第28・29・30号掘立柱建物跡は西区一面で検出された。第28号掘立柱建物跡は北側中央に位置する。建物跡は細長い平安時代の区画溝の内側に位置していると考えられる。区画溝は、第268号溝跡で西区一面のD・E-19、F-19-23グリッドに位置し、調査区内に「コ」の字状に確認できた。西側部分が調査区外に伸びることから全体像はつかめない。本建物跡は、区画溝の南北方向に走る東側部分が途切れ、北側と南側に分かれる位置に存在する。

第29・30号掘立柱建物跡は区画溝の南辺部分の区画外に位置する。建物跡の軸方向は区画溝の南辺とほぼ平行して建つ。両建物跡の規模は異なる。第29号掘立柱建物跡は1間×3間で梁間の長い建物跡である。また、第30号掘立柱建物跡は2間×2間でやや柱間が不規則な間隔である。

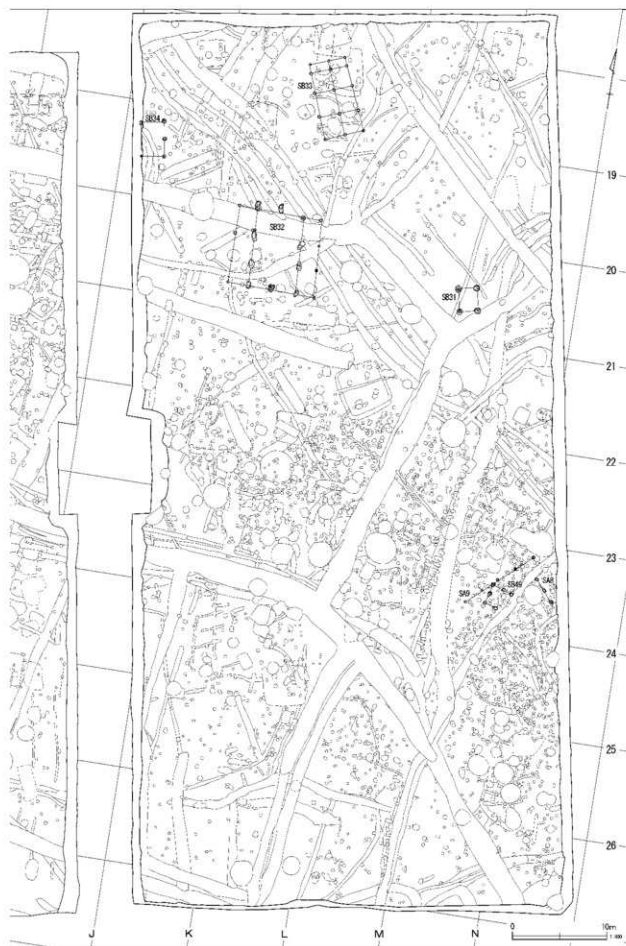
第33号掘立柱建物跡は東区の北側に位置する。2間×3間の南北棟の建物である。総柱建物跡であり、北側に半間程の庇が伸びる。

第37・38号掘立柱建物跡は西区の北東端に位置する。二棟が重複して替が行われた建物跡である。柱穴の切り合い関係から第38号掘立柱建物跡が新しい建物跡であることが判断された。両建物跡は本調査区から検出された唯一の東西棟の建物跡である。

中世の時期と考えられる掘立柱建物跡は2棟で、第34・36号掘立柱建物跡である。中世の建物跡は極めて検出数が少ないが、多くに柱穴が存在し建物跡としての組み合わせが不明ではあるものの多数存在していたものと推定される。また、中世の遺構としては、整然と区画された規模の大きな薬研堀の溝跡、



第257图 掘立柱建物跡・柱穴列全体図 西区



第258図 揺立柱建物跡・柱穴列全体図 東区

数多くの井戸跡、土坑などが存在している。

以下、各掘立柱建物跡について記載する。

第28号掘立柱建物跡（第259図）

西区一面E・F-20・21グリッドに位置する。建物跡の中央部分に第144号井戸跡が重複する。

建物跡は桁行3間×梁行2間で、規模は桁行が6.25m、梁行が3.87mである。柱間は、桁行で1.60～2.47m（平均2.07m）、梁行で2.00～1.80m（平均1.90m）である。桁方向は、N-97-Wである。

各ビットの規模は、P1が径59cm、深さ37.5cm、P2が径45cm、深さ47.8cm、P3が径63cm、深さ46.7cm、P4が径58cm、深さ50.1cm、P5が径68cm、深さ25.6cm、P6が径47cm、深さ39.7cm、P7が径40cm、深さ22.3cm、P8が径45cm、深さ38.9cmである。

出土遺物は、P1からは土師器の甕が10片ほど出土したが、図化できない。P2は遺物なし。P3からは須恵器の甕小片や土師器の甕が出土したがやはり図化できない。P4からは土師器の小片が10片ほど出土したが、図化できない。P5は遺物が多く、須恵器の環が数片出土し、糸切りの底部破片が出土している。このほか小片が20点ほどある。P6からは土師器の甕、須恵器の環・甕の破片が出土した。甕の内面は当て具なし。P7からは土師器の小片が15片ほど出土しているが、図化できなかった。P8からは、土師器の小片が8片ほどと、須恵器の環の破片が出土しているが、図化できなかった。このほか砥石を検出した。

第29号掘立柱建物跡（第261図）

西区一面E-23・24、F-24グリッドに位置する。建物跡の中央部分には第223号土坑が重複する。

建物跡は桁行4間×梁行1間で、規模は桁行が6.24m、梁行が3.76mである。柱間は、桁行で0.80～2.27m（平均1.56m）である。桁方向は、N-87-Eである。桁行は、P1とP3の柱間にP2が存在し、柱間を短くしている。北東コーナーの柱穴は検出で

きなかった。また、梁行が長い。

各ビットの規模は、P1が径45cm、深さ52.7cm、P2が径58cm、深さ44.1cm、P3が径40cm、深さ59.2cm、P4が径63cm、深さ56.6cm、P5が径60cm、深さ55.3cm、P6が径52cm、深さ51.3cm、P7が径74cm、深さ57.8cm、P8が径48cm、深さ54.2cm、P9が径50cm、深さ36.4cmである。

出土遺物は、P1からは羽釜の胴部片が出土した。ほかに、土師器の甕の破片が20片ほど、須恵器の底部糸切りの環、大甕の破片は当て具ありとなしの両方がある。P2からは土師器の甕、環の破片が20片ほど出土した。P3からは土師器の小片が10片ほど、須恵器の環の破片が出土した。P4からは、土師器の小片が30片ほど、須恵器の環、壺の小片が出土した。P5からは、土師器の甕の破片が10片ほど出土したが、図化できなかった。P7からは、土師器の甕、環の破片8片ほど、須恵器の環片が出土した。P8からは、土師器の甕、環など7片ほどが出土した。P9からは、土師器の環、甕の小片が10片ほど、須恵器の環の破片が出土した。

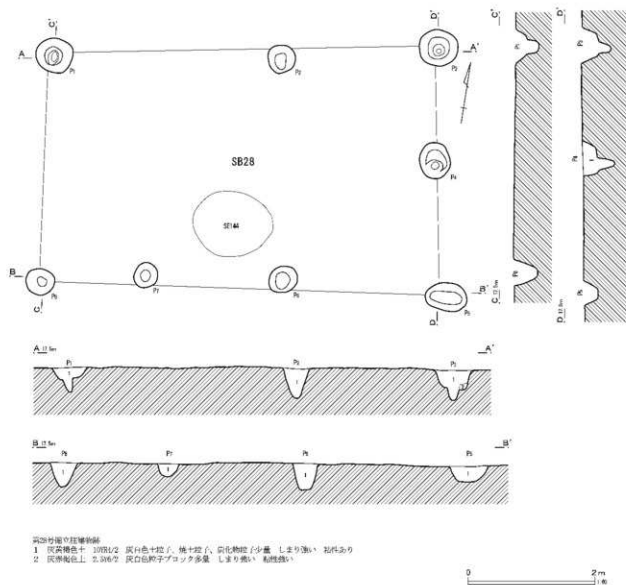
第30号掘立柱建物跡（第263図）

西区一面F-23・24、G-23・24グリッドに位置する。建物跡西よりには第220号土坑が重複する。

建物跡は桁行2間×梁行2間で、規模は桁行が4.64m、梁行が4.56mである。柱間は、桁行で1.74～2.90m（平均2.32m）、梁行で1.70～2.94m（平均2.32m）である。桁方向は、N-85-Eである。

各ビットの規模は、P1が径45cm、深さ38cm、P2が径41cm、深さ52.2cm、P3が径37cm、深さ45.3cm、P4が径35cm、深さ45.5cm、P5が径32cm、深さ54cm、P6が径55cm、深さ35.8cm、P7が径40cm、深さ45cm、P8が径47cm、深さ53.4cmである。

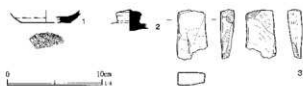
出土遺物は、P1からは土師器の環が1片出土した。P2からは土師器の小片が15片、須恵器の環・甕が4片出土した。甕は当て具のあるものとないものがある。P3からは土師器の環の小片が15片、須恵器



第259図 第28号掘立柱建物跡

第88表 第28号掘立柱建物跡出土遺物観察表 (第260図)

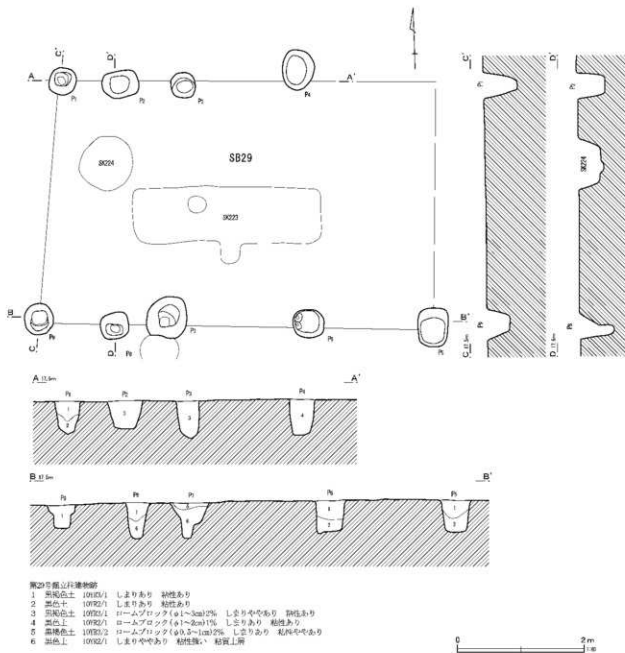
番号	種別	器種	口径	器高	底径	残存	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
1	須恵器	環	—	[1.3]	(5.3)	破片	白粒 針	良好	灰	P5 南比金産	
2	須恵器	蓋	—	[2.2]	—	破片	白粒	良好	灰	P1 南比金産	219
3	石製品	砥石	幅[3.3]	長[5.2]	厚1.35	1/2				P5	220



第260図 第28号掘立柱建物跡出土遺物

の環が出土した。P4からは、須恵器を含む小片が5

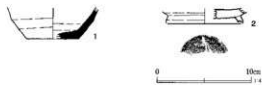
片出土したが、図化できなかった。P5からは土師器の小片が10片、須恵器の環1点出土した。P6からは、土師器と須恵器の小片が10ほど出土したが、図化できなかった。P7からは土師器の破片が10片ほど、須恵器の環3片、甕2片(当て具なし)が出土した。P8からは、土師器の破片が10点ほど、灰種陶器が出土した。



第89表 第29号掘立柱建物跡出土遺物観察表 (第262図)

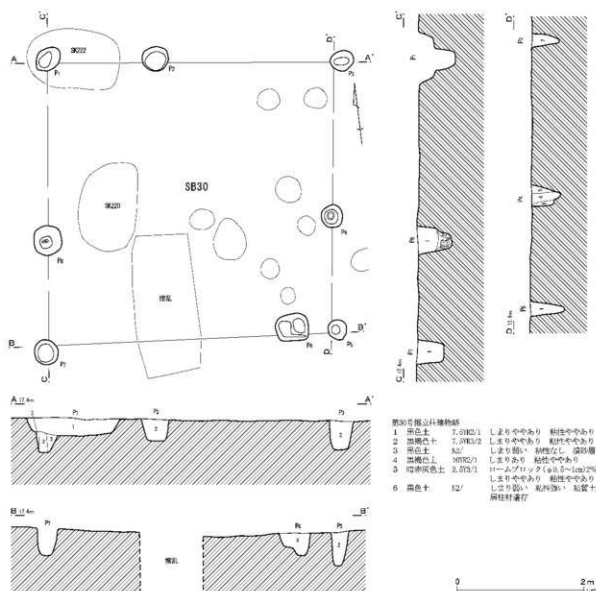
番号	種別	器種	口径	器高	底径	残存	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
1	須恵器	埴	—	[3.3]	(5.4)	底部破片	雲 白粒 黒粒	不良	淡橙	P5	
2	山茶碗	碗	—	[1.0]	(8.2)	破片	白粒 針	普通	灰黄	P1・P3	213

29号掘立柱建物跡と同時期くらいと考えられる。



第31号掘立柱建物跡 (第265図)

東区L-20グリッドに位置する。建物跡北西側は、第29号溝跡と重複する。



第263図 第30号掘立柱建物跡

第90表 第30号掘立柱建物跡出土遺物観察表 (第264図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	残存	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
1	須恵器	坏	(14.4)	[3.5]	—	破片	角 砂粒 黒粒	不良	にふい黄粒	P7	
2	灰軸陶器	瓶	—	[2.2]	(6.6)	1/5	白粒 黒粒	良好	灰白	P8 湖北	213

建物跡は桁行1間×梁行1間で、規模は桁行が2.38m、梁行が1.94mである。桁方向は、N-103°-Wである。

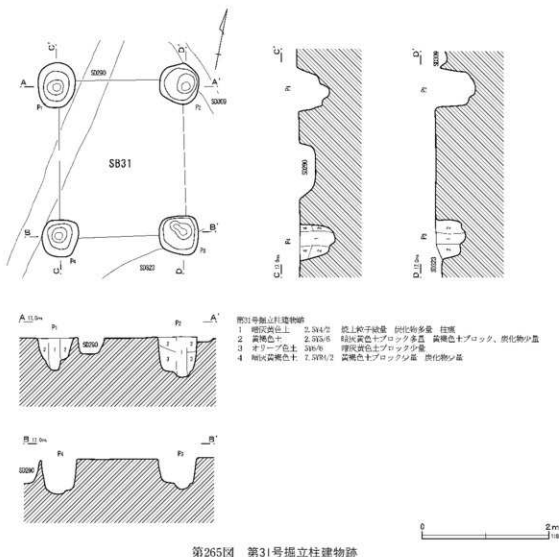
各ピットの規模は、P1が径72cm、深さ49.4cm、P2が径65cm、深さ62.3cm、P3が径63cm、深さ46.4cm、P4が径58cm、深さ54cmである。

出土遺物は、P1からはP2と同一個体とみられる破片が出土している。須恵器製の破片も出土してい



第264図 第30号掘立柱建物跡出土遺物

る。P2からは焼きの白い土器片が2片出土し、P4からは土師器製の胴部破片が出土している。



第265図 第31号掘立柱建物跡

第91表 第31号掘立柱建物跡出土物観察表 (第266図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	残存	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
1	須臾器	甕	—	—	—	破片	砂粒 白粒	良好	灰	P1	

第32号掘立柱建物跡 (第268・269図)

東区J・K-19・20グリッドに位置する。建物跡の南側には第325号溝跡がほぼ同じ軸をもって東西方向に位置し関連があると考えられる。

建物跡は桁行3間×梁行2間で、東西にそれぞれ庇を持つ。規模は母屋の桁行が8.18m、梁行が5.01mである。東西の底部分まで含めると9.17mである。柱間は、桁行で2.75~3.10m(平均2.88m)、梁行で2.35~2.65m(平均2.50m)である。桁方向は、N-88°-Wである。母屋から庇までは、西2.90m~



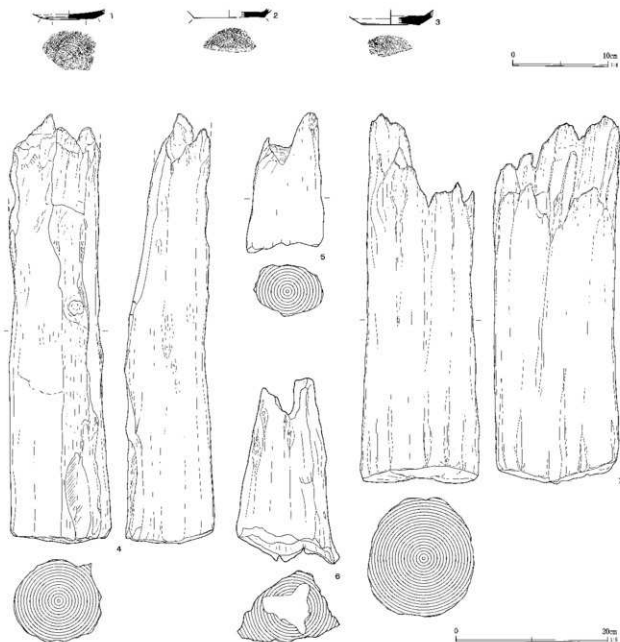
第266図 第31号掘立柱建物跡出土遺物

5.26m、東2.60~2.87mである。

東側の柱穴列P6~P9には柱材が残存していた。各ピットの規模は、P1が径75cm、深さ67.5cm、P2が径91cm、深さ66.2cm、P3が径128cm、深さ70.5cm、P4が径103cm、深さ63.7cm、P5が径92cm、深さ62cm、P6が径52cm、深さ79.8cm、P7が径102cm、深さ78.6

cm、P8が径95cm、深さ72.8cm、P9が径70cm、深さ
57cm、P10が径76cm、深さ55.6cm、P11が径35cm、

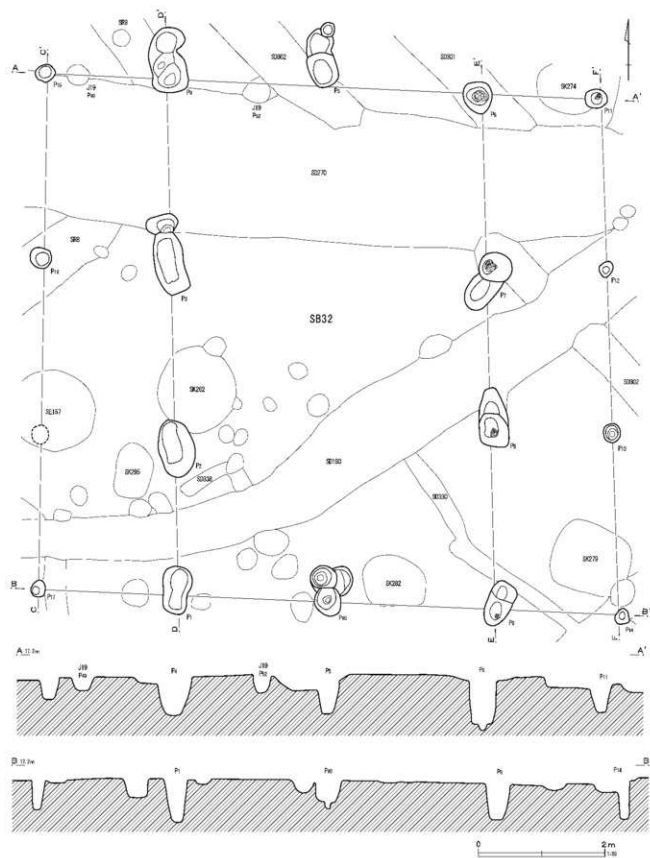
深さ46.1cm、P12が径25cm、深さ25cm、P13が径30
cm、深さ54.5cm、P14が径46cm、深さ9.5cm、P15が



第267図 第32号掘立柱建物跡出土遺物

第92表 第32号掘立柱建物跡出土遺物観察表 (第267図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	残存	胎土	焼成	色调	出土位置・備考	図版	
1	須恵器	環	—	[1.0]	(6.0)	破片	砂粒 赤粒 白粒 黒粒	良好	にじい赤褐	P5	南北金産	
2	須恵器	環	—	[0.8]	(7.6)	底部1/4	石英 白粒 針	普通	灰	P8	南北金産	
3	須恵器	環	—	[1.6]	(6.4)	底部破片	針 黒粒	良好	灰	P7	南北金産	
4	木製品	柱	幅13.0	長57.2	厚10.8		樹種	コナラ属コナラ亜属クヌギ節		P7		163
5	木製品	柱	幅10.1	長[17.7]	厚[6.8]		樹種	コナラ属コナラ亜属コナラ節		P9		163
6	木製品	柱	幅[12.3]	長[23.2]	厚[9.0]		樹種	コナラ属コナラ亜属コナラ節		P8		163
7	木製品	柱	幅15.6	長49.2	厚15.6		樹種	コナラ属コナラ亜属クヌギ節		P6		163



第268图 第32号孤立柱建物跡 (I)



第269号掘り柱建物跡

1	灰褐色土	2.015/2	黄褐色十粒子 (φ2~3mm) 多量	灰色粘土粒子多量	炭化物粒子多量
2	赤褐色土	10132/1	黄褐色土粒子 (φ1~2mm) 含む	しまり強い	粘性強い
3	灰色土	35/	灰色粘土	しまり強い	粘性強い
4	黄褐色土	10105/1	黄褐色土	しまり強い	粘性あり
5	オリーブ灰色土	10106/2	黄褐色土	しまり強い	粘性あり
6	灰色土	10104/1	黄褐色土	しまり強い	粘性あり
7	黄褐色土	10102/1	黄褐色土	しまり強い	粘性あり
8	黄褐色土	10103/1	黄褐色土	しまり強い	粘性あり
9	灰オリーブ色土	7.0105/2	黄褐色土	しまり強い	粘性あり
10	濃い黄褐色土	10106/1	黄褐色土	しまり強い	粘性あり

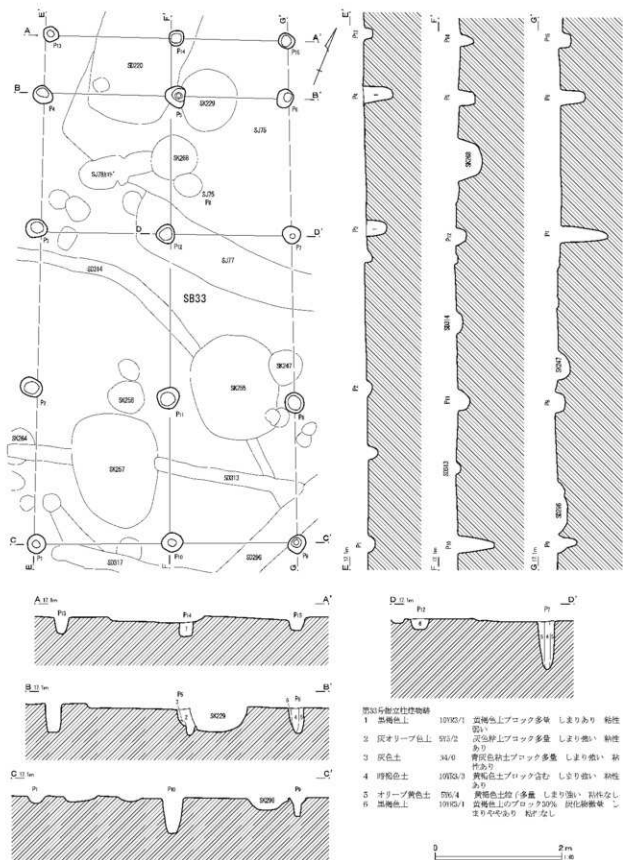
0 2m
1m

第269号 第32号掘り柱建物跡 (2)

径31cm、深さ34.4cm、P16が径35cm、深さ34.4cm、P17が径28cm、深さ45.6cmである。

出土遺物は、P1からは土師器の甕や環10片ほどが出土した。P2からは土師器の環、甕などが5片出

土している。また、須恵器の甕の破片が1片あるが図化できない。P3からは土師器の小片が7片ほどのほか、須恵器の環、甕の小片も2片出土した。P4からは土師器の小片が5片、須恵器の甕の破片が2片、



第270図 第33号掘立柱建物跡

第93表 第33号掘立柱建物跡出土遺物観察表 (第271図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	残存	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
1	須恵器	環	—	[1.0]	(5.6)	底部破片	赤粒 白粒		不良橙	P11 在地	



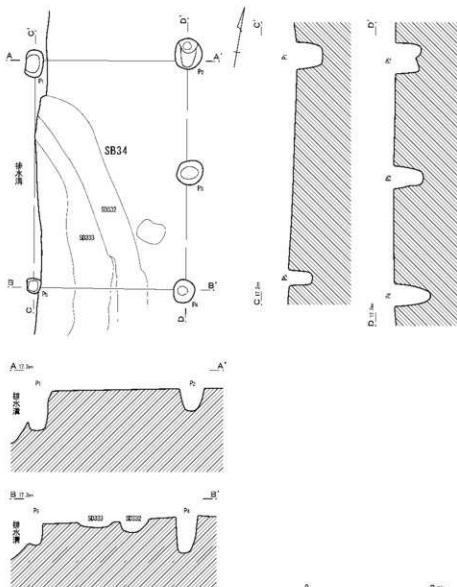
第271図 第33号掘立柱建物跡出土遺物

須恵器の甕1・環3点が出土している。P14からは土師器の小破片、須恵器の破片が出土したが図化できなかった。

環の破片が5片出土した。P5からは、土師器および須恵器の小片が10片ほど出土した。P7からは土師器の小片、須恵器の環が出土した。須恵器の環の底部は糸切り。P8からは土師器の甕・環の破片が8片、

第33号掘立柱建物跡 (第270図)

東区J-18、K-18・19グリッドに位置する。建物跡の西側には第130・301・302号溝跡が位置する。建物は桁行4間×梁行2間で、規模は桁行が7.05



第272図 第34号掘立柱建物跡

m、梁行が4.16mである。さらに北側には半間ほどの庇が付き8.07mである。母屋から庇までは、1.80m～1.96mである。柱間は、桁行で2.40～2.50m (平均2.47m)、梁行で2.14～2.02m (平均2.08m)である。桁方向は、N-113°Wである。各ピットの規模は、P1が径30cm、深さ10.8cm、P2が径35cm、深さ11.5cm、P3が径33cm、深さ32.4cm、P4が径33cm、深さ48.1cm、P5が径33cm、深さ46.1cm、P6が径30cm、深さ39.2cm、P7が径29cm、深さ74.6cm、P8が径33cm、深さ10.8cm、P9が径30cm、深さ29.2cm、P10が径35cm、深さ55.8cm、P11が径36cm、深さ20.6cm、P12が径30cm、深さ16.6cm、P13が径23cm、深さ25.2cm、P

14か径25cm、深さ19.5cm、P15か径26cm、深さ19cmである。

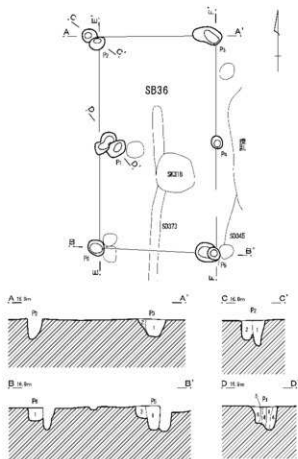
出土遺物は、P3、P4、P9、P11で遺物が出土したが、図化できなかった。須恵器も出土している。

第34号掘立柱建物跡 (第272図)

西区一面H-25グリッドに位置する。建物跡の西側は調査区域外であるため全体の規模は不明である。

建物は桁行2間×梁行1間で、規模は桁行が3.62m、梁行が2.40mである。柱間は、桁行で1.84~1.78m(平均1.81m)である。桁方向は、N-10-Eである。

各ピットの規模は、P1か径43cm、深さ49.6cm、P2か径48cm、深さ39.9cm、P3か径43cm、深さ45.9cm、P4か径37cm、深さ57.7cm、P5か径24cm、深さ38.5cmである。



第272図 第34号掘立柱建物跡

出土遺物は検出されなかった。

第35号掘立柱建物跡 欠番

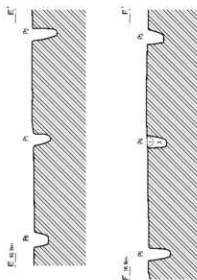
第36号掘立柱建物跡 (第273図)

西区一面H-24・25グリッドに位置する。建物の中央に第373号溝跡、第318号土坑が重複する。

建物跡は桁行2間×梁行1間で、規模は桁行が3.46m、梁行が1.84mである。柱間は、桁行で1.71~1.74m(平均1.73m)である。桁方向は、N-87-Eである。

各ピットの規模は、P1か径42cm、深さ36.8cm、P2か径40cm、深さ39.4cm、P3か径45cm、深さ26.7cm、P4か径20cm、深さ38.2cm、P5か径62cm、深さ38cm、P6か径30cm、深さ20.4cmである。

出土遺物は、P2からのみ遺物の出土がみられ、中世の遺物が出土しているが図化できなかった。



第36号掘立柱建物跡

- | | | | |
|---|---------|---------|--|
| 1 | 灰色土 | 01/1 | 黄褐色土粒子少量、しまり強い、粘り強い |
| 2 | 和灰色土 | 10/04/1 | 灰オリーブ色土ブロック、黄褐色土ブロック、灰色粘土ブロック多量、しまり強い、粘性あり |
| 3 | 灰オリーブ色土 | 03/2 | 黄褐色土粒子少量、しまり強い、粘性強い |
| 4 | 灰オリーブ色土 | 03/2 | 黄褐色土ブロック、オリーブ灰色土ブロック多量、しまり強い、粘性強い |
| 5 | 灰色色土 | 01/1 | オリーブ灰色土ブロック、黄褐色土ブロック含む、しまり強い、粘性強い |
| 6 | 灰オリーブ色土 | 03/2 | オリーブ灰色土ブロック、黄褐色土ブロック多量、しまり強い、粘性あり |

0 2m

第273図 第36号掘立柱建物跡

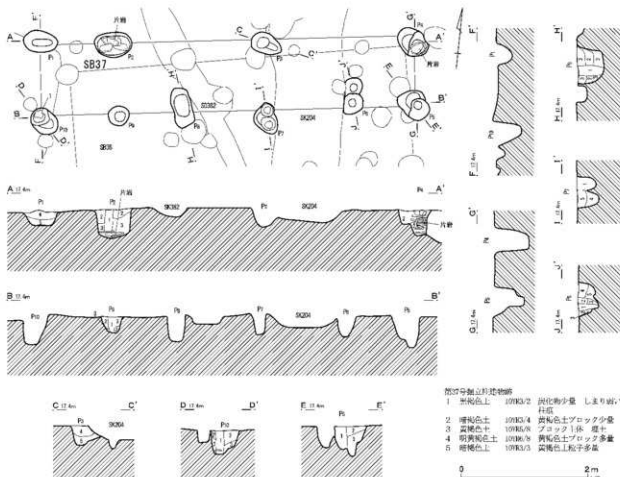
第37号掘立柱建物跡 (第274図)

西区二面G-19、H-19グリッドに位置する。第38号掘立柱建物跡と重複する。

建物跡は桁行5間×梁行1間で、規模は桁行が5.94m、梁行が1.22mである。柱間は、桁行で1.02

～1.38m (平均1.19m)である。桁方向は、N-98°-Wである。

各ピットの規模は、P1が径54cm、深さ23.8cm、P2が径59cm、深さ42.1cm、P3が径52cm、深さ34.2cm、P4が径52cm、深さ40.2cm、P5が径52cm、深さ38.1



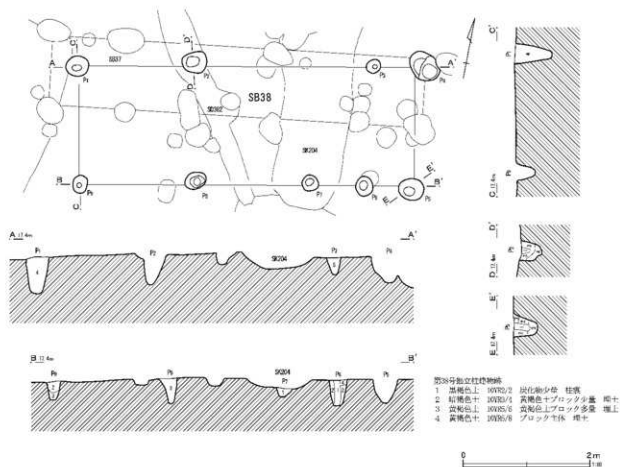
第274図 第37号掘立柱建物跡



第275図 第37号掘立柱建物跡出土遺物

第94表 第37号掘立柱建物跡出土遺物観察表 (第275図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	残存	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
1	須恵器	甕	—	[12.2]	—	破片	長石 赤粒 白粒	良好	灰	南比企産	219



第276図 第38号掘立柱建物跡

cm、P6が径58cm、深さ32.1cm、P7が径51cm、深さ35.4cm、P8が径62cm、深さ42.5cm、P9が径32cm、深さ28.7cm、P10が径46cm、深さ47.1cmである。

出土遺物は、P3～P10から出土した。いずれも小片で、ほとんど土師器である。須恵器は糸切りのものがみられる。図化できたのは須恵器の大甕の破片のみ(第275図1)。このほか、P4からは扁平な礫が重なりあって出土。P7では甕の口縁部がみられた。

第38号掘立柱建物跡(第276図)

西区二面G-19、H-19グリッドに位置する。第37号掘立柱建物跡と重複する。第204号土坑によって切られている。

建物跡は桁行4間×梁行1間で、規模は桁行が5.23m、梁行が1.88mである。柱間は、桁行で0.75～1.83m(平均1.31m)である。桁方向は、N-106°

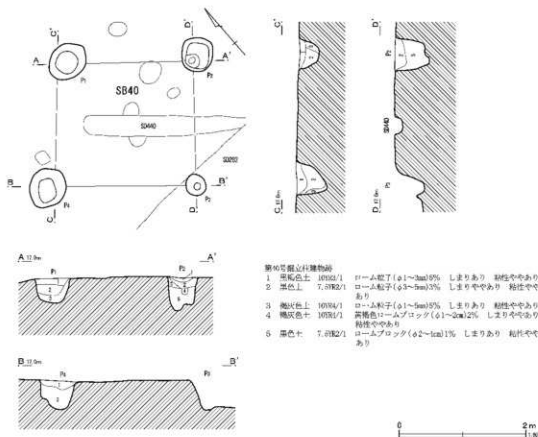
～Wである。東側のP5とP7の柱間の中間にあたる半間の位置でP6を検出した。P3と対の位置である。

各ピットの規模は、P1が径38cm、深さ58.7cm、P2が径38cm、深さ46.9cm、P3が径23cm、深さ28.7cm、P4が径52cm、深さ40.2cm、P5が径41cm、深さ38.6cm、P6が径33cm、深さ42cm、P7が径27cm、深さ13.3cm、P8が径35cm、深さ39.6cm、P9が径29cm、深さ39.6cmである。

出土遺物は、P2、P4、P5、P7、P8から出土したが、全体的に量は少ない。土師器が多く、甕がみられる。P8では須恵器の大甕の破片があり、P4では特に大片が出土した。

第39号掘立柱建物跡

欠番



第277図 第40号掘立柱建物跡

第40号掘立柱建物跡 (第277図)

西区二面F・G-22グリッドに位置する。古墳時代後期の居住域を巡る第411号溝跡の東側コーナー部分にあたる位置で検出した。

建物跡は桁行1間×梁行1間で、規模は桁行が2.38m、梁行が2.10mである。桁方向は、N-57-Eである。

各ピットの規模は、P1が径66cm、深さ38.1cm、P2が径57cm、深さ54cm、P3が径35cm、深さ46.2cm、P4が径65cm、深さ47.3cmである。

出土遺物は、P1、P2、P4から数点出土した。遺物はいずれも土師器の裏の破片で、鬼高のようだが、図化できるものはなかった。遺構の時期は不明。

第41号掘立柱建物跡 (第278・279図)

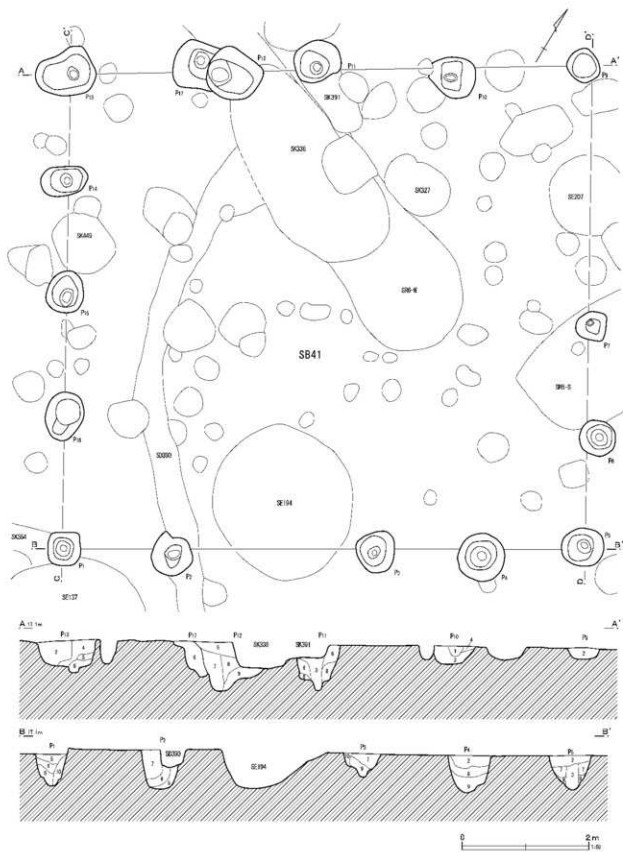
西区二面E-20・21・22、F-21グリッドに位置する。奈良時代の溝跡と考えられる第390号溝跡が

P2を切り込んでいる。

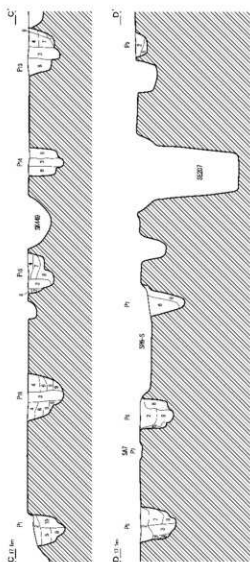
建物跡は桁行4間×梁行4間で、規模は桁行が8.25m、梁行が7.52mである。柱間は、桁行で1.68~2.10m(平均1.88m)、梁行で1.64~3.180m(平均2.70m)である。桁方向は、N-121-Wである。

各ピットの規模は、P1が径60cm、深さ57.7cm、P2が径73cm、深さ62.6cm、P3が径67cm、深さ37.1cm、P4が径74cm、深さ58.7cm、P5が径67cm、深さ49cm、P6が径58cm、深さ51.3cm、P7が径54cm、深さ67.1cm、P8は第207号井戸跡によって切られている。P9が径54cm、深さ20cm、P10が径70cm、深さ53cm、P11が径75cm、深さ70.9cm、P12が径88cm、深さ73.4cm、P13が径94cm、深さ48.4cm、P14が径74cm、深さ55.7cm、P15が径68cm、深さ38.2cm、P16が径76cm、深さ57cm、P17が径76cm、深さ54.5cmである。

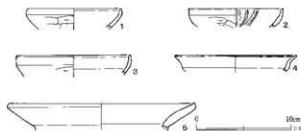
出土遺物は、P1~P4、P6、P10~P14から出土したが、土師器がほとんどで須恵器は極めて少ない。



第278图 第41号掘立柱建物跡 (1)



第279図 第41号掘立柱建物跡 (2)



第280図 第41号掘立柱建物跡出土遺物

第41号掘立柱建物跡

1	黒色土	T.0W1.7/1	しりりあり 粘性中やあり
2	黒色土	10R32/1	黄褐色ナプロック(φ1~3cm)2% しりりあり
3	黒色土	10R31.7/1	粘性中やあり
4	黒紫色土	10R35/2	しりりあり 粘性中やあり
5	黄褐色土	10R33/2	黄褐色ナプロック(φ1~5cm)10%混入 しりりあり 粘性あり
6	黒色土	10R32/1	ローンプロックを穴まない しりりあり 粘性中やあり
7	黄褐色土	10R32/1	黄褐色上プロック30%以上 しりりややあり 粘性中やあり
8	黒色土	10R32/1	黒紫色土の砂子(φ1~3cm)10% しりりややあり 粘性中やあり
9	黒色土	10R32/1	しりり粘り 粘性あり
10	黄褐色土	10R33/6	黄褐色土11体



P12、P13から出土した遺物量が多いが、須恵器はない。第280図1~4の環はいずれも古墳時代後期の所産である。

第42号掘立柱建物跡 欠番

第43号掘立柱建物跡 (第281図)

西区二面G-22、H-21・22グリッドに位置する。第409・410号溝跡と重複する。

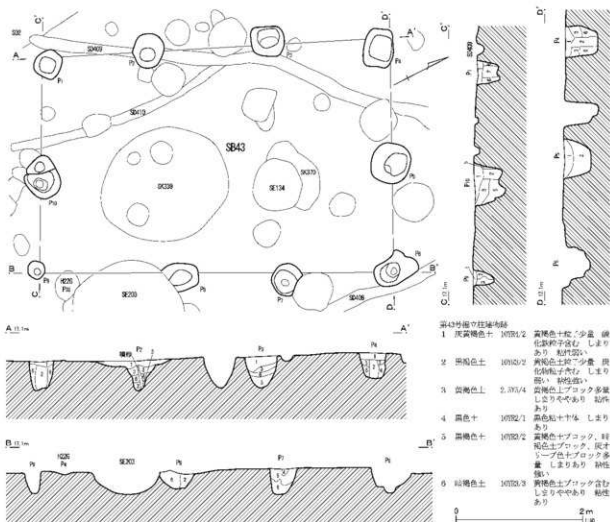
建物は桁行3間×梁行2間で、規模は桁行が5.60m、梁行が3.56mである。柱間は、桁行で1.64~2.26m(平均1.88m)、梁行で1.70~1.88m(平均1.79m)である。桁方向は、N-153°-Wである。

各ピットの規模は、P1が径45cm、深さ37cm、P2が径56cm、深さ51cm、P3が径54cm、深さ52cm、P4が径60cm、深さ42cm、P5が径68cm、深さ51.3cm、P6が径70cm、深さ40.5cm、P7が径51cm、深さ47.4cm、P8が径50cm、深さ28.8cm、P9が径28cm、深さ35cm、P10が径67cm、深さ44.8cmである。

出土遺物は、第282図1は須恵器蓋、2は土師器環で、遺物はいずれも奈良時代の所産である。

第95表 第41号掘立柱建物跡出土遺物観察表 (第280図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	残存	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
1	土師器	環	(10.0)	[2.2]	—	破片	雲 褐粒	不良	ぶい黄橙	P12 北武藏型環	
2	土師器	環	(10.0)	[1.9]	—	破片	雲 砂粒 赤粒	良好	ぶい橙	P12 放射状暗文	
3	土師器	環	(12.0)	[2.2]	—	口縁破片	角 白粒 黒粒	良好	橙	P12 北武藏型環	
4	土師器	環	(13.0)	[1.8]	—	破片	長石 石英	普通	赤	P10 赤系 鏡比企型環	
5	土師器	蓋	(19.9)	[2.8]	—	破片	雲 石英	普通	ぶい黄褐	P13	



第281図 第43号掘立柱建物跡

第96表 第43号掘立柱建物跡出土遺物観察表 (第282図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	残存	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版
1	須恵器	蓋	(19.0)	[1.6]	—	破片	砂粒 白粒	良好	灰	P8	
2	土師器	環	(16.0)	[2.3]	—	破片	雲 砂粒 白粒 黒粒	良好	橙	P6	

第44号掘立柱建物跡

欠番



第45号掘立柱建物跡 (第283図)

西区二面F・G-26グリッドに位置する。第419号溝跡に切られている。このため西側コーナー部分の柱穴が検出できなかった。

建物は桁行2間×梁行2間で、規模は桁行が3.14m、梁行が3.02mである。柱間は、桁行で1.46~1.57m(平均1.51m)、梁行で1.60~1.33m(平均1.47m)である。桁方向は、N-53°-Eである。

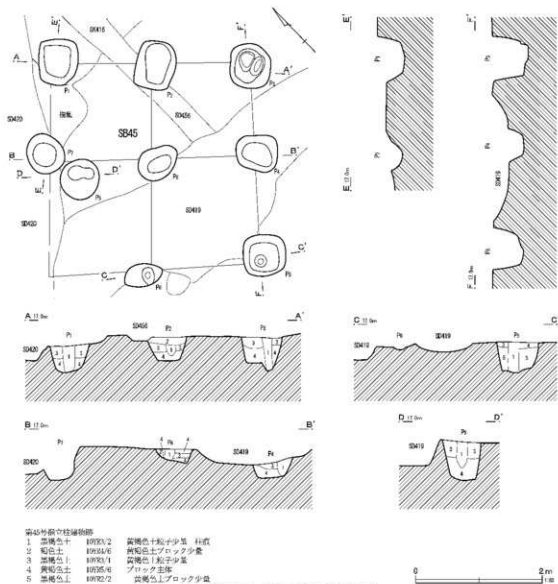
各ピットの規模は、P1が径72cm、深さ46cm、P2



第282図 第43号掘立柱建物跡出土遺物

が径76cm、深さ38.4cm、P3が径73cm、深さ57.9cm、P4が径66cm、深さ25.3cm、P5が径67cm、深さ47.4cm、P6が径58cm、深さ10cm、P7が径64cm、深さ57cm、P8が径68cm、深さ23.7cmである。

出土遺物は検出されなかったが、平安時代の第419号溝跡に切られており、第372号溝跡に平行して



建てられていることなどから古墳時代後期末の時期が考えられる。

第46号掘立柱建物跡 (第284図)

西区二面E-24・25グリッドに位置する。西側は調査区域外に伸び第47号掘立柱建物跡と重複する。建物は桁行3間×梁行2間で、規模は桁行が5.00m、梁行が(2.44m)である。柱間は、桁行で1.35～1.93m(平均1.67m)である。桁方向は、N-102°-Wである。

各ピットの規模は、P1が径58cm、深さ16.9cm、P2が径95cm、深さ29.2cm、P3が径67cm、深さ16.6cm、

P4が径82cm、深さ25cm、P5が径81cm、深さ39cm、P6が径56cm、深さ18.6cmである。

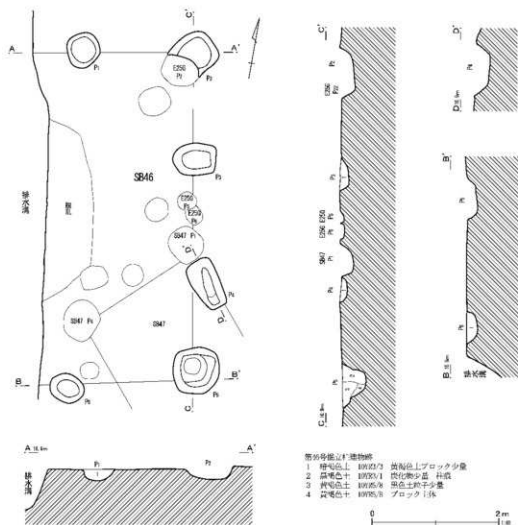
出土遺物は検出されなかった。

第47号掘立柱建物跡 (第286図)

西区二面E-25グリッドに位置する。第47号掘立柱建物跡と重複する。

建物は桁行1間×梁行1間で、規模は桁行が2.60m、梁行が2.00mである。桁方向は、N-129°-Wである。

各ピットの規模は、P1が径56cm、深さ20.3cm、P2が径73cm、深さ40.9cm、P3が径61cm、深さ24.3cm、



第284図 第46号掘立柱建物跡

P4が径65cm、深さ21.8cmである。

出土遺物は、第285図に図示した土師器甕の底部である。底径小さく「コ」の字裏の底部と見られる。

第48号掘立柱建物跡 欠番

第49号掘立柱建物跡 (第287図)

東区M-23グリッドに位置する。東側に検出した



第285図 第47号掘立柱建物跡出土遺物

第524号溝跡と平行する。また、北側には第9・10号柱穴列が隣接する。

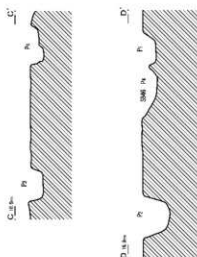
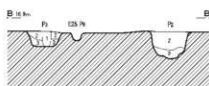
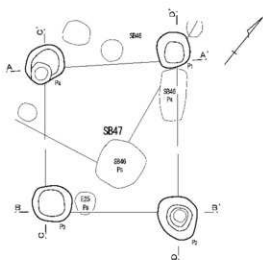
建物は桁行2間×梁行2間で、規模は桁行が2.20m、梁行が2.06mである。柱間は、桁行で1.00~1.20m(平均1.10m)、梁行で0.97~1.10m(平均1.04m)である。桁方向は、N-73°-Eである。

各ピットの規模は、P1が径53cm、深さ21cm、P2が径40cm、深さ38.1cm、P3が径62cm、深さ44.8cm、P4が径60cm、深さ21.2、P5が径42cm、深さ23.5cm、P6が径45cm、深さ38.8cmである。

出土遺物は土師器破片を少量検出した。

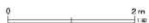
第97表 第47号掘立柱建物跡出土遺物観察表 (第285図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	残存	胎土	焼成	色調	出土位置・備考	図版	
I	土師器	甕	—	[2.0]	(6.1)	底部破片	雲	赤粒	白粒	普通 にふいふ濁	P4	

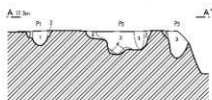
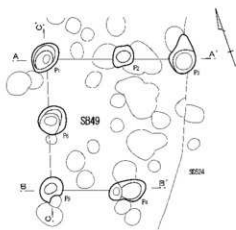


第47号掘立柱建物跡

- 1 赤褐色土 100R/1 柱内面、柱底
- 2 黄褐色土 100R/8 プロット土床
- 3 黄褐色土 100R/2 黄褐色土ブロック少量



第286図 第47号掘立柱建物跡



第49号掘立柱建物跡

- 1 黄褐色土 100R/2 黄褐色土粒/少量
しまりあり 柱内面
- 2 黄褐色土 2.3E/1 黄褐色土、紅褐色土粒子含む
しまり強、柱内面
- 3 黄褐色土 100R/2 褐色土粒子、ブロック多量
しまりあり 柱内面
- 4 灰オリーブ色土 30S/2 黄褐色土ブロック多量、しまりあり 柱内面



第287図 第49号掘立柱建物跡

4. 柱穴列

下田町遺跡第3次調査において、9条の柱穴列を検出した。

第1号柱穴列および第2号柱穴列は中世の薬研堀である第278号溝跡と平行する。しかし、第1・2号柱穴列の南側には平安時代の第348号溝跡が平行して走る。いずれかの溝跡を意識したものと考えられる。出土遺物がなく正確な時期までは不明であるが、各柱穴は規模も小さく、特に、第1号柱穴列のP1は掘り方が方形であることなどから中世の遺構の可能性が指摘できる。

第3号柱穴列および第4号柱穴列は南北方向に並ぶ柱穴列として確認した。両柱穴列に平行して、第345号溝跡が南北方向に走り、第3号柱穴列は溝跡の東側にあたり、第4号柱穴列は溝跡の西側にあたる。このことから、柱穴列と溝跡の関連が考えられるが、出土遺物もなく時期は不明である。

第5号柱穴列の西側には第4号溝跡が位置する。周辺には同じ規模の柱穴も確認でき、必ずしも柱穴列とは断定できない面もある。第6号柱穴列および第7号柱穴列も同様に、周辺には同じ規模の柱穴も確認でき、建物跡の一部の可能性もあり、必ずしも柱穴列とは断定できない面もある。

また、東区で検出された第8号柱穴列および第9号柱穴列も、周辺に同じ規模の柱穴が数多く確認され、建物跡の一部の可能性もあり、必ずしも柱穴列とは断定できない面もある。

第1号柱穴列 (第288図)

西区二面H・I-23グリッドに位置する。北側には、第278号溝跡が平行する。また、南側には、第348号溝跡が位置し、これら、いずれかの溝跡を意識して造られていたものと考えられる。

柱穴列の規模は、1間と短い。柱間の距離は全長2.90mである。軸方向はN-85°-Wである。

各ビットの規模は、P1が径27cm、深さ18cm、P2が径30cm、深さ18cmである。

第2号柱穴列 (第288図)

西区二面I-23グリッドに位置する。北側には、第278号溝跡が平行する。また、南側には、第348号溝跡が位置し、これら、いずれかの溝跡を意識して造られていたものと考えられる。

柱穴列の規模は、3本の柱穴で構成されている。各柱間は、P1-P2は2.4m、P2-P3は4.68mで、全長7.08m (柱間平均3.54m) である。軸方向は、N-87°-Wである。

各ビットの規模は、P1が径26cm、深さが22.9cm、P2が径33cm、深さ22.4cm、P3が径34cm、深さ49.5cmである。

出土遺物は検出されなかった。

第3号柱穴列 (第288図)

西区二面I-24・25グリッドに位置する。南北方向にビットを確認した。西側には第345号溝跡が南北方向に走り関連が考えられる。

柱穴列の規模は、3本の柱穴で構成されている。各柱間は、P1-P2は1.40m、P2-P3は2.02mで、全長3.42m (柱間平均1.71m) である。軸方向は、N-1°-Wである。

各ビットの規模は、P1が径31cm、深さ35.2cm、P2が径28cm、深さ41.4cm、P3が径26cm、深さ33.2cmである。

出土遺物は検出されなかった。

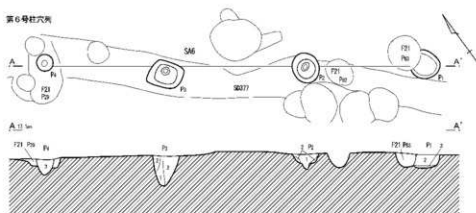
第4号柱穴列 (第288図)

西区二面H-25・26グリッドに位置する。南北方向にビットを確認した。東側には第345号溝跡が南北方向に走り関連が考えられる。

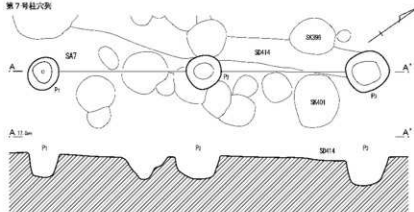
柱穴列の規模は、3本の柱穴で構成されている。各柱間は、P1-P2は1.93m、P2-P3は1.90mで、全長3.83m (柱間平均1.92m) である。軸方向は、N-20°-Eである。

各ビットの規模は、P1が径31cm、深さ48.1cm、P2

第6号柱穴列

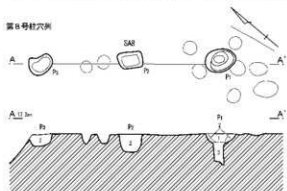


第7号柱穴列



- 第6号柱穴列
- | | | | |
|---|------|------------|----------------------------------|
| 1 | 黒褐色土 | 10102/2 | 黄褐色土砂子(φ1~3mm)2% しまりややあり 粘土あり 粘土 |
| 2 | 黒褐色土 | 7, 10102/1 | 黄褐色土ブロック(φ1~5cm)10% しまりあり 粘土ややあり |
| 3 | 褐色土 | 10102/1 | 黄褐色土ブロック少量 しまりややあり 粘土あり |

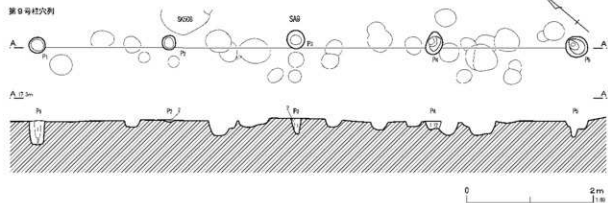
第8号柱穴列



- 第8号柱穴列
- | | | | |
|---|-------|---------|---|
| 1 | 黒色土 | 10102/1 | 赤土砂子(φ1~2mm)3% 灰褐色土ブロック(φ1~10cm)5% しまりややあり 粘土ややあり |
| 2 | 黒色土 | 10102/1 | 黄褐色土ブロック(φ1~2cm)25~30% しまりややあり |
| 3 | 灰黄褐色土 | 10102/2 | 粘土 しまりややあり 粘土あり |

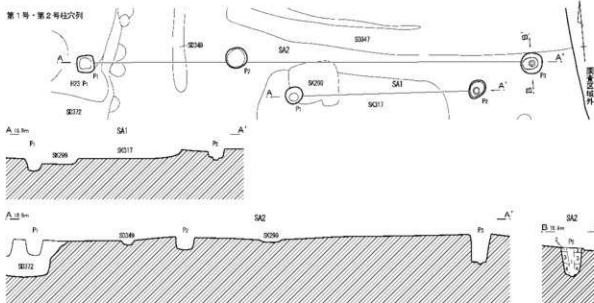
- 第9号柱穴列
- | | | | |
|---|------|---------|-------------------------------------|
| 1 | 赤色土 | 10102/1 | 黄褐色土ブロック(φ1cm)少量 しまりあり 粘土あり |
| 2 | 黒褐色土 | 10102/1 | 黄褐色土ブロック(φ1~2cm)25~30% しまりあり 粘土ややあり |

第9号柱穴列

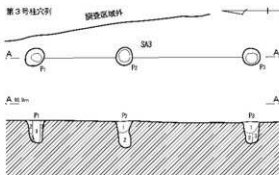


第288図 柱穴列 (1)

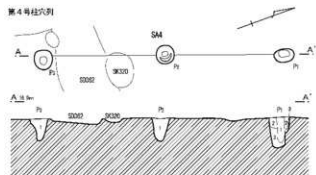
第1号・第2号柱穴列



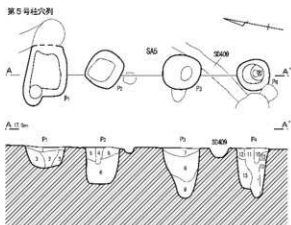
第3号柱穴列



第4号柱穴列



第5号柱穴列



第4号柱穴列

- | | | | |
|---|---------|------|-----------------------------|
| 1 | 灰色土 | S347 | 灰色粘土、しまり強い、粘性強い、 |
| 2 | 灰褐色土 | S347 | 灰褐色土ブロック多量に含む、しまり強い、粘性強い、 |
| 3 | 灰ナガシゴ色土 | S350 | 黄褐色土、灰色粘土ブロック多量、しまり強い、粘性強い、 |

第5号柱穴列

- | | | | |
|----|---------|------|------------------------------|
| 1 | 黒褐色土 | S348 | 黄褐色土粒少量、しまり強い、粘性あり |
| 2 | 黒褐色土 | S348 | 黄褐色土ブロック多量に含む、しまりあり、粘性あり |
| 3 | 暗褐色土 | S348 | 黄褐色土ブロック多量、しまりあり、粘性強い、 |
| 4 | 黒褐色土 | S349 | 黄褐色土ブロック少量、しまり強い、粘性強い、 |
| 5 | 暗褐色土 | S349 | 黄褐色土ブロック少量、しまり強い、粘性強い、 |
| 6 | 暗褐色土 | S349 | 黄褐色土ブロック少量、しまり強い、粘性強い、 |
| 7 | 暗褐色土 | S349 | 黄褐色土粒少量、しまり強い、粘性強い、 |
| 8 | 暗褐色土 | S349 | 黄褐色土粒少量、炭化物粒を含む、 |
| 9 | オリーブ褐色土 | S349 | 灰褐色土体、しまり強い、粘性強い、 |
| 10 | 暗褐色土 | S349 | 黄褐色土ブロック多量、炭化物粒少量、しまり強い、粘性あり |
| 11 | 黒褐色土 | S349 | 黄褐色土粒少量、しまり強い、粘性強い、 |
| 12 | 暗褐色土 | S349 | 黄褐色土粒少量、炭化物粒を含む、しまり強い、粘性強い、 |
| 13 | 黒褐色土 | S349 | 黄褐色土ブロック多量、しまり強い、粘性強い、 |

第2号柱穴列

- | | | | |
|---|------|------|------------|
| 1 | 黄褐色土 | S372 | 灰褐色土 |
| 2 | 灰褐色土 | S372 | 黄褐色土粒子多量 |
| 3 | 黄褐色土 | S372 | 黄褐色土ブロック多量 |
| 4 | 灰褐色土 | S372 | 粘性強い |

第3号柱穴列

- | | | | |
|---|---------|------|--------------------------------|
| 1 | 灰色土 | S343 | 黄褐色土粒子少量、しまり弱い、粘性強い、 |
| 2 | 灰黄褐色土 | S343 | 黄褐色土、灰色粘土、ブロック状を含む、しまり強い、粘性強い、 |
| 3 | 灰ナガシゴ色土 | S343 | 灰褐色土、ブロック状を含む、しまり強い、粘性強い、 |



第289図 柱穴列 (2)

が径30cm、深さ35.8cm、P3が径29cm、深さ33.5cmである

出土遺物は検出されなかった。

第5号柱穴列 (第288図)

西区二面G-21・22グリッドに位置する。西側には第4号溝跡が位置するが、周辺には同じ規模の柱穴も確認でき、建物跡の一部の可能性もある。必ずしも柱穴列とは断定できない面もある。

柱穴列の規模は、4本の柱穴で構成されている。各柱間は、P1～P2は0.91m、P2～P3は1.24m、P3～P4は1.12mで、全長3.27m(柱間平均1.09m)である。軸方向は、N-11'-Wである。

各ピットの規模は、P1が径105cm、深さ33.9cm、P2が径57cm、深さ59.5cm、P3が径61cm深さ66.3cm、P4が径53cm、深さ78.3cmである。

出土遺物は検出されなかった。

第6号柱穴列 (第289図)

西区二面F-21グリッドに位置する。周辺には同じ規模の柱穴も確認でき、建物跡としての一部の可能性もある。必ずしも柱穴列とは断定できない面もある。

柱穴列の規模は、4本の柱穴で構成されている。各柱間は、P1～P2は1.90m、P2～P3は2.21m、P3～P4は1.92mで、全長6.03m(柱間平均2.01m)である。軸方向は、N-55'-Wである。

各ピットの規模は、P1が径45cm、深さ21.6cm、P2が径50cm、深さ25.6cm、P3が径52cm、深さ51.1cm、P4が径27cm、深さ15.9cmである。

出土遺物は検出されなかった。

第7号柱穴列 (第289図)

西区二面F-21・22グリッドに位置する。周辺には同じ規模の柱穴も確認でき、建物跡としての一部の可能性もある。必ずしも柱穴列とは断定できない面もある。

柱穴列の規模は、3本の柱穴で構成されている。各柱間は、P1～P2は2.56m、P2～P3は2.57m、全長5.13m(柱間平均2.57m)である。軸方向は、N-36'-Eである。

各ピットの規模は、P1が径54cm、深さ37.5cm、P2が径56cm、深さ35.9cm、P3が径67cm深さ46cmである。

出土遺物は検出されなかった。

第8号柱穴列 (第289図)

東区N-23グリッドに位置する。周辺には同じ規模の柱穴も確認でき、建物跡としての一部の可能性もある。必ずしも柱穴列とは断定できない面もある。

柱穴列の規模は、3本の柱穴で構成されている。各柱間は、P1～P2は1.43m、P2～P3は1.45mで、全長2.88m(柱間平均1.44m)である。軸方向は、N-41'-Wである。

各ピットの規模は、P1が径49cm、深さ47.5cm、P2が径39cm、深さ26.8cm、P3が径38cm、深さ19.8cmである。

出土遺物は検出されなかった。

第9号柱穴列 (第289図)

東区M-23グリッドに位置する。周辺には同じ規模の柱穴も確認でき、建物跡としての一部の可能性もある。必ずしも柱穴列とは断定できない面もある。

柱穴列の規模は、5本の柱穴で構成されている。各柱間は、P1～P2は2.10m、P2～P3は2.01m、P3～P4は2.18m、P4～P5は2.28mで、全長8.57m(柱間平均2.15m)である。軸方向は、N-48'-Eである。

各ピットの規模は、P1が径25cm、深さ35.6cm、P2が径23cm、深さ10.6cm、P3が径30cm、深さ30.1cm、P4が径35cm、深さ22.5cm、P5が径34cm、深さ26.8cmである。

出土遺物は検出されなかった。

5. 井戸跡

井戸跡は、古墳時代から中世のものにまで及び、第3次調査では171基検出された。第2次調査で検出されたものと合算すると合計302基になる。

第213号井戸跡、第216号井戸跡、第286号井戸跡の3基を除いて、井戸枠は検出されなかった。井戸枠が検出されない井戸跡の中には、井戸枠材の木片などが数点出土する井戸跡もあり、全てが素掘りの井戸というのではなく、井戸枠が片づけられた井戸もあったと思われる。

井戸枠にもさまざまなものがあり、検出された3基も、中央に曲物を据えて、その周囲を縦に打ち込んだ長い杭で補強した第213号井戸跡、井戸枠横木が桁状に組まれた第216号井戸跡、底部に曲物が据えられた第286号井戸跡とそれぞれ異なる井戸枠を構築している。

井戸跡の形態は円形や楕円形が多く、第259号井戸跡のような方形の井戸跡も数基検出された。断面形には筒形、漏斗形、箱形、フラスコ形が確認された。規模は直径38～363cmと大きささまざまなが、第2次調査の成果においても指摘されていたように、中世の井戸跡に規模の大きいものが多い傾向が今回もみられる。調査時にも、確認面から1mほど掘り上げると壁面は青灰色の砂層に変わり、水が湧いたことから、これらの井戸が使用されていた時期にも、地下1.5mほど掘れば豊富な水が得られたのではないと思われる。しかし反面、砂質層まで掘ると側壁が崩れやすくなり、調査中も、壁崩落の危険性を考慮して、底部までの調査を断念せざるを得ない井戸跡も多かった。井戸跡が数多く掘削されているのは、井戸跡がつくられた当時も底部付近は崩れやすかったため、崩れては掘り直した結果かもしれない。

出土遺物は、多量に出土するものほとんど何も出土しない井戸跡とに分かれる。

各時期における井戸跡の数の内訳は、可能性があると判断されるものも含め、古墳時代後期の可能性のあるもの3基、古墳時代後期～奈良時代が3基、

古墳時代末期が1基、奈良時代が13基、平安時代が70基、奈良・平安時代が1基、平安時代以降が3基、中世が43基である。また、遺物が少なく、時期のわからないものは34基あった。

第132号井戸跡（第293図）

西区一面で確認され、F-19グリッドに位置している。上層を南北に縦断する第269号溝跡に切られている。平面形は円形で、規模は直径188cm、深さは約110cmまでしか掘削できなかった。断面形は漏斗形である。

出土遺物は少なく、混入とみられる遺物が多かった。本遺構に伴う遺物として陶器の破片があるが、図示できなかった。

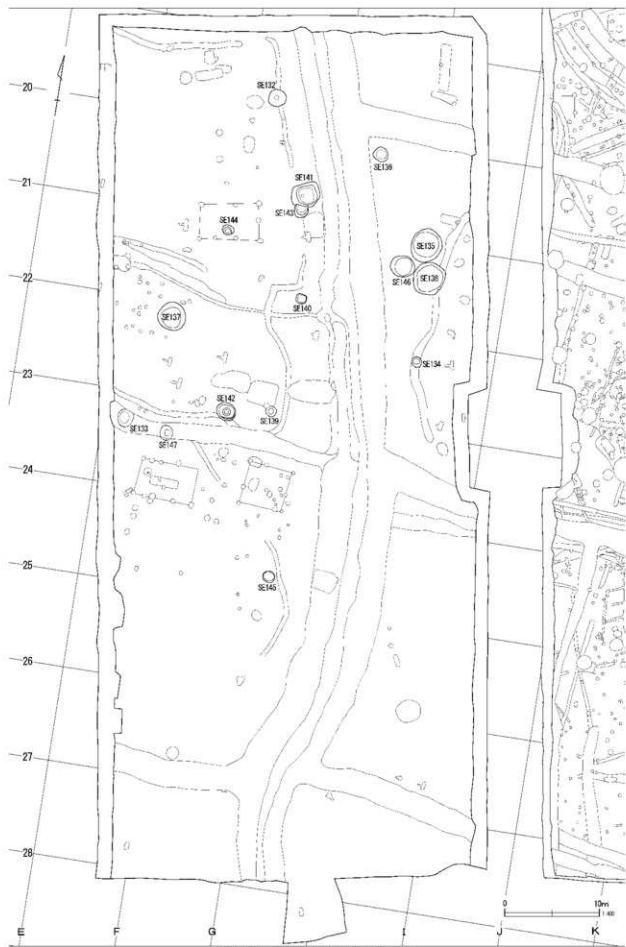
第133号井戸跡（第293図）

西区一面の第276号溝跡の調査中に、溝の底で確認された。E-23グリッドに位置する。西区一面では、第276号溝跡はトレンチ調査であったため、このトレンチに一部のみがひっかかっていた本遺構の平面形全体を確認することはできなかった。平面形は円形と推定され、直径は252cmである。深さは約125cmまでしか掘削できなかった。下方の筒形部分の直径は74cmで、断面形は漏斗形である。

出土遺物は極めて少なく、図示できた遺物は第295図1～3に示した。8世紀初頭から平安時代の遺物が含まれていたことから、8世紀初頭の井戸跡と推測され、平安時代までの遺物が混入したと考えられる。

第134号井戸跡（第293図）

西区一面で確認され、H-22グリッドに位置する。第274号溝跡を切っている。平面形は円形で、規模は直径114cm、深さは160cmで、断面形は筒形を呈する。半截して調査を進めていたところ、断面が崩落したため、断面の記録は不可能となった。



第290号 井戸跡全体図 西区一面



第291図 井戸跡全体図 西区二面



第292図 井戸跡全体図 東区

出土遺物は、須恵器の環と7世紀の甕などが混入していたが、遺構は一面で確認されているため、中世のものである可能性が高い。中世の遺物は出土していない。

第135号井戸跡 (第293図)

西区一面で確認され、G-20、G-21、H-20、H-21グリッドに位置する。平面形は円形で、規模は直径359cm。深さは154cmで、断面形は箱形である。

出土遺物には、本遺構に伴うとみられる遺物として常滑の破片、在地産の鉢、片岩の破片が出土した。図示できた遺物は第295図4に示した。このほか、9世紀の混入遺物が多くみられた。

第136号井戸跡 (第293図)

西区一面で確認され、G-20グリッドに位置する。平面形は不整形円形で、規模は直径158cmである。深さ157cmの地点まで調査したが、これ以下は崩落の危険性があるため調査を断念した。断面形は筒形である。

出土遺物は第295図5に示した。遺物量は破片が8点と極めて少ないが、青磁碗の底部(8)が出土した。

第137号井戸跡 (第294図)

西区一面で確認され、E-22、F-22グリッドに位置する。平面形は円形で、規模は直径320cmである。深さ137cmまで調査したところで、崩落の危険性が生じたため調査を断念した。断面形は漏斗形で、下部の井戸本体部分の直径は162cmである。

出土遺物は、第295図6～9に示した。在地の鉢、瓦質土器の破片のほかに、青磁の破片、片岩の大礫、木製碗が出土した。木製碗は、樹種同定の結果、カツラ材から作られたものであることがわかった。分析の詳細はⅢ-2に掲載している。このほか、9世紀の混入遺物も多数出土している。

第138号井戸跡 (第294図)

西区一面で確認され、H-21グリッドに位置する。

井戸跡は第274号溝跡に切られている。平面形は不整形円形で、規模は、直径351cmである。深さは131cmで、断面形は箱形である。井戸の中心は中央部に設けられていたと考えられ、井戸本体の外側と内側の位置の痕跡が、特に断面西側の堆積状況において確認できる。

出土遺物には、常滑とみられる破片が1点出土したほか、灰釉陶器や須恵器、土師器の甕や杯など7世紀～8世紀にかけての遺物が多く出土した。一面(上面)で確認されたことから、遺構は中世のものと判断され、第295図10～18に図示した出土遺物は、混入したものと考えられる。

第139号井戸跡 (第294図)

西区一面で確認され、F-22、F-23グリッドに位置する。北西側でピットに切られている。平面形は円形で、規模は直径116cmである。深さは180cmで、断面形はやや口が開きぎみの筒形である。

出土遺物は第295図19に示した。遺物量は多くはないが、中世の在土器が1点、片岩の欠片が出土した。ほかに、灰釉陶器、須恵器、土師器などの混入遺物が多くみられた。

第140号井戸跡 (第294図)

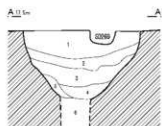
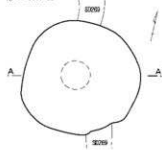
西区一面F-21グリッドに位置する。平面形はやや長方形で、規模は長径111cm、短径103cmを測る。長軸方向はN-90°-Eである。深さは137cmで、断面形は筒形である。

出土遺物は少ない。一面(上面)で確認されたため、中世の遺構と判断されるが、片岩の欠片のほかに中世の遺物は無く、須恵器、土師器の破片が出土した。第295図20に示した遺物は混入したものと考えられる。

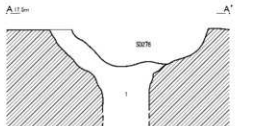
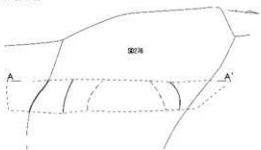
第141号井戸跡 (第294図)

西区一面で確認され、F-20グリッドに位置する。南側で第143号井戸跡を切っている。平面形は不整形

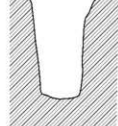
第132号井戸跡



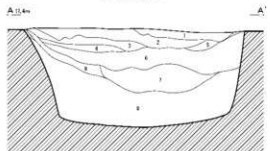
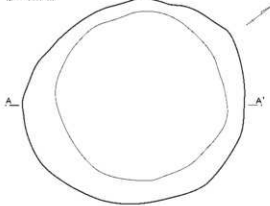
第133号井戸跡



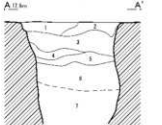
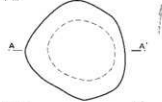
第134号井戸跡



第135号井戸跡



第136号井戸跡



第132号井戸跡

1 黒褐色土	100K3/2	ロームブロック(φ17~5mm)2% 炭化燐1%
2 黒褐色土	2.5Y3/1	しまり強、粘性強い
3 黒色土	10Y2/1	層下面に腐葉の有機物堆積 しまり弱、粘性中やあり
4 黒褐色土	N2/1	しまり弱、粘性強い
5 暗褐色土	7.5Y3/1	地山分七セグブロック状に混入 しまり弱、粘性強い
6 腐葉の有機物があるため、顕表せず		

第133号井戸跡

1 腐葉の有機物があるため、顕表観察できず

第133号井戸跡

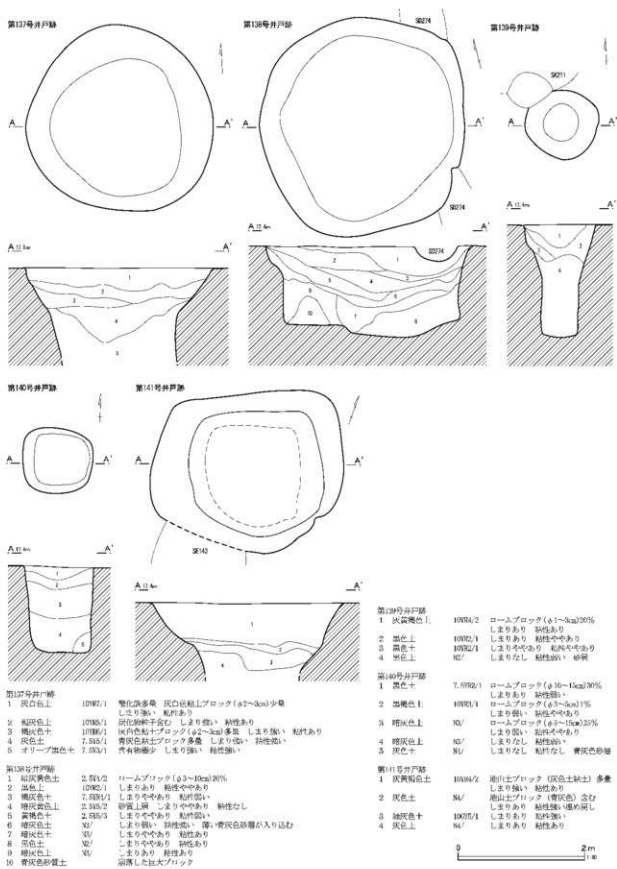
1 暗褐色土	X2/1	
2 改良褐色土	10Y3/3	反白色ブロック多量
3 灰褐色土	3N/1	砂多量に混入
4 灰白色土	X2/1	反白色砂質層、糖餅状をまだらに含む
5 暗オリーブ灰色土	5Y3/1	粘土層
6 オリーブ灰色土	5Y2/1	粘土層
7 緑褐色土	7.5Y3/1	砂層
8 明黄褐色土	10Y3/6	
9 黒色土	X2/1	粘土層

第134号井戸跡

1 灰褐色土	10Y3/1	腐化葉を含む 反白色土がブロック状に混入 しまり強、粘性なし
2 灰白色土	7.5Y2/1	腐化葉多量 砂粒多量 しまりあり
3 浅黄色土	7.5Y3/3	粘性ややあり 腐化葉多量 砂粒多量 暗褐色土粒を含む しまり強、粘性あり
4 オリーブ灰色土	2.5Y3/1	粘褐色土粒少量 腐化鉄少量 しまり強い、粘性強い
5 灰黄褐色土	10Y3/2	灰白色土層ブロック状に含む しまり強い、粘性強い
6 灰褐色土	5Y4/1	灰白色土粒少量 しまり強い、粘性強い 埋込1)の土に黄褐色粘土ブロック混入
7 灰褐色土	5Y4/1	

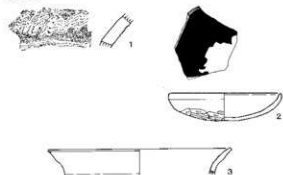


第293図 井戸跡 (1)

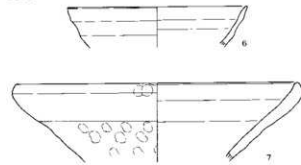


第294図 井戸跡(2)

SE133



SE137



SE135



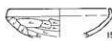
SE136



SE138



14



SE139



SE140



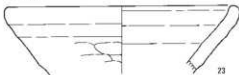
SE141



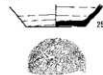
SE142



SE143



SE144



0 10cm

第295図 井戸跡出土遺物 (1)

方形で、規模は長径307cm、短径254cmを測る。長軸方向はN-65°-Eをとる。深さ110cmまで調査を進めたが、崩落の危険性が生じたため、以下の調査を断念した。断面形は漏斗形である。下部の井戸本体の平面形は不整形で、長径は146cmである。

出土遺物は第295図21に示した。遺物量は少ない。遺構に伴うものでは、かわらけが1点、片岩の礫が大きいものから小さいものまで8点出土した。鬼高期から平安時代の混入遺物も出土した。

第142号井戸跡 (第296図)

西区一面で確認され、F-22、F-23グリッドに位置する。南西側で第275号溝跡を切っている。浅いテラス状の掘り込みの中央部に井戸の本体が掘り込まれている。上面での平面形は楕円形で、規模は長径210cm、短径181cmを測る。長軸方向はN-46°-Wをとる。井戸の本体部分の平面形は、直径71cmの円形である。深さは183cmで、断面形はきれいな漏斗形である。

出土遺物は第295図22に示した。遺物量は少なく、遺構に伴う遺物としては常滑の破片1点、かわらけ1点が出土した。このほか、古墳時代後期～平安時代の混入遺物が出土している。

第143号井戸跡 (第296図)

西区一面で確認され、F-20グリッドに位置する。北側1/3は第141号井戸跡に切られている。平面形は楕円形と推定され、確認された範囲での規模は、長径142cm、短径122cmである。長軸方向はN-90°-Wをとる。深さは144cmまで調査したが、以下は崩落の危険性が生じたため、調査を断念した。断面形はやや口の開く筒形である。

出土遺物は第295図23・24に示した。遺物量は少なく、遺構に伴うものとしては在地の鉢、片岩の欠片、砥石が出土した。このほか、土師器や須恵器などの混入遺物もみられた。

第144号井戸跡 (第296図)

西区一面で確認され、E-21、F-21グリッドに位置する。上部の平面形は楕円形で、規模は長径125cm、短径103cmを測る。長軸方向はN-85°-Eをとる。下部の井戸本体部分の平面形は不整形で、直径60cmである。全体の深さは162cmで、断面形は漏斗形である。

出土遺物は少ない。一面(上面)で確認されたことから中世の遺構である可能性が高いが、出土遺物に中世のものはなく、遺物はすべて平安時代のものである。図示できたものは、第295図25に示した。

第145号井戸跡 (第296図)

西区一面で確認され、F-24、G-24グリッドに位置する。平面形は不整形で、規模は直径130cm、深さは167cmである。断面形は筒形である。

出土遺物は第298図1に示した。遺物量は少なく、遺構に伴うとみられる遺物では、焼成の悪い土師器の須恵器が出土した。このほか、土師器の甕、須恵器の甕などの混入遺物も出土した。

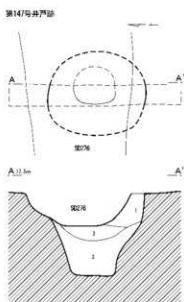
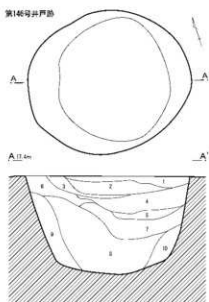
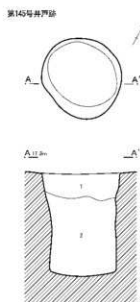
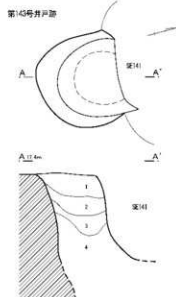
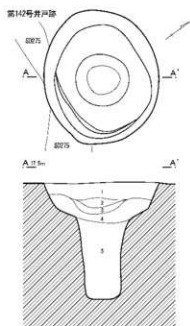
第146号井戸跡 (第296図)

西区一面で確認され、G-21グリッドに位置する。平面形は楕円形で、規模は長径258cm、短径223cm、長軸方向はN-90°-Wをとる。深さは156cmで、断面形は浅めの舟底形である。

出土遺物は少ない。一面(上面)で確認されていることから、遺構は中世のものとは判断されるが、中世の遺物はなく、第298図2に図示したような土師器の環や須恵器の甕など混入と考えられる遺物が出土した。

第147号井戸跡 (第296図)

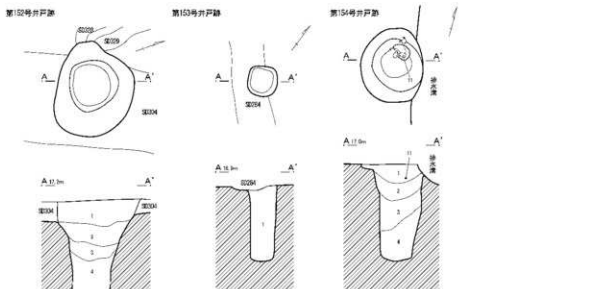
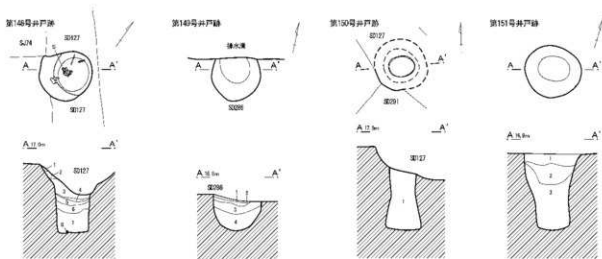
西区一面で確認され、E-23グリッドに位置する。第276号溝跡に上層を大きく切られている。一面での第276号溝跡がトレンチ調査であったため、トレンチの範囲での調査となった。平面形は楕円形で、



- 第142号井戸跡
- | | | | | |
|------------|---------|------------------|---------|--------|
| 1 黒褐色土 | 7.003/1 | ローム灰土(φ1~5cm)10% | しまりあり | 粘性ややあり |
| 2 灰褐色土 | K3/ | | しまりあり | 粘性あり |
| 3 オリーブ灰褐色土 | 2.903/1 | | しまりややあり | 粘性強い |
| 4 緑灰色土 | K3/ | | しまり弱い | 粘性あり |
| 5 黒色土 | K2/ | | しまり弱い | 粘性あり |
- 第143号井戸跡
- | | | | | | |
|---------|--------|--------|------------|-------|------|
| 1 灰黄褐色土 | 10R4/2 | 酸化鉄を含む | 赤色粒子少量 | しまりあり | 粘性あり |
| 2 灰褐色土 | 10R5/1 | | | しまりあり | 粘性強い |
| 3 灰黄褐色土 | 10R4/2 | | 小粒径土ブロック少量 | しまりあり | 粘性強い |
| 4 灰黄褐色土 | 10R4/2 | | | しまりあり | 粘性強い |
- 第144号井戸跡
- | | | | | | |
|----------|---------|--|--|--|--|
| 1 濃い黄褐色土 | 10R5/4 | | | | |
| 2 黒褐色土 | 10R5/1 | | | | |
| 3 灰黄褐色土 | 10R4/2 | | | | |
| 4 濃い黄褐色土 | 10R5/3 | | | | |
| 5 灰褐色土 | 7.033/1 | | | | |
| 6 黒色土 | 7.032/1 | | | | |
| 7 黒色土 | K2/ | | | | |
| 8 黒色土 | 7.032/1 | | | | |
| 9 黒色土 | K2/ | | | | |
| 10 黒色土 | K2/ | | | | |
- 第145号井戸跡
- | | | | | | |
|----------|--------|--|--|--|--|
| 1 濃い黄褐色土 | 10R4/3 | | | | |
| 2 灰黄褐色土 | 10R4/2 | | | | |
| 3 黒褐色土 | 10R5/1 | | | | |
| 4 濃い黄褐色土 | 10R4/3 | | | | |
- 第146号井戸跡
- | | | | | | |
|-------|--------|--|--|--|--|
| 1 黒色土 | 10R2/1 | | | | |
| 2 黒色土 | K2/ | | | | |
| 3 黒色土 | K2/ | | | | |
- 第147号井戸跡
- | | | | | | |
|-------|--------|--|--|--|--|
| 1 黒色土 | 10R2/1 | | | | |
| 2 黒色土 | K2/ | | | | |
| 3 黒色土 | K2/ | | | | |



第296図 井戸跡 (3)



- 第146号井戸跡
- | | | | | | | |
|---|------|---------|------------|---------|-------|------|
| 1 | 灰褐色土 | J09K5/2 | 黄褐色土砂子含む | しまり強い | 粘性あり | |
| 2 | 褐色土 | J09K4/1 | 瓦山+砂子(黄灰色) | 同化物粘土穴付 | しまり強い | 粘性強い |
| 3 | 褐色土 | J09K4/1 | 同化物粘土少量 | 畑山+砂子含む | しまり強い | 粘性強い |
| 4 | 暗褐色土 | J09K3/2 | 同化物粘土穴付 | しまり強い | 粘性強い | |
| 5 | 黄褐色土 | J09K3/1 | 同化物粘土穴付 | しまり強い | 粘性強い | |
| 6 | 褐色土 | J09K4/1 | 同化物粘土穴付 | しまり強い | 粘性強い | |
| 7 | 灰色土 | J.09K/1 | 黄灰色粒多量 | しまりなし | 粘性あり | |

- 第149号井戸跡
- | | | | | | | |
|---|---------|-----------|----------------|-------|-------|------|
| 1 | 黒褐色土 | J09K3/2 | 黄褐色土砂子少量 | しまり強い | 粘性なし | |
| 2 | 灰イロアツ色土 | J09K/2 | 灰イロアツ色土+土層の根+腐 | 砂量多量 | しまり強い | 粘性なし |
| 3 | 黒色土 | J09K1/7/1 | 砂量多量 | しまりなし | 粘性あり | |
| 4 | 黒褐色土 | J09K3/2 | 黄褐色土層(フロック少量) | しまりあり | 粘性強い | |

- 第150号井戸跡
- 1 断面崩落のため、記録できず

- 第151号井戸跡
- | | | | | |
|---|------|---------|-------|-----------|
| 1 | 黄褐色土 | J.09K/1 | 同化物多量 | 灰色土フロック少量 |
| 2 | 褐色土 | J.09K/1 | 同化物少量 | |
| 3 | 灰色土 | J09K/1 | 同化物少量 | 灰色土フロック多量 |

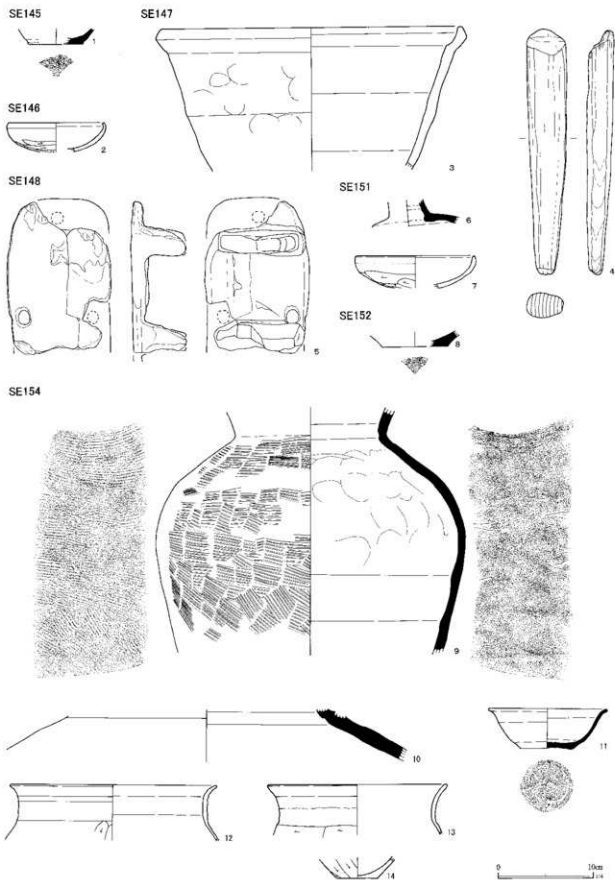
- 第152号井戸跡
- | | | | | |
|---|---------|---------|-----------|-----------|
| 1 | 黄褐色土 | J.09K/1 | 粒上砂子少量 | 同化物多量 |
| 2 | 褐色土 | J.09K/1 | 同化物少量 | 灰色土フロック少量 |
| 3 | 黒色土 | J.09K/1 | 同化物少量 | |
| 4 | 灰イロアツ色土 | J09K/1 | 灰色土フロック少量 | |

- 第153号井戸跡
- 1 断面崩落のため、記録できず

- 第154号井戸跡
- | | | | | |
|---|-----|-----|-------------|----------|
| 1 | 灰色土 | M/ | しまりあり | 粘性強い |
| 2 | 褐色土 | KV/ | しまりややあり | 粘性強い |
| 3 | 褐色土 | KV/ | 畑山土(黄灰色砂質土) | 断面に10%含む |
| 4 | 褐色土 | KV/ | しまりなし | 粘性強い |



第297図 井戸跡(4)



第298図 井戸跡出土遺物 (2)

規模は長径152cm、短径は推定143cmである。長軸方向はN-2°-Wをとる。深さは131cmで、断面は漏斗形、井戸本体の部分は直径67cmである。

出土遺物は第298図3・4に示した。遺物量は少なく、在地の鉢、片岩の大礫が2点、木製品の一部が出土した。このほか、土師器や須恵器の混入遺物がみられた。

第148号井戸跡（第297図）

東区のK-18グリッドに位置する。第127号溝跡に上層を大きく切られている。上部での平面形は楕円形で、規模は長径83cm、短径70cmである。長軸方向はN-23°-Eである。下部の井戸本体の平面形は円形で、規模は直径50cmである。深さは107cmで、断面形は漏斗形である。

出土遺物は、第298図5に示したように、底から下駄が出土した。下駄について樹種同定をおこなった結果、ケヤキで作られていることが判明した。分析の詳細はⅧ-2に掲載している。また、上層ではほかに木片が数点出土した。

なお本遺構では、出土した木製品の特徴から、トイレ状遺構の可能性が想定されたため、覆土の寄生虫分析をおこなった。その結果、本遺構の土壌からはトイレ状遺構で検出されるべき濃度の寄生虫は検出されず、トイレ状遺構ではなく、井戸跡であると判断された。分析の詳細については、Ⅷ-1に掲載した。

第149号井戸跡（第297図）

東区のI-18グリッドに位置する。第286号溝跡の底で確認されたため、確認面からの深さは浅い。北側は調査のための排水溝にかかり、一部壊されている。平面形は円形と推定され、規模は直径77cmである。深さは31cmである。

出土遺物は極めて少なく、須恵器の破片2点を含む3点のみで、図示できるものはなかった。

第150号井戸跡（第297図）

東区のK-18グリッドに位置する。第127号溝跡に上部を大きく壊されている。第291号溝跡との新旧関係は不明である。遺構半截の途中で断面が崩落したため、断面観察はできなかった。平面形は円形で、上部の直径は42cm、底部はオーバーハングしており、底部の下端の長径は55cmである。深さは134cmで、断面形はフラスコ形である。

出土遺物はなかった。

第151号井戸跡（第297図）

東区のL-18グリッドに位置する。平面形は不整円形で、規模は直径90cmである。深さは120cmで、断面形は口がやや開く筒形である。

出土遺物は第298図6・7に示した。遺物量は8点と極めて少なく、土師器の甕、坏、須恵器などが出土した。

第152号井戸跡（第297図）

東区のJ-18グリッドに位置する。第304号溝跡および第328号溝跡、第329号溝跡を切っている。平面形は不整楕円形で、規模は長径152cm、短径121cmである。長軸方向はN-70°-Wである。井戸本体の平面形は円形で、直径は60cmである。全体の深さは133cmであり、断面形は口がやや開く形である。

出土遺物は第298図8に示した。遺物量は少なく、須恵器の坏・甕の破片、土師器の坏・甕の破片、灰釉陶器の破片などが出土した。

第153号井戸跡（第297図）

東区のL-18グリッドに位置する。上部を第284号溝跡に切られている。半截の途中で断面が崩落したため、断面の記録は残せなかった。平面形は方形にやや近い円形で、規模は直径48cmと小さい。深さは122cmで、断面形は筒形である。

出土遺物は極めて少なく、須恵器の甕、土師器など破片9点が出土した。図示可能なものはなかった。

第154号井戸跡（第297図）

東区のM-18グリッドに位置する。調査のための排水溝によって東側の一部を壊されている。平面形は円形と推定され、規模は直径118cmである。深さは154cmで、断面形は筒形である。

出土遺物は第298図9-14に示した。遺物量は一定量あり、須恵器の甕・大型甕・坏、土師器の甕などが出土した。

第155号井戸跡（第299図）

東区のI-19、I-20グリッドに位置する。第270号溝跡に上層を大きく切られているほか、グリッドビットにも切られている。平面形は不整楕円形で、北側にテラス状の浅い張り出し部が設けられている。規模は、長径336cm、検出された範囲での短径は256cmを測る。長軸方向はN-75-Eである。井戸本体部分の平面形は不整円形で、直径は153cmである。全体の深さは160cmあり、断面形は漏斗形である。

出土遺物は第302図1・2に示した。遺物量は少なめで、遺構に伴うものとしてはかわかけ、在地産の甕が出土したほか、須恵器の甕・坏・高台壇、土師器の甕などの遺物が混入していた。また、ウマの上腕骨（Ⅶ-2図版7）も出土している。

第156号井戸跡（第299図）

東区のI-20グリッドに位置する。南側でI-20グリッドP6を切る。平面形は円形で、規模は直径138cmである。深さは135cmを測り、断面は漏斗形である。下部の井戸本体の平面形も円形で、直径62cmである。

出土遺物は第302図3に示した。遺物量は少なく、須恵器の坏・甕、土師器の小破片が出土した。

第157号井戸跡（第299図）

東区のJ-20グリッドに位置する。平面形は円形で、直径は135cmである。深さ141cmの地点まで調査を進めたところで崩落の危険性が生じたため、それ

以下の調査を断念した。断面形は、やや口の広がる筒形である。

出土遺物は第302図4に示した。遺物量は少なく、遺構に伴うものとしては、中世の陶器の破片、焼成不良の須恵器の坏が出土した。このほか、土師器の甕の小片などの混入遺物もみられた。

第158号井戸跡（第299図）

東区のI-20、J-20グリッドに位置する。平面は不整円形で、東側に小さなテラス状の張り出しがある。規模は、確認面での直径が104cmで、井戸本体部分の直径は65cmである。深さは102cmあり、断面形は漏斗形である。

出土遺物は第302図5・6に示した。遺物量は少なく、須恵器の坏・蓋、高台付壇、土師器の小破片が出土した。

第159号井戸跡（第299図）

東区のJ-20グリッドに位置する。北側で第8号方形周溝墓の南側周溝を切り、南東側で第320号溝跡を切っている。平面形は不整円形で、直径は115cmである。深さ152cmの地点まで調査したところ、壁の崩落の危険性が生じたため、それ以下の調査を断念した。断面形はやや口の開く筒形である

出土遺物はなかった。

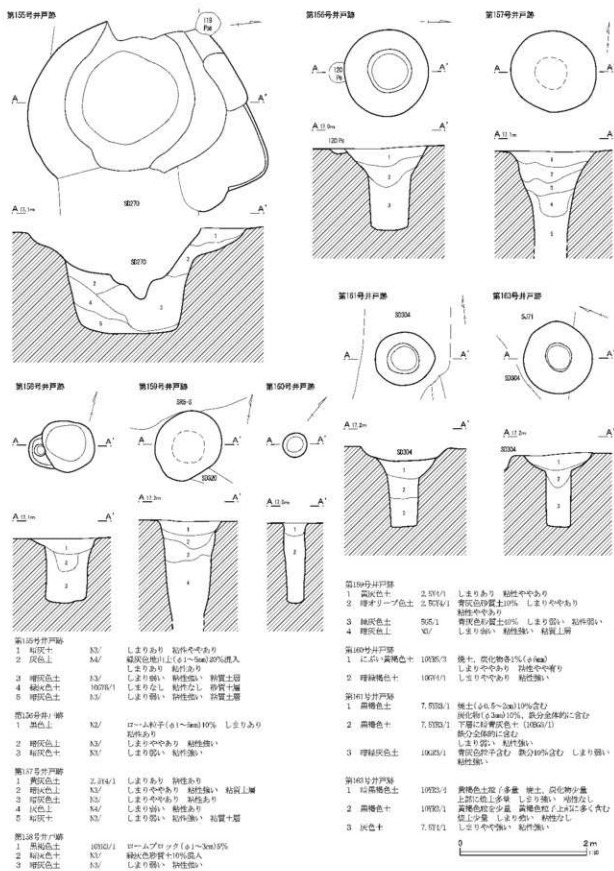
第160号井戸跡（第299図）

東区のK-19グリッドに位置する。平面形は円形で、規模は直径38cmと極めて小さい。深さは125cmで、断面形は筒形である。

出土遺物は第302図7・8に示した。遺物量は一定量あり、土師器の長胴甕、丸底甕の胴部など甕の胴部破片、土師器の坏が出土した。

第161号井戸跡（第299図）

東区のJ-18グリッドに位置する。第304号溝跡に上層を切られている。平面形は円形で、直径は94



第299図 井戸跡(5)

cmである。深さは130cmで、断面形は漏斗形である。井戸本体部分の直径は40cmである。

出土遺物はなかった。

第162号井戸跡

東区のJ-20グリッドに位置する。調査のための排水溝にかかっていたため、確認のみにとどまり、東側のごく一部を除いて調査は不可能であった。したがって、個別の図面は作成せず、全体図に位置を記録するにとどまった。平面形は円形で、規模は長さ206cm、短径166cmを測る。長軸方向はN-19-Wである。深さは計測できなかった。

部分的な調査であることから、出土遺物は極めて少なく、遺構に伴う遺物としては、常滑の破片が2点が出土した。ほかに、須恵器の環・甕の混入がみられた。図示可能なものはなかった。

第163号井戸跡（第299図）

東区のJ-18グリッドに位置する。北側で第71号住居跡を壊して構築されている。平面形は円形で、規模は直径110cmである。深さは117cmで、断面形は漏斗形である。下部の井戸本体部分の直径は39cmである。

出土遺物は第302図9～12に示した。遺物量は、少なめで、須恵器の高台付埴・環・甕、土師器の甕など破片が出土している。

第164号井戸跡（第300図）

東区のK-20グリッドに位置する。第301号溝跡を切っており、第168号井戸跡に切られている。平面形は円形で、規模は直径238cmである。深さ130cmまで調査した時点で壁の崩落の危険性が生じたため、調査を断念した。断面形は漏斗形で、下部の井戸本体部分の直径は58cmである。

出土遺物は第302図13～20および第303図1に示した。遺物量は多めで、須恵器の大甕・甕・蓋・環、灰釉陶器、土師器の甕などが出土した。第303図1は

片面の一部に、直径4.5cmの円形の範囲で集中的に敲打を施したような、丸い凹みのついた礫である。

第165号井戸跡（第300図）

東区のJ-20グリッドに位置する。平面形は不整形円形で、規模は直径72cmとやや小さい。深さ158cmまで調査したが、崩落の危険性が生じたため調査を断念した。断面形は筒形である。

出土遺物は極めて少なく、須恵器の環、土師器の小破片など4点が出土したが、図示できるものはない。

第166号井戸跡（第300図）

東区のI-19グリッドに位置する。平面形は円形で、直径68cmである。深さは140cmで、断面形は筒形である。

出土遺物は第303図2・3に示した。遺物量は少なく、須恵器の甕、土師器の環・甕の破片などが出土した。

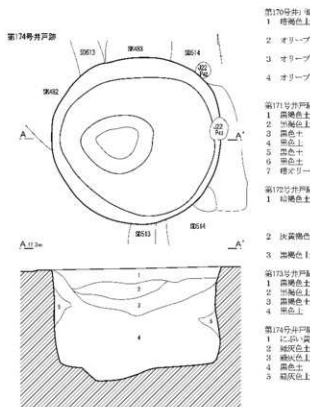
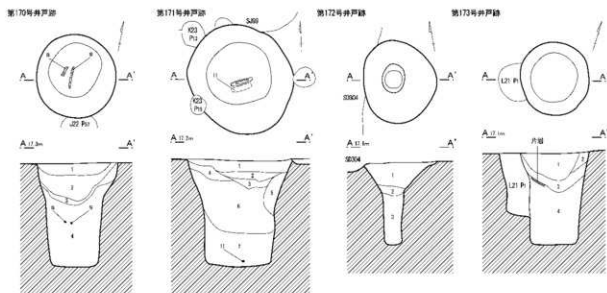
第167号井戸跡（第300図）

東区のL-20グリッドに位置する。北東側で第270号溝跡に切られ、南西側で第130号溝跡を切っている。西区一面の同じ位置では中世の第137号井戸跡が検出されている。本遺構は平安時代のものと判断され、本遺構と同じ位置に後世の中世井戸が掘削されたと考えられる。平面形は不整形円形で、規模は直径238cmである。深さは152cmあり、断面形は漏斗形である。下部の井戸本体部分の直径は、107cmである。

出土遺物は第303図4・5に示した。遺物量は極めて少なく、須恵器の環・甕、土師器の小破片、扁平の礫など6点のみである。ほかに板材の一部も出土した。

第168号井戸跡（第300図）

東区のK-20グリッドに位置する。北西側で第



第170号井戸跡

- 1 粘褐色土
- 2 オリーブ片色土
- 3 オリーブ片色土
- 4 オリーブ黒色土

第171号井戸跡

- 1 黄褐色土
- 2 赤褐色土
- 3 赤色土
- 4 赤色土
- 5 赤色土
- 6 赤色土
- 7 緑色土

第172号井戸跡

- 1 粘褐色土

第173号井戸跡

- 1 黄褐色土
- 2 赤褐色土
- 3 赤褐色土
- 4 赤褐色土

第174号井戸跡

- 1 赤褐色土
- 2 赤褐色土
- 3 赤褐色土
- 4 赤褐色土
- 5 赤褐色土
- 6 赤褐色土
- 7 赤褐色土

第301図 井戸跡 (7)

出土遺物は第303図6に示した。遺物量は極めて少なく、須恵器の環・甕、土師器の環・甕など小破片が14点出土した。

第169号井戸跡 (第300図)

東区のK-20グリッドに位置する。平面形は円形で、規模は直径60cmと小さい。深さは134cmを測る。

10002/3 焼土砂子(φ5~6cm)少量 炭化植物(φ2~6cm)少量

しまり強い、粘性弱い。

10002/2 焼土(灰オリーブ) ブロック(φ10~20cm)まがらひを含む

炭化物(下)方に多い、しまり強い、粘性強い。

10002/2 焼土(灰オリーブ) (φ10~20cm)

まだら状に含む、しまり弱い、粘性強い。

10002/1 シルトブロック(φ5~10cm)少量 まがらひを含む

炭化物(下)方に少量、しまり強い、粘性強い。

7.0005/1 焼土粒(φ5~10cm)10%含む

しまりややあり、粘性ややあり

7.0005/1 焼土砂子(φ5~10cm)10%含む

断面に成上り同色の薄い土層

7.0002/1 焼土粒(φ5~10cm)3% しまり弱い、粘性弱い。

7.0002/1 しまり強い、粘性強い。

K2/ 黄褐色土ブロック(φ5~10cm)3%

しまり強い、粘性強い。

K2/ しまり強い、粘性強い。

K2/ しまり強い、粘性ややあり

2.0003/1 焼土色シルトブロック10%含む

焼土ブロック(φ5~10cm)少量

炭化物、焼土粒、焼土少量

しまり強い、粘性強い、粘性あり

10004/2 1層ブロック、黄褐色土シルトブロック(炭褐色土0.003/1)を

まだら状に少量含む、しまり強い、粘性強い、シルト質粘土層

2.0003/1 しまり強い、粘性強い、均質なシルト質粘土層

10002/2 黄褐色土ブロック少量

10002/2 炭褐色土ブロック少量

2.0003/2 黄褐色土粒少量

炭化物多量、ややシルト質

2.0002/1 炭化物多量、シルト質

10004/4 黄褐色土(φ5~10cm)ブロック状に含む

しまりあり、粘性あり

7.0005/1 赤褐色土(灰オリーブ)ブロック状に含む

しまりややあり、粘性強い、灰質土層

7.0005/1 しまりややあり、粘性なし、砂質土層

002/1 しまりややあり、粘性強い、灰質土層

7.0005/1 焼土の赤褐色砂質土(焼土の膠着土)

しまり強い、粘性なし

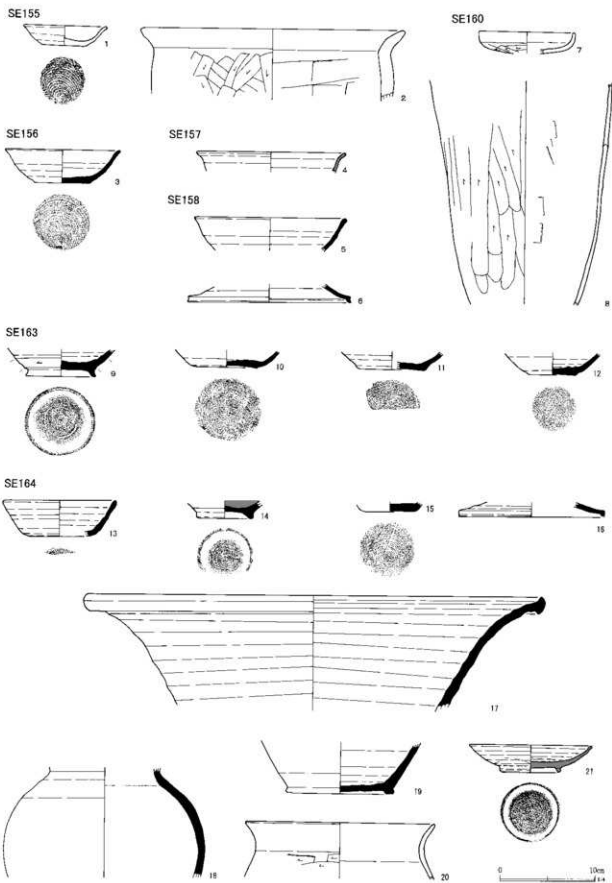


断面形は上部がわずかに開く筒形である。

出土遺物はなかった。

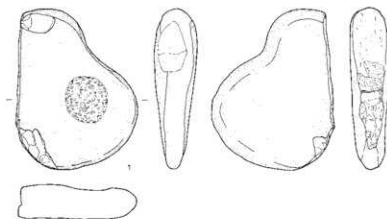
第170号井戸跡 (第301図)

東区のJ-22グリッドに位置する。南側でJ-22グリッドP57を切っている。平面形は円形で、規模は直径130cmである。深さは164cmあり、断面形は東

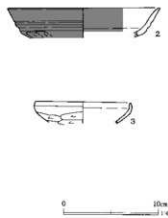


第302図 井戸跡出土遺物(3)

SE164



SE166



SE167



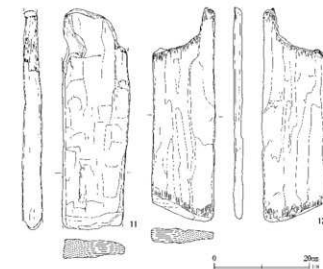
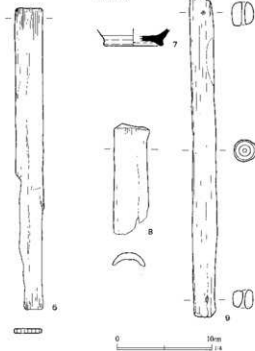
SE168



SE171



SE170



SE174



第303図 井戸跡出土遺物(4)

側にやや広がる漏斗形である。下部の井戸本体部分の直径は85cmである。

出土遺物は第303図7～9に示した。遺物量は極めて少なく、須恵器の高台付杯・甕胴部、土師器の甕など小破片が18点出土した。また第303図9は、両端に切り込みを施した、なんらかの木製品の部材である。

第171号井戸跡（第301図）

東区のK-23グリッドに位置する。北側で第99号住居跡、K-23グリッドP13を切り、南西側でK-23グリッドP57に切られる。平面形は円形で、規模は直径175cmである。深さは170cmで、断面形はやや口の開く筒形である。

出土遺物は第303図10～13に示した。遺物量は少なく、須恵器の杯・甕・壺・高台付壺、片岩の大きな欠片のほかに、焼けた粘土塊が3点、板状の木材が出土した。

また本遺構では、多くの種子が出土したため、これらの種実同定をおこなった。その結果、これらの種子はシソ属の果実、アカサ属の種子など人里植物や耕地雑草のものであることがわかった。周囲には集落や耕地が広がっていたと考えられる。

第172号井戸跡（第301図）

東区のJ-18グリッドに位置する。西側で第304号溝跡に切られている。平面形は円形で、規模は直径132cmである。深さは132cmあり、断面形は漏斗形である。下部の井戸本体部分の直径は30cmと極めて小さい。

出土遺物は極めて少なく、土師器の甕・皿など小破片が6点出土したが、図示可能なものはなかった。

第173号井戸跡（第301図）

東区のI-21、J-21グリッドに位置する。西側でL-21グリッドP1を切っている。平面形は円形で、規模は直径116cmである。深さは147cmあり、断

面形は口がやや開く筒形である。覆土3層と4層は炭化物を多量に含んでいることから、井戸の廃絶時に廃棄物を投棄したと考えられる。

出土遺物はほとんどなく、土師器の小破片が2点、片岩の欠片が出土した。図示可能なものはなかった。

第174号井戸跡（第301図）

東区のJ-22、J-23グリッドに位置する。東側でJ-22グリッドP43に切られるが、第482号土坑、第483号土坑、第513号溝跡、第514号溝跡を切っている。平面形は円形で、規模は直径266cm、深さ180cmを測る。断面形は箱形に近い。底部中央の西寄りに凹みがあり、5層の堆積位置が、底部の凹みの上端と合うことから、中央やや西寄りの位置に井戸本体が設けられていたと考えられる。井戸本体の規模は直径約115cmであったと推定される。

出土遺物は第303図14～16に示した。遺物量は、少なく、かわらけ、陶器の破片、在地産の甕や鉢の破片などが出土した。ほかに、須恵器の杯、土師器の小破片が混入していた。

第175号井戸跡（第304図）

東区のK-20グリッドに位置する。第302号溝跡を切っている。平面形は円形で、規模は直径118cm、深さは155cmである。断面形は、口に向かってやや開く筒形である。覆土5層には焼土ブロックが、覆土4層と7層には炭化物が多量に含まれていることや土器も出土していることから、井戸の廃絶後に廃棄物をまとめて投棄したものと考えられる。

出土遺物は第306図1～9に示した。遺物量は一定量あり、高台付壺が多い。ほかに、須恵器の杯などが出土した。

第176号井戸跡（第304図）

東区のK-20グリッドに位置する。平面形は円形で、規模は直径56cm、深さは101cmである。断面形は筒形である。

出土遺物はなかった。

第177号井戸跡 (第304図)

東区のJ-19グリッドに位置する。第130号溝跡に切られている。平面形は円形で、規模は直径57cm、深さは114cmである。断面形は、やや口の開く筒形である。

出土遺物はなかった。

第178号井戸跡 (第304図)

東区のL-21グリッドに位置する。第302号溝跡を切っている。平面形は円形で、直径105cm、深さは133cmである。断面形は漏斗形で、下部の井戸本体部分は直径58cmである。

出土遺物は第306図10~13に示した。遺物量は少なく、須恵器の高台付環・甕、土師器の環などが出土した。

第179号井戸跡

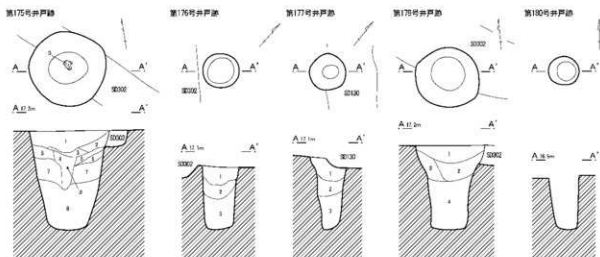
東区のL-23グリッドに位置する。第287号溝跡の底で確認された。湧水のため、個別の図面の作成は不可能であった。全体図にその平面形と位置を記録するととどまった。平面形は円形で、規模は直径87cmである。深さは計測できなかった。

出土遺物はなかった。

第180号井戸跡 (第304図)

東区のL-22グリッドに位置する。半裁の途中で断面が崩落したため、断面の観察はできなかった。平面形は円形で、規模は直径46cmと小さく、深さは88cmである。断面形は筒形である。

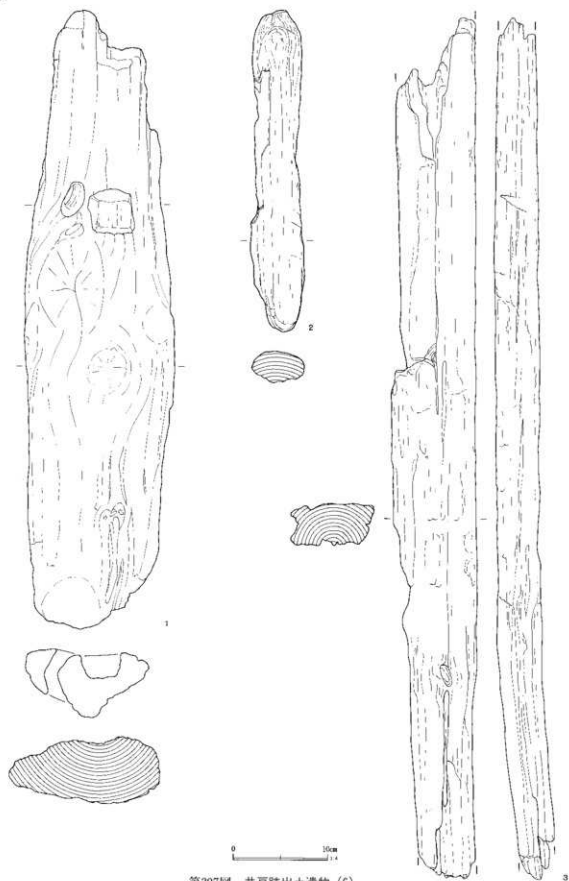
出土遺物は第306図14・15に示した。遺物量は少なく、須恵器の壺・環・甕の破片、土師器の甕の小破片などが出土した。



第175号井戸跡	第177号井戸跡	第179号井戸跡	第180号井戸跡	第181号井戸跡	
1 黒色土	10932/1	黒灰色土(ブロック ϕ 15cm)1%、炭化物(ϕ 0.5~2cm)2%、粘土ブロック(ϕ 5cm)1%、炭化物(ϕ 1cm)1%、しまりややあり、粘性ややあり	10932/2	黒灰色土(ブロック ϕ 15cm)1%、炭化物(ϕ 0.5~2cm)2%、粘土ブロック(ϕ 5cm)1%、炭化物(ϕ 1cm)1%、しまりややあり、粘性ややあり	
2 黒色土	10932/1	黒土ブロック(ϕ 5cm)1%、炭化物(ϕ 1cm)1%、しまりややあり、粘性ややあり	2 灰赤土	7.091/1	黒土ブロック(ϕ 5cm)1%、炭化物(ϕ 0.2~1cm)1%、炭土ブロック(ϕ 1~4cm)2%、しまりややあり、粘性あり
3 黒色土	10932/1	灰赤土	3 オリーブ灰色土	5093/1	赤粘土多量、黒色土(7.091/1)に多量の炭化物、しまり強い、粘性強い
4 緑灰色土	1006/1	赤粘土多量、黒色土(7.091/1)に多量の炭化物、しまり強い、粘性強い	1 褐色土	7.093/4/3	粘土ブロック(ϕ 0.5cm)2%、炭化物(ϕ 1cm)1%、粘土分10%、しまり強い、粘性あり
5 黒色土	10932/1	黒土ブロック(ϕ 0.5cm)2%、炭化物(ϕ 1cm)1%、しまり強い、粘性あり	2 黒褐色土	10933/2	しまりややあり、粘性あり
6 褐色土	7.091/1	炭化物多量、緑灰色土(1004/1)多い、砂粒多量、灰赤土(1004/1)多い、砂粒多量、粘性あり	3 黒褐色土	10933/1	しまり強い、粘性強い
7 黒色土	7.091/1	粘土分10%、しまり強い、粘性あり			
8 断面崩落のため、断面観察できず					

第304図 井戸跡 (8)





第307図 井戸跡出土遺物(6)

め、7層以下の調査を断念した。断面形は漏斗形である。井戸の中心部は東側に寄っており、下部の中心部分は直径140cmである。

出土遺物には、須恵器の甕、土師器の甕・坏の小破片が4点出土したが、図示できるものはなかった。

第183号井戸跡（第305図）

西区二面のE-27、F-27グリッドに位置する。東側では第187号井戸跡を切っている。また本遺構は、南側で接している第232号井戸跡よりも新しい。平面形は不整形円形で、規模は直径220cmである。深さ122cmの地点まで調査を進めたが、壁面崩落の危険性が生じたため、5層以下の調査を断念した。断面形は漏斗形で、中心部分の直径は115cmである。

出土遺物は第306図19・20に示した。遺物量は少ないが、土器類のほかに片岩の礫が数点出土した。遺構に伴う遺物としては、陶器の破片、在地の鉢、かわらけが出土した。ほかに、須恵器の甕や土師器の破片などが混入していた。

第184号井戸跡（第308・309図）

西区二面のH-24、H-25グリッドに位置する。南側でH-25グリッドP13に切られる。平面形は円形で、規模は直径190cm、深さは145cmである。断面形は漏斗形で、中心部にはさらに円筒状の掘り込みが残る。中間部分の直径は156cm、最下部の筒状の掘り込みの直径は90cmである。上層の覆土全体には炭化物や焼土粒子が多く含まれていた。特に炭化物は1層、2層、4層、5層に、焼土粒子は1層と4層に多く含まれている。遺物が4層、5層、6層の上層から特に大量に出土しており、井戸の廃絶に伴って、土器を大量に廃棄し、さらに上から燃えかすなどのゴミが少なくとも2度に渡って投棄されたという埋没過程がうかがえる。

本井戸跡からは、大量の遺物が出土した。出土遺物は第310～313図および第314図1に示した。3枚の遺物出土状況図に示したとおり、遺物は特に覆土

4層・5層直下を中心に、底面付近や中層からも出土している。覆土4層、5層付近からは、20、21の須恵器の甕2個体、22の須恵器の甕1個体、24の須恵器の大甕1個体を含む大量の須恵器、灰桶陶器、土師器が出土した。20～23の須恵器の甕・甕は破砕された状態であったが、いずれも4層・5層あたりでまとまって出土しており、6層周辺まで埋まった段階で投棄されたものと考えられる。出土遺物の7割が須恵器であった。

ほかに、32、33のような曲物の底板や板材、杭などの木製品や木材、31のような軽石も出土している。

第185号井戸跡（第315図）

西区二面のH-24グリッドに位置する。平面形は円形で、規模は直径87cmである。深さ131cmまで調査したが、壁面が崩落する危険性が生じたため、それ以下の調査を断念した。断面形は筒形である。

出土遺物は第314図2に示した。遺物量は少なく、須恵器の坏や甕の破片など平安時代の遺物を主体とする。2は瓦の破片で、裏面の縁には縁に沿った方向に、内側は湾曲する方向にナデ調整を施す。

第186号井戸跡（第315図）

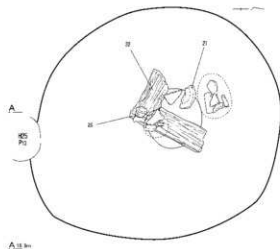
西区二面のH-24グリッドに位置する。北側半分では第370号溝跡を切っている。平面形は円形で、規模は直径65cmである。深さは125cmで、断面形はやや口の開く筒形である。覆土上層にあたる1層と2層には炭化物が多量に含まれ、埋没過程における最終段階で燃えかすなどをまとめて捨てたものとみられる。

出土遺物は第314図3～6に示した。遺物量は少なく、須恵器の甕・甕・坏の破片などが出土した。6は有孔円板で、混入した可能性がある。

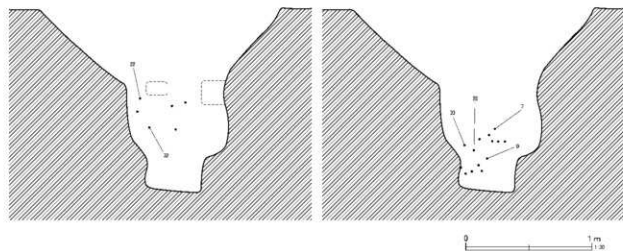
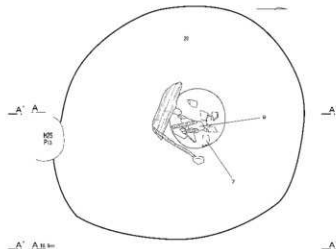
第187号井戸跡（第315図）

西区二面E-27、F-27グリッドに位置する。西側では第183号井戸跡、東側では第182号井戸跡に切

第184号井戸跡 遺物出土状況②



第184号井戸跡 遺物出土状況③



第309図 井戸跡 (11)

多くの遺構のなかで最も新しい遺構である。第313～315号土坑、第354号溝跡を切っている。平面形は不整形円で規模は直径234cmである。深さ190cmまで調査したが、壁面が崩落する危険性が生じたため、以下の調査を断念した。断面形はおおむね筒形で、上部の一部にくびれがみられる。

出土遺物は第314図11に示した。遺物量は一定量あり、在地産の鉢、陶器の破片が出土した。このほか、須恵器や土師器など平安時代の遺物が多量に混入していた。また、特に2層からは円碟が多く出土した。

第190号井戸跡 (第315図)

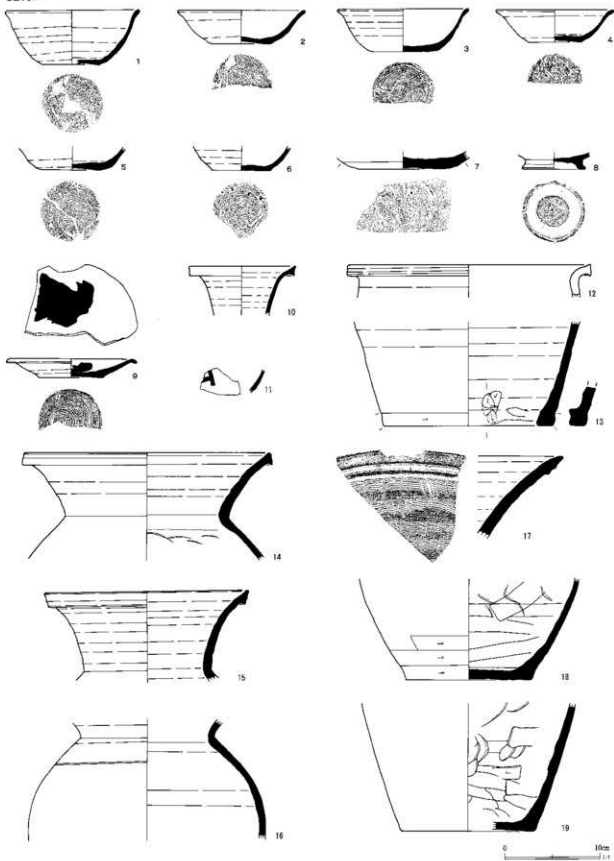
西区二面のH-24グリッドに位置する。第2号溝跡に上層を大きく切られている。平面形は方形で、規模は一辺が110cmである。深さは155cmで、断面形は筒形である。

出土遺物は第316図1に示した。遺物量は極めて少なく、須恵器の壺、土師器の甕の破片など4点が出土した。

第191号井戸跡 (第315図)

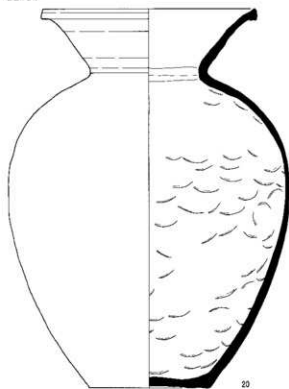
西区二面のH-25グリッドに位置する。平面形は円形で、規模は直径113cm、深さ134cmである。断面

SE184

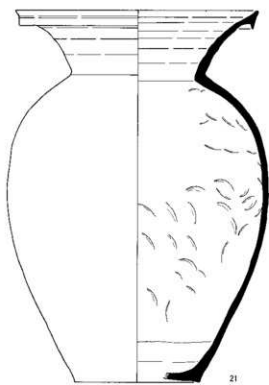


第310図 井戸跡出土遺物 (7)

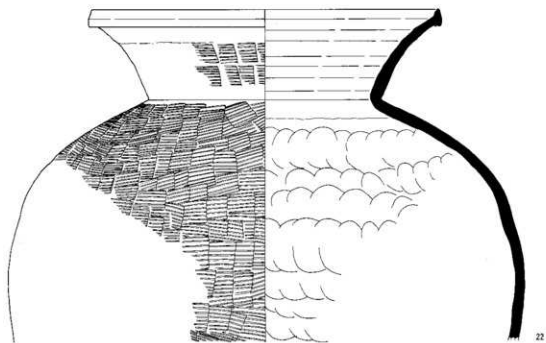
SE184



20



21

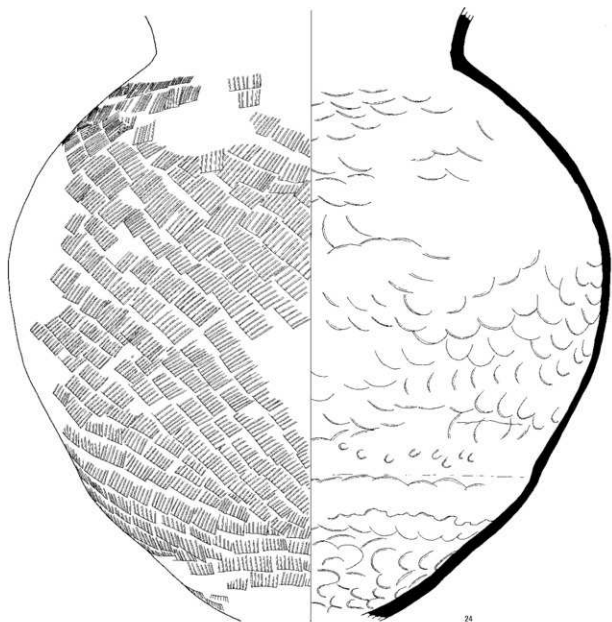


22

0 10cm

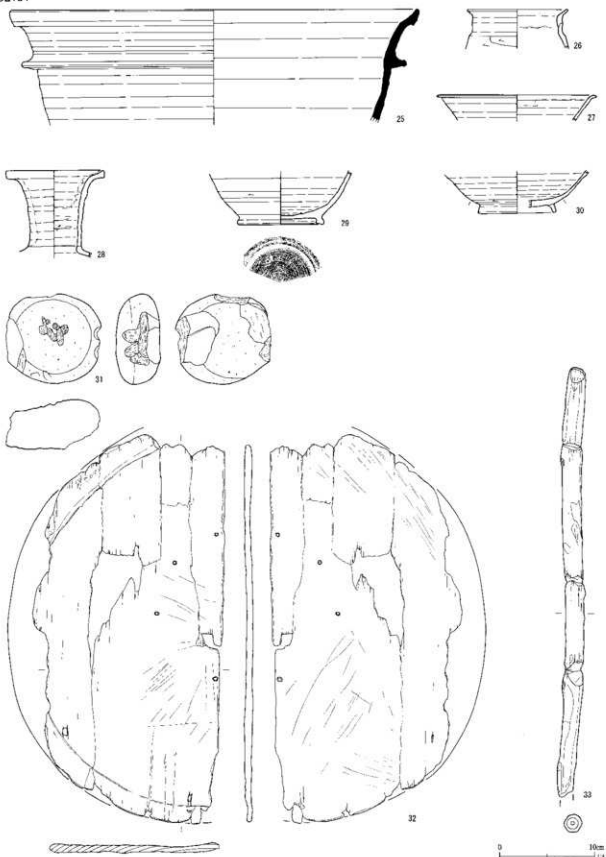
第311图 井戸跡出土遺物(8)

SE184



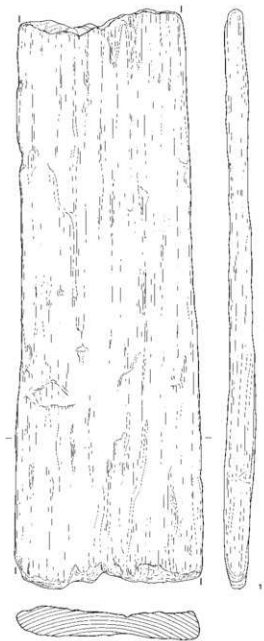
第312図 井戸跡出土遺物(9)

SE184



第313図 井戸跡出土遺物 (10)

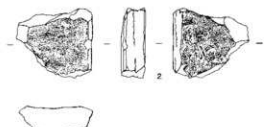
SE184



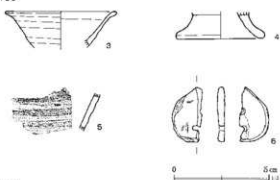
SE189



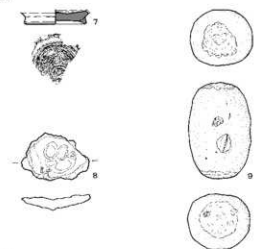
SE185



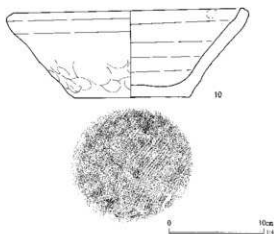
SE186



SE187



SE188



第314図 井戸跡出土遺物 (11)

形はやや口の開く筒形である。1層、3層、5層、7層には多量の炭化物が含まれ、4層、5層、6層に焼土粒子が多量に含まれていた堆積状況から、炭化物と焼土粒子をそれぞれまとめて6回にわたって交互に埋めたことがわかる。11層には有機物とみられる腐植土層も確認された。上下に同じ土層の堆積がみられ、短時間のうちに有機物層の堆積があったものと考えられる。

出土遺物は第316図2～14に示した。遺物量は一定量あり、須恵器の高台付埴・環・甕、土師器甕・環、灰釉陶器の皿、鉄製品、木材などが出土した。高台付埴が主体的である。

第192号井戸跡 (第315図)

西区二面のH-23、H-24グリッドに位置する。中央部では第348号溝跡を切って構築され、西側では第2号溝跡に切られている。平面形は不整形円形で、規模は直径85cmである。断面形は筒形である。

出土遺物は第316図15・16に示した。遺物量は極めて少なく、灰釉陶器の小破片、土師器の環・甕・台付甕、須恵器の甕の破片などが出土した。

第193号井戸跡 (第317図)

西区二面のH-24グリッドに位置する。平面形は円形で、規模は直径74cmである。深さは100cmで、断面形は口がやや開く筒形である。

出土遺物は極めて少なく、土師器の環などの小破片が10点出土した。図示可能な遺物はなかった。

第194号井戸跡 (第317図)

西区二面のE-21グリッドに位置する。平面形は円形で、規模は直径245cmである。断面形は西側に偏った三角形で、井戸本体は西側に寄って掘削されていたと思われる。深さは169cmである。

出土遺物は第316図17・18に示した。遺物量は少なめで、平安時代初期の所産とみられる須恵器の環・甕のほか、軽石、片岩の小片、砂岩系のやわらか

い礫などが出土した。

第195号井戸跡 (第317図)

西区二面のE-22、F-22グリッドに位置する。南側でピットを切っている。平面形は不整形円形で、南側にやや張り出し、規模は長径330cm、短径265cmを測る。長軸方向はN-71°Wである。深さは140cmで、断面形は台形である。

出土遺物は第316図19～23に示した。遺物量は一定量あり、中世陶器の破片、かわらけ、曲物の一部、片岩の欠片、砂岩系のやわらかい礫が出土した。曲物の底板は樹種同定の結果、サワラで作られたものとわかった。分析の詳細はⅧ-2に掲載している。このほかにも、平安時代の遺物が多数混入していた。

第196号井戸跡 (第317図)

西区二面のF-22グリッドに位置する。西側で第381号土坑、北東側で第414号溝跡を切っている。また、北側ではF-22グリッドP21に切られている。平面形は北側に小さな半円形の張り出しのある不整形円形で、規模は直径289cmである。張り出した部分はN-11°Eの方向にのびる。深さは162cmで、断面形は箱形である。覆土は自然堆積に近く、下層には有機物が多く含まれている。

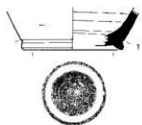
出土遺物は第320図1～6に示した。遺物量は少なめで、在地産の鉢、陶器の鉢、砥石、礫、片岩の欠片、砂岩系のやわらかい礫、木製品の一部が出土したほか、須恵器の環、土師器などの混入遺物も多数出土した。

第197号井戸跡 (第318図)

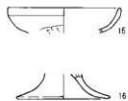
西区二面のF-27グリッドに位置する。平面形は円形で、規模は直径57cmと小さい。深さは81cmで、断面形は筒形である。

出土遺物は少なく、台付甕の脚部破片を含め、土師器の破片など11点が出土したが、図示できるものはなかった。

SE190



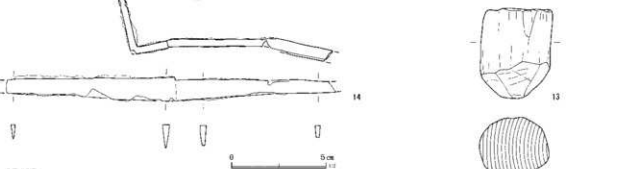
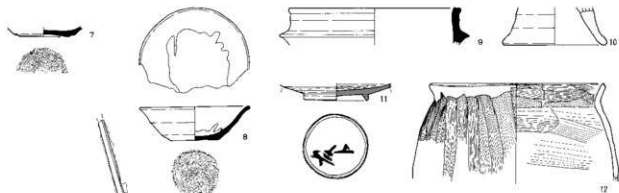
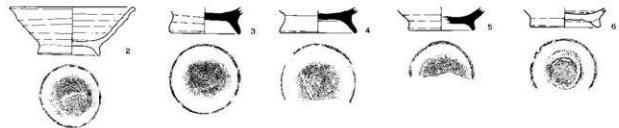
SE192



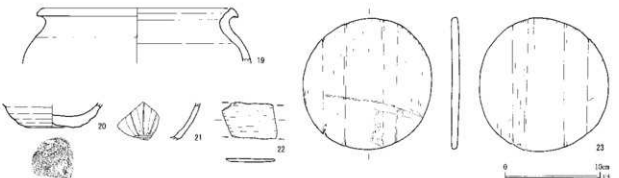
SE194



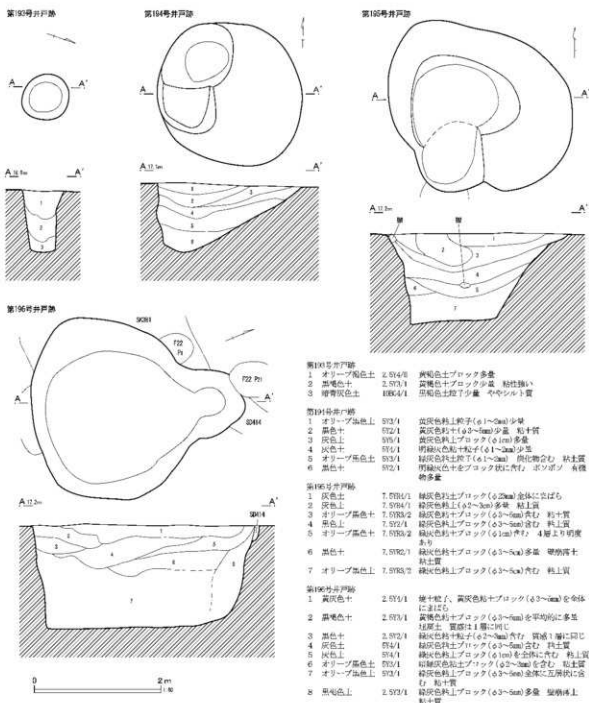
SE191



SE195



第316团 井戸跡出土遺物 (12)



第317図 井戸跡 (13)

第198号井戸跡 (第318図)

西区二面F-21グリッドに位置する。南西側でF-21グリッドP24を切っている。平面形は円形で、規模は直径198cmである。断面形は口が開く形で、深さは155cmである。覆土8層には多量の有機物が含まれていた。

出土物は第320図7・8に示した。遺物量は少なめで、土師製の須恵器の大ぶりの底部、須恵器の襷・高台付杯、土師製の襷などが出土した。

第199号井戸跡 (第318図)

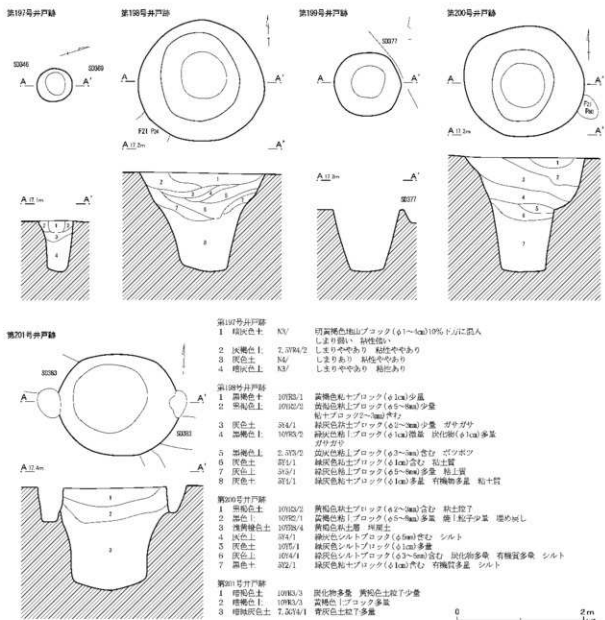
西区二面のF-21、G-21グリッドに位置する。

平面形は円形で、規模は直径106cmである。深さは100cmで、断面形はやや口の広がる筒形である。半截の途中で断面が崩落したため、断面の記録はとれなかった。井戸の最上部には大きな片岩が乗っていた。

出土遺物は第320図9～11に示した。遺物量は極めて少なく、須恵器の甕・環・高台付環、曲物の破片など10点が出土した。

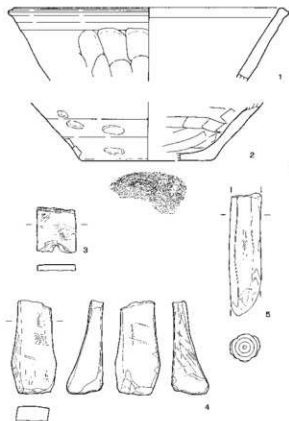
第200号井戸跡 (第318図)

西区二面のF-21グリッドに位置する。東側でF-21グリッドP80を切っている。平面形は楕円形に近く、規模は長径194cm、短径175cmを測る。長軸方向はN-66°-Wをとる。深さは184cmであり、断面形は漏斗形で、下部の井戸中心部分の直径は81cmである。覆土最下層に相当する7層と、その上の6層は有機物を多量に含み、うち6層には炭化物も多量に含まれていた。井戸の廃絶時に多量の廃棄物をまと



第318図 井戸跡 (14)

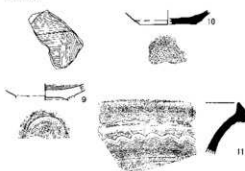
SE196



SE198



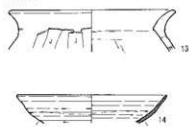
SE199



SE201

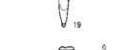


SE203



0 5cm 1:1

SE207



0 5cm 1:1

SE208



SE210



SE209



第320团 井戸跡出土遺物 (13)

めて投棄したものと考えられる。

出土遺物は少なく、土師器の環、須恵器の環、片岩の欠片などが出土したが、図示できるものはなかった。

第201号井戸跡（第318図）

西区二面のH-20グリッドに位置する。第383号溝跡を切り、東西でピットに切られている。平面形は楕円形で、規模は長径195cm、短径166cmを測る。長軸方向はN-70°-Wをとる。断面形は漏斗形で、深さは165cm、下部の井戸中心部分の直径は140cmである。覆土最上層にあたる1層には、炭化物が多量に含まれていた。埋設の最終段階で投棄されたものと考えられる。

出土遺物は第320図12に示した。遺物量は極めて少なく、須恵器の甕・環、土師器の小破片が出土した。須恵器の甕は内面に当て具痕のないものも出土した。須恵器の環の底部にはヘラケズリが施されている。

第202号井戸跡（第319図）

西区二面のH-21グリッドに位置する。第427号溝跡、第429号溝跡、H-21グリッドP31を切っているが、調査のための排水溝に東側半分を大きく切られている。平面形は円形と推定され、規模は直径182cmである。断面形はやや口が広がりつつ立ち上がる形である。深さは133cmである。

出土遺物は極めて少なく、土師器の甕の破片、片岩の欠片など4点が出土した。図示できるものはなかった。

第203号井戸跡（第319図）

西区二面のH-22グリッドに位置する。第408号溝跡、第464号溝跡、第43号掘立柱建物跡、H22グリッドP50を切っている。平面形は東西方向にやや長い楕円形で、長径188cm、短径170cm、長軸方向はN-86°-Eである。深さ120cmまで調査を進めたが、

壁が崩落する危険性が生じたため、以下の調査を断念した。断面形は漏斗形で、下部の井戸中心部分の直径は84cmである。

出土遺物は第320図13-16に示した。遺物量は少なめで、灰胎陶器の高台付壇、土師器の甕、須恵器の甕、土錘などが出土した。

第204号井戸跡（第319図）

西区二面のG-19グリッドに位置する。平面形は円形で、中心部は北寄りにあり、規模は長径150cmである。深さは178cmで、断面形はやや口の開く筒形である。下部の井戸中心部分の直径は87cmである。

出土遺物は極めて少なく、須恵器の甕の破片、土師器の小破片が出土したが、図示できるものはなかった。

第205号井戸跡（第319図）

西区二面のH-20グリッドに位置する。南側で第384号溝跡を切っている。平面形は南北にやや長い楕円形で、規模は長径76cm、短径60cmである。長軸方向はN-7°-Eをとる。深さは74cmと比較的浅く、断面形は筒形である。

出土遺物はなかった。

第206号井戸跡（第319図）

西区二面のE-23グリッドに位置する。北側でE-22グリッドP27に切られている。平面形は円形で、規模は直径142cmである。深さは164cmで、断面形は底部に向かって径が小さくなる漏斗形である。覆土はほぼ2層の単層で、一度に埋設したと考えられる。

出土遺物はなかった。

第207号井戸跡（第319図）

西区二面のE-21グリッドに位置する。南東側で第144号井戸跡に切られている。平面形は円形で、規模は直径128cmである。遺構半截の途中で断面が崩

落したため、断面の記録は残せなかった。深さは162cmあり、断面形は細めの漏斗形である。

出土遺物は第320図17・18に示した。遺物量は少ない。底部全面にヘラケズリを施した須恵器の環、片岩の欠片、木製品の一部や小杭など13点が出土した。

第208号井戸跡（第319図）

西区二面のF-22グリッドに位置する。平面形は本体が円形で南東側に半円形の張り出し部が付いている。本体部分の規模は直径94cmで、張り出し部を含めると長さ135cmである。深さは122cmを測り、断面形は底面からまっすぐ立ち上がる筒形である。

出土遺物は第320図21に示した。遺物量は少なく、須恵器の環、土師器の小破片、礫が出土している。

第209号井戸跡（第319図）

西区二面のF-21グリッドに位置する。平面形は円形で、規模は直径132cmである。深さは169cmあり、断面形は底面からまっすぐ立ち上がる筒形である。覆土4層では青灰色砂質土層が層状に数枚堆積し、各層の下端には薄い炭化物層の堆積が確認されている。

出土遺物は11点と少なく、土師質の須恵器の環、砂岩質のやわらかい礫、片岩が出土したほか、須恵器の甕、高台付埴、土師器の環など混入とみられる遺物も出土した。

第210号井戸跡（第321図）

西区二面のE-23グリッドに位置する。南西側で第275号溝跡およびピットを切っている。平面形は南北にやや長い楕円形で、規模は長径295cm、短径275cmと大きい。長軸方向はN-4°-Wである。深さは190cmあり、断面形は角のやや丸い筒形である。

出土遺物は第320図23・24に示した。遺物量は一定量あり、在地産の鉢の破片、中世陶器、瓦の破片のほか、土師器の甕、須恵器の環など多数の遺物が混入していた。23は混入遺物とみられる。24の瓦は平

安時代かそれ以降のものであると考えられる。

第211号井戸跡（第321図）

西区二面のE-23グリッドに位置する。第133号井戸跡、第276号溝跡、第413号溝跡を切っている。多くの遺構と重複するが、なかでも本遺構が最も新しい。平面形は円形で、規模は直径223cmである。深さは210cmあり、断面形は径の大きい筒形である。

出土遺物は第322図1～5に示した。遺物量は一定量あり、中世陶器、在地産の鉢、曲物の底板とみられる木製品、木製漆塗椀、片岩の欠片などが出土した。曲物の底板と木製漆塗椀については、樹種同定をおこなった。その結果、曲物の底板はヒノキ製、木製漆塗椀はクリの木で作られていることがわかった。分析の詳細はⅧ-2に掲載している。このほかに、灰釉陶器の長頸、須恵器の環・甕などが多数混入していた。

第212号井戸跡（第321図）

西区二面のG-23グリッドに位置する。第6号円形周溝状遺構およびG-23グリッドP23を切っている。平面形は円形で、規模は直径80cmと小さい。深さは154cmあり、断面形は筒形である。覆土1層は炭化物が多量に含まれていた。

出土遺物は第322図6～10に示した。遺物量は一定量あり、須恵器の高台付埴・甕の破片、土師器の環・皿・甕などが出土した。

第213号井戸跡（第323図）

西区二面のE-24グリッドに位置する。北側と西側の上層の一部を攪乱されている。また、中央では第411号溝跡、第452号溝跡を切っている。平面形は東西に長い楕円形で、規模は長径332cm、短径262cmを測る。長軸方向はN-79°-Eである。深さは206cmで、断面形はやや口を開きぎみに立ち上がり、底面中央部に凹みをもつ形である。深さ150cmまでは断面で堆積状況を確認できたが、これ以下は湧き水の

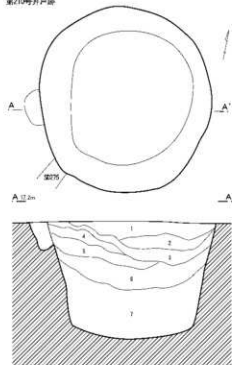
勢いが激しくなり、側壁崩落の危険性が生じたため、出土状況図などの図面作成を断念して、底面近くまで調査して遺物を採取後、写真撮影と平面図を作成して、ただちに埋め戻した。

断面形は径の大きな筒形だが、縦に打ち込まれた複数の井戸枠材が遺存していたこともあり、断面で確認した覆土の堆積状況から、使用時の規模が推定できる。井戸は、大きめに掘り方を掘削した後、底部中央に四角い板状の石材を据え、底板のない曲物を据えて、曲物の周囲に長さおよそ80～160cmの木材を縦に打ち込んで補強し、土圧を防ぐように構築

されている。曲物の上端付近には横方向に組んだような細い木材が数本出土しており、井戸枠を横木でさらに補強したものと考えられる。上記の井戸枠を埋設した後に、掘り方と井戸枠の外側を埋め戻している。

井戸枠は直径41.4cmで、底面中央の凹みの直径とも合う。断面にみられる4層の幅も考慮にいれば、井戸本体の直径は41～51cmであったと推定される。縦に打ち込まれた木材には、丸太状のものや角材状のものがあり、加工材だけではなく、第328図37の獣先の未製品のような転用品などが利用され、長さや

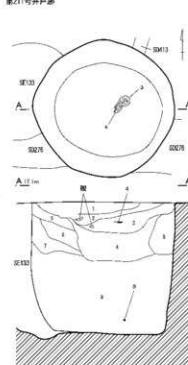
第210号井戸跡



第210号井戸跡

- 1 黒褐色土 10702/1 におよぶ黒褐色ロームブロック(φ1～8cm)25%
しまりあり、粘性中～あり
- 2 灰色土 576/1 灰褐色土ブロック(φ2～7cm)15% しまりややあり
粘性あり
- 3 暗緑灰色土 2.8704/1 暗緑灰色土ブロック(φ3～10cm)30%まばらに混入
しまり弱い、粘性強
- 4 暗灰色土 50/1 暗灰色土ブロック層状に20%混入 しまり弱い
粘性あり
- 5 暗灰色土 1006/1 暗緑灰色土層状に10%混入 しまり弱い、粘性強
- 6 暗灰色土 1006/1 暗灰色土質10%混入 しまり弱い、粘性強
- 7 暗灰色土 1006/1 暗灰色土質5%混入 しまり弱い、粘性強

第211号井戸跡



第211号井戸跡

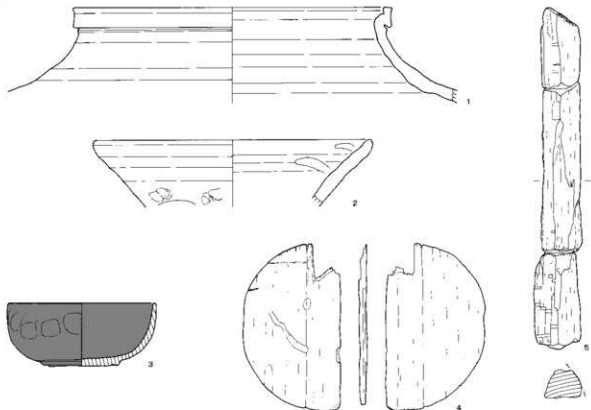
- 1 暗灰色土 10702/1 暗灰色土質土ブロック(φ1～3cm)25%程度
混入、土層層状を多く含む しまりあり、粘性あり
- 2 暗灰色土 10702/1 暗灰色土質土ブロック(φ3～5cm) 10%程度
しまり、粘性あり
- 3 黒褐色土 10702/1 黒褐色土質土質が層状に多く混入 しまりあり
粘性強
- 4 赤色土 202/1 地表面直下の層面に厚さ(φ3～4cm)
ほどの赤色土質土層が埋積
- 5 赤色土 2.302/1 暗灰色土質土(φ1～2cm)10～15%程度混入
- 6 赤色土 302/1 しまり弱い、粘性強
- 7 赤色土 82/1 しまり弱い、粘性強
- 8 赤褐色土 10702/1 暗灰色土質土15%程度、しまり弱い、粘性強
- 9 赤色土 202/1 しまり弱い、粘性強

第212号井戸跡

- 1 赤褐色土 10702/2 灰化物多量 暗褐色土ブロック少量
- 2 赤褐色土 10702/2 灰褐色土ブロック多量
- 3 赤褐色土 10702/1 粘性強

第321図 井戸跡(16)

SE211



SE212



第322図 井戸跡出土遺物 (14)

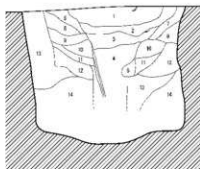
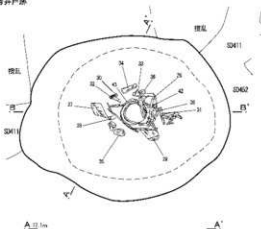
幅にはばらつきがあって規格はないようである。利用できそうな木材を寄せ集めて使用した可能性が考えられる。曲物の下、やや北東寄りで大きめの四角い板状の石材が埋め込まれていた。この石材の下からは木製の櫛が出土した。

出土遺物は第324～329図に示した。遺物は主に、上部の自然堆積の覆土中から出土した。掘り方の埋め戻し土の中からは、遺物はほとんど出土していない。遺物量は多く、多数の須恵器の環・甕・羽釜・高台付碗、灰釉陶器、土師器の破片、片岩の欠片が出土した。このほかに、井戸枠として利用された曲物、木製の櫛、木材などが多数出土した。26の木製

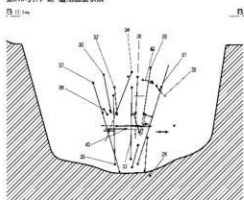
の櫛は、曲物を取り上げ、磔を取り上げたさらにその下から出土した。櫛は完全ではないことから、井戸が機能していた頃あるいはそれ以前に捨てられたものと考えられる。

本井戸跡から出土した木製の櫛(26)、井戸枠に使用された木材(31)、井戸枠に転用された鉄の未製品(37)、井戸枠の曲物(25)の4点の木製品について、樹種同定をおこなった。その結果、井戸枠に使われた木材と鉄の未製品はコナラ属コナラ亜属クヌギ節の木材、曲物の一段目の側板はヒノキ、櫛は重硬で強度の高いイスノキで作られていたことがわかった。分析の詳細はⅧ-2に掲載した。

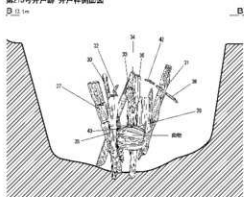
第213号井戸跡



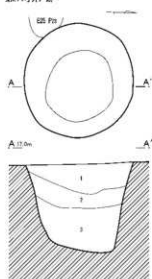
第213号井戸跡 遺物出土状況



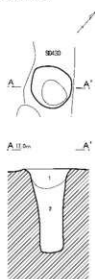
第213号井戸跡 井戸横断面図



第214号井戸跡



第215号井戸跡



- | | |
|----------|--|
| 1 黒褐色土 | 10R2/3 赤土粒多量 灰化物多量 井戸壁土 |
| 2 濃い黄褐色土 | 10R4/3 黄褐色土ブロック多量 粘土粒多量 井戸壁土 |
| 3 黄褐色土 | 10R4/1 灰土ブロック多量 灰化物多量 井戸壁土 |
| 4 黒色土 | 10R2/1 灰化物多量 黄褐色土粒多量 粘土粒少量 しまり強い 粘性強い 井戸壁土 |
| 5 黒褐色土 | 10R3/1 赤土ブロック少量 しまりあり 粘性強、断り方 |
| 6 黒褐色土 | 10R2/3 黄褐色土ブロック多量 粘土粒多量 灰化物多量 井戸壁土 |
| 7 黄褐色土 | 10R2/1 黄褐色土ブロック多量 灰化物多量 井戸壁土 |
| 8 黄褐色土 | 10R4/1 粘土粒多量 黄褐色土粒多量 断り方 |
| 9 灰黄褐色土 | 10R4/2 黄褐色土粒多量 断り方 |
| 10 黄褐色土 | SK2/1 黄褐色土粒多量 断り方 |
| 11 黄褐色土 | SK4/1 ブロック多量 断り方 |
| 12 黄褐色土 | SK2/1 黄褐色土ブロック少量 粘性強、断り方 |
| 13 黄褐色土 | 10R3/1 黄褐色土粒多量 断り方 |
| 14 黄褐色土 | 10R3/1 黄褐色土粒多量 断り方 |

- | | |
|----------|-------------------|
| 第214号井戸跡 | 2 S2/1 黄褐色土ブロック多量 |
| 1 黒褐色土 | SK4/1 赤土ブロック多量 |
| 2 黄褐色土 | SK4/1 赤土ブロック多量 |

- | | |
|----------|---------------------------|
| 第215号井戸跡 | 10R3/2 黄褐色土粒少量 |
| 1 黒褐色土 | 10R3/1 黄褐色土粒多量 しまり強い 粘性強い |
| 2 黒褐色土 | |



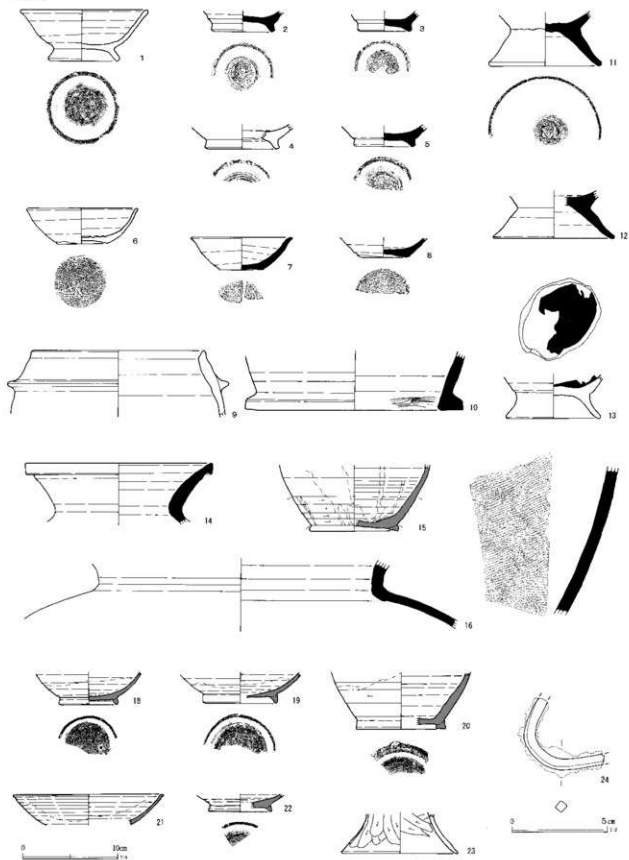
第323図 井戸跡 (17)

第214号井戸跡 (第323図)

西区二面のE-25グリッドに位置する。西側でE-25グリッドP23を切っている。平面形は円形で、規模は直径182cmである。深さは140cmあり、断面形は立ち上がりかやや緩やかな筒形である。

出土遺物は極めて少なく、須恵器の甕、土師器の坏の破片、碟など8点が出土したが、図示できるものはなかった。出土した須恵器の甕の破片の内面に、当て具の痕跡がみられない。

SE213



第324团 井戸跡出土遺物 (15)